

二次元

震災に負けるな! 屈しないヒロインのように立ち上がろう!

cover illustration by  
そりむらようじ

2D DREAM MAGAZINE

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

表紙&ピンナップテレホンカード  
応募者全員サービス

立ち読み版

特別  
付録

そりむらようじ  
冷泉  
いるま  
かみり  
ピンナップポスター!

大好評連載&読み切り小説

ディバインハートマキナ  
黒井弘騎×KAGEMUSYA

筑摩十幸×こうきく  
空蟬×牡丹

桜空×あるほ  
さかき傘×e4

天戸祐輝×そりむらようじ

大人気えっちマンガ&カラーマンガ

無望菜志

超昂閃忍ハルカ  
MISS BLACK

ばふえ / おおたたけし / 琴慈  
からすま弐式 / ピラノ

新連載小説

豪華2本立て!

新連載  
小説1

あとみつく文庫の  
大人気シリーズ!!

呪詛喰らい師

蒼井村正×或十せねか

新連載小説2

換身の騎士アルベルト  
淫靡な魔女と入れ替わった肉体

狩野景×緑木邑



vol.58

2011

06

DIGITAL  
EDITION  
電子版付

名家に生まれた、高貴な若き騎士が  
女体化して淫靡に悶え狂う!!

換身の騎士

# アルスト

淫靡な魔女と大れ替わった肉体

第一話 魔女討伐

小説  
NOVEL

かりのけい  
狩野景

挿絵  
ILLUSTRATION

みどりきむら  
緑木邑



その奥に設えられた寝台の上で、手指の爪に赤い染料を塗りながら、美麗な女性がゆつたりとしたクッションへ怠惰に身を預けていた。

「――魔女、ナスタロヴィカ！」

ポリリウム豊かな漆黒の髪を色白で物憂げな退廃の美貌に垂らす。

「あらあ、通り抜けられたんだ。まだ経験不足の騎士さんって感じだけど案外とやるじゃない」

拍子抜けするような軽い口調。

けれども緊張を緩めることなく剣を構え、アルベルトは闘志の宿った眼差しを向ける。

「妖魔を使役して近隣を襲い、人々を拐かしては禁忌の研究を繰り返す厄災の魔女めっ！ 白鷲騎士団百人長アルベルト・メリンが貴様を討伐する!!」

民の苦しみに憤る声を漂と響かせる。

「うふ、嬉しいわ。あたしのためにわざわざこんな僻地にまで来てくれたのね。それじゃあ、たっぷりとおもてなししなくっちゃ」

だがその宣言にも、ナスタロヴィカは楽しげな笑みを浮かべ寝台から起き上がった。

「――うっ！」

その姿に生真面目な騎士が息を飲む。

長い手足が長身をよりしなやかに見せるその胸で、美麗な釣り鐘型をした大きな乳房がはち切れんばかりに熟れ実っている。

細く括れた腰を悩ましくくねらせると、桃型をした張りのある尻と申し合わせたように、壘惑の楯円に拉げて揺れ弾む。

思わず、邪悪な敵ということ忘れて見とれてしまっただけに美しい立ち姿だった。

しかもその艶めかしい肢体を包んでいる鎧は、両肩と両手両足に腰の他、豊富な乳房と股間を僅かに覆うだけの極端に露出が多いものだった。

二の腕や太股ばかりか、狙われやすく致命傷になりやすい柔らかい腹部と背面がから空きだ。

(ま、まるで、裸……じゃないか……) すべやかな腹部に形の良いへそが窪む。陰毛が見えそうなほど際どい位置から小さな逆三角形が股間を辛うじて隠す。

その様に、鍛錬に明け暮れ女性と遊ぶこともしなかった純粹無垢な青年騎士が動揺を覚える。(騎士たる者が女性の色香に惑わせられるなど!) 気を引き締めようとするが免疫のない壘惑に頬が赤らむ。相手の目を睨み付けていても、その下方でむちむちと弾む柔乳に目を奪われる。

「うふ、遠慮しないでもつと見てもいいのにく、どうせこの身体はすぐに……」

「黙れッ！ そのようなふざけた鎧だからといって手加減はせぬぞっ！」

「ああ、人の話を遮るようなせつかちな男は、女に嫌われるわよ」

マナーを心得ない未熟な少年をたしなめるような口調で、血のように赤い唇から溜め息を漏らす。

爪を染め終わった染料の装飾的な小瓶を掲げる。すると唐突にその小瓶が彼女の手の中で、やはり華美な飾りがなされた一振りの剣へと姿を変えた。

「怪しげな、技をッ！」

アルベルトが目を剥き警戒を強める。

「炎、矢ッ！」

鋭く振り下ろされた細剣の先から、多数の炎の矢がアルベルトに殺到する。

「メリン家に代々伝わりし宝剣ヨルランデよ、邪な魔の力より我を護りたまえッ!!」

だが清廉な騎士は手に持つ刃に念を込めると、飛び

来する炎を薙ぎ払う。

「あら？」

「無駄だっ！ この宝剣の前では魔の力などなんの意味もなさない」

彼女の魔法は剣の能力によって無効化された。「抵抗をやめて我が縛につけ。そうすれば王都にて裁きを下し、しかるべき刑罰を与えよう」

「うふふ、もう勝ったつもりなのかしら。本当にせつかちな坊やね」

だがナスタロヴィカは余裕の態度で情け深い騎士をせせら笑う。

「魔法はお気に召さないようだから、こちらで相手していただくかしら」

今度は細身の刃から炎は放たず、無造作に手に握つたまま、

「はい」

一瞬にして間合いを詰めてくる。驚くべき素早さで魔法の切っ先がアルベルトの胸元を抉りに来た。

「うおっ!!」

驚いて床に転がりながら身をかわず。転がる勢いを利用してすぐに立ち上がり剣を構える。

「うふ、よく避けたわね。じゃあこれはどうかしら。風の翼よッ！ はっ!!」

壘惑の美身が突風に吹き上げられ、乳房をたわませて高い天井スレスレまで舞い上がった。

まばたきも許さぬ信じがたい速度で速度で急降下し、アルベルトの脳天へと切っ先を繰り出す。

「うおっ!!」

慌てて必死に長剣を振り上げる。

加速で威力を増した細剣の刃を肩口で受ける覚悟で、アルベルトはナスタロヴィカの美貌めがけて切っ先を突き込んだ。

「――!! くっ、おとおおっ」

が、刃が届く寸前、白鎧の騎士は真上に突き上げ



その剣を急激に足元めがけて振り下ろす。

身体が前のめりになり、落下する敵の剣へ後頭部が無防備に晒された。

しかし突き刺さるはずの鋭い刃は、彼の身体をすり抜け幻影のように掻き消えた。そして、

「ひゃわっ！ よ、よく見破ったわね……」

渾身の力で急激に方向転換して振り下ろした長剣が、魔法の細剣を叩き折って床にめり込んでいた。

その切っ先ギリギリに妖艶な美貌の頬を掠めさせて、ナスタロヴィカは脱帽といった様子で仰向けに身を投げ出していった。

「飛び上がったと見せかけたのは、魔法で作り上げた写し身だな」

床から切っ先を引き抜き魔法のたおやかな首筋に突きつけると、降参とばかりに折られた剣の柄を放し、両手を頭上に投げ出す。

その際に妙な科を作って甘い溜め息をこぼしゆっくりとまばたきして、気怠い色香を漂わせる。

「は、聖物そうなお坊ちゃん騎士だから、こういう手は絶対引つかかると思ってたのに」

唇を尖らせながら悔しそうに細い腰をくねらせる。剣を受けたときに踏ん張ろうとしたのだろう、仰向けになっても両脚は膝を立ててMの字に大きく開帳されていた。

肝心な部分を覆う垂れ布はひらひらと簡単に捲れて、局部をギリギリ隠すだけの股当てをさらけ出す。下腹に向かう部分では蠱惑的な形状の土手がこんもりと盛り上がり、目にはしているとなか落ち着かぬ気分が苛まれてくる。

「あらん、どこ見ちゃってるのかしら？ あたしのココ、気になるのお？」

挑発するように彼女が指先で股間をなぞると、女蕾を覆う股当てがくゆるんと溝を窪ませた。

(く……ッ、魔法、め……)

目を逸らすと今度は、鎧姿というのものはばかられる布一枚纏っていない生の腹部を直視してしまった。

腰が絞ったように細く括れている。

撓わな美房が弾け出てしまいそうな乳当てが、僅かな身動きにもゆさゆさと揺られて視界に飛び込んでくる。

「もう、そんなにエッチなところばかり見詰められると、恥ずかしいわ。おかしな気持ちになっちゃやう」

そう言いながらも、見せつけるように胸を迫り出す。またしても撓わな巨房が、ゆつき、と弾みながら肉感を強調してアルベルトの目を惑わせた。

「そ、そのような破廉恥な格好を自分からしておいて、なにが恥ずかしいだ！ いまさら慎ましいふりをして誤魔化されぬぞ!!」

露出の激しい身体を見ないようにしながら彼女のふざけた態度を叱り付けた。悪辣な魔法女であるはずなのに独特の愛嬌を備えた退廃的な美貌を睨み付けることになり、生唾を飲み込む羽目になる。

いまだ性交の経験がない奥手な騎士には実に目の毒な敵であった。

「まずはこれを着ろ！」

用意してあった手錠と足枷を投げて渡すと、敗北したというのに少しも焦りや恐れを見せぬ魔法女が、クスクスと忍び笑いを漏らす。

「へ、こういうアブノーマルなのが趣味なの？ 手足の自由をきかなくしたあたしを気が済むまでいたぶり尽くすってわけね？ 燃えるわ」

「私は執行人ではない。裁きの結果そのような刑罰が必要なら役割の者が与えるだろう。それは魔術封じの枷輪だ。術を使おうとすれば魔力に反応し、術者を緊縛する」

特殊癖を知らず、くそ真面目に答えるアルベルトのからかいがない奥手さに苦笑しながら、魔法女が頑丈そうな鎖で二つの金属輪をつなげた拘束具を自分で両手両足にかける。

「もう少し洒落なデザインだったら素敵なのに」

全く装飾性のない無骨な形状に拗ねた表情をする。敵に捕らえられこのままでは死罪は免れぬというのに、あまりにも落ち着き払った魔法女の態度がアルベルトには理解できなかった。

(まさか、この状況から逃れる術をまだ隠しているというのか？ しかしこれで魔術は封じ込められ、剣も役に立たない……)

どう見ても打つ手はないように思えるのだが、彼女の挙動を一瞬たりとも見逃すまいと気を引き締めたそのとき、

「風の精霊よ、我に……ひやううっ！」

手足の枷を着け終わると同時にナスタロヴィカがいきなり呪文の詠唱を始めた。

途端に輪をつなぐ鎖の長さが最短に縮まって、両手両足それぞれを密着させた。

最低限の歩幅が確保されていた両足は強制的に踵と踵が合わせられ、胡座から膝を立てて座るあらゆる姿勢を取らされる。

両腕も身体の幅ぐらいの間隔は動かせられる程度になっていたので、すまして座る猫の前足のようになり、身体の前で手首同士を密着させられた。

窄まった両腕の狭間で弾力的な巨乳が押し潰され、縦長の楕円に拉げて谷間を強調している。

足を揃えられ、手を突いてバランスを取ることでもできず、肉感的な安産型の尻をたわませて横に転がってしまふ。

しかも、ただ身体の自由を奪っただけでなくその無骨な金属輪は手首と足首をもの凄力で締め付けて、ナスタロヴィカに激痛を与えていた。

「い、痛……いつ!! 助け、てえっ!!」

「馬鹿な！ 魔封じの仕掛けがしてあると言っただ

ろう!! それなのになぜ!」

「だってえ、もし使ってみたらどうなるのか、試してみたいじゃないの。こんな痛いことになるんなら教えないよお!」

訳が分からない。そんなことを告げる義理はない。それよりもこの仕掛けが命を奪うような強力なものだったらどうするつもりだったのだろう?

生真面目な騎士には理解不能な言動ばかりする魔女に困惑する。

「外部からすぐに効力を解除する方法はない。しかし枷を外してやるわけにはいかないから我慢しろ。時間が経てば締め付けも鎖の長さも元に戻る」

「なんてものあたしに着させるとのよっ!」

命を奪わなかっただけでもアルベルトとしてはかなり寛大な決断を下したのだ。なのにまるで騙されたみたいな態度の魔女にますます調子が狂った。

「ううう。どっちにしろ、こんなんじや歩けないわよ! 起き上がれないし、歩くなんて無理!!」

確かに手足の自由を完全に奪っては逆らうのはもちろん、移動すらできない。

「仕方ない、効力が和らぐまで担いで運搬するしかないか……」

迷路のような洞窟内に残してきた部下の安否が気になるし、一刻も早く王都に戻り魔女討伐を騎士団長に報告したかった。

「暴ればこれ以上は容赦しないぞ」

警告しながら剣を鞘に収めると、アルベルトは床に寝転がるとナスタロヴィカの傍らにしゃがみ込んだ。背負うのが一番楽だが、拘束したとはいえ敵に背中を向けるのは不安が残る。

(これしか、仕方ないか……)

両手がふさがるし体勢も不安定だが他に方法がない。仲間たちと合流するまでの辛抱だと決心し、アルベルトは膝裏と背中をそれぞれ腕で支えて、魔女

を自分の胸の前まで抱え上げた。

「きゃは♪ お姫様抱っこしてもらっちゃったあ」  
途端に魔女がはしゃいだ声を上げる。

「――ふざけるな。貴様のような不浄な魔女など、姫様の足元にも及ばぬ! 次にふざけたことをぬかしてみる!! その舌を引き抜いてやるぞ!」

騎士として王に剣を捧げた日、つかの間拜謁した気高き微笑を湛えるまだ年若い白銀の髪的美姫。

いずれは女王としてこの国を導いてゆく高貴な存在に、戯れであろうとも己を比べるなど許されるものではない。

(しかしこの抱き方に、そのような俗称があったのか……)

不敬だと思いつつも、妙に意識してしまう。

身分の差がありながらも、王女殿下と仲睦まじく婚約も間近と噂される白鷺騎士団長。

彼も姫の小柄な身体をこのように抱き上げたことがあるのだろうか?

(な、なにを邪推しているのだ、私は!?)

魔女を叱りながらも、自分まで失礼な想像を脳裏に浮かべていた。

(それにしても……女の身体というのは、こんなに柔らかいもの、なのか……?)

露出の高い鎧を身につけているため、ナスタロヴィカの生肌は直にアルベルトの腕へ密着していた。

男の身体とは構造からして全く違う、すべやかでしっとりとした触り心地に絶句する。

男女の睦みごととはきちんと婚姻を結んでから行すべきだと思ひ、いくら仲間たちに誘われても金銭で女を抱くことは頑なに拒んできた。

しかしこのように初めて女体と密着して、彼らの

気持ちは分かったような気がする。

(軽いな……、それにこんなに休つきも華奢で。これでよくあれだけの剣を振るえたものだ。それにし

ても、なんだ、この甘い香り? 香料をつけているのか……? いや、その匂いではなく、もつと生々しい……肉体的な香氣というか……)

柔らかな肌は剣を交わした果てにしっとり汗ばんで、温かな体温を伝えてくる。

手荒に力を込めれば簡単に壊れてしまいそうな肢体から漂い来る魅惑の香りに我を忘れてみると、鼻にかかった囁き声が耳朶を擦った。

「あたしの身体を味わいたい? そんな顔してる。いいわよ。勝負に負けたのだからあたしはあなたのモノ。思うままに好きにして……」

縛められた手を押し当てて乳房の肉感を強調しながら、ナスタロヴィカは身をくねらせた。

男とは根本からして異なる、曲線的な魅惑の仕草に抗いようもなく心を惹かれる。

「――!! き、貴様、いつの間に!?!」

魔女に苦痛を与えていた枷の締め付けが和らいでいた。輪をつなぐ鎖も最低限の身動きが取れる長さへ戻っている。その指でナスタロヴィカは騎士の胸板を撫で回してきた。

「わ、私に触るなッ!」

鎧の上からでも心地よくぐつたさが伝わってくる。敵の好きにさせるわけにはいかないと思いながらも、振り払う気力が湧き上がらない。

次々に脳裏へと浮かび上がってくる雑念に気を散らせている間に、思いがけないほどの時間が過ぎていた。我に返れば、魔女を抱え上げてからその場を一步も動いていない。

「お、おい。馴れ馴れしく、するなっ。こ、この」

魔女が頬を擦り寄せてくる。絹のような艶髪がさらさらと触れて溢れ来る溜め息を押し止めるのが難しい。触れ合う肌は綿のように柔らかく温かで、このままだでもこうしていたい誘惑に駆られる。

こんなに間近に異性の、それも絶世の美貌に迫ら

れたことなどない。

（はしたない……。女性の方から、このような……。でも、ああ……）

吐息をフツと首筋に吹きかけられると、背筋にゾクッと甘い震えが走った。

（しかし、なんという、良い香りだ。女の肌というのは、こんなにも甘い匂いが……）

動揺が純真無垢な騎士の胸を高鳴らせる。

部下たちが決死の思いで魔物を食い止めてくれているというのに。一刻も早く駆けつけて、ナスタロヴィカを召し捕ったことを皆に知らせ、この魔物が

召喚した使い魔を一掃しなければならぬのに。「くっ!! やめ、ないかつ、魔女めっ!!」

これ以上時間を無駄にはできない。部下たちの姿を脳裏に浮かべ誘惑を振り切ると、アルベルトは腕に抱き上げた魅惑の美身を放り投げようとした。

魔封じの拘束具が締めを緩め、もう自力で歩けるはずだ。この先は今度怪しい振る舞いをしたら即刻斬り伏せられるように剣を突きつけ連行するだけ。

だが魔女は手を放すよりも早く、両腕をアルベルトの首に絡みつかせてきた。

密着が更に深まり、彼女の熱い体温が心地よく侵食してくる。女体が漂わせる蜜のような体臭が濃さを増して鼻腔を満たした。

（……しまったっ!）

なんとという失態続き。油断するにもほどがある。手錠の鎖を武器に首を絞められる前に、と腰の剣に手を伸ばす。

だがナスタロヴィカが実直な騎士に仕掛けてきたのは、攻撃ではなく熱烈な口づけだった。

「……んむうっ?! にやにを? ひやめ……ろっ」

首筋に回されたしなやかな腕は彼を傷つけるどころか、優しい愛撫で髪を靡りながら乳房がやたらと

際立って熟したしなやかな身体を強く密着させて抱

きつてきた。

艶めかしい湿り気を帯びた肉厚の唇が甘く熱く彼の唇に粘り着いて、引きはがせない。

くちゅ、と唾液の音色が淫靡に響く。吐息が混ざり合って甘さを増す心地よさに脳裏がぼんやりと霧に覆われて、身体に力が入らなくなつた。

にゆるん、と軟体動物のように蠢く女の舌が口腔に潜り込んでくる。味蕾を弄ぶように舐め靡りながら、アルベルトの舌に絡みつく。

「へあああっ!!」

脳天が浮き立つその快感に身体中の力が抜け落ちて、生真面目な騎士はがくんと膝から崩れ落ちた。

（魔導の……術……? いや、しかし……）

魔封じの枷がある限り僅かにでも魔術を使おうとすれば苦痛と不自由が魔女を襲うはずだ。

「ああ、あなたが来る前からこの部屋に快樂の香木を焚きしめていたの。常用すると色狂いになってしまつて危険だからつてどこの国でも使用が禁止されてる強烈なものなんだけど、純情な騎士さんには刺激が強すぎちゃつたかしら〜?」

「な……、ん、だと……!?!」

この広間に踏み込んだときに嗅いだ甘つたるい匂いの正体はそれだったのかと思う。あまりに安っぽい香りで特に警戒することもなかった。

「そういうあたしも、もう身体が疼いて疼いて……気が変になりそうなもの〜」

全身が弛緩して起き上がれず仰向けとなつたアルベルトの上に、ナスタロヴィカは身体を覆い被せて密着していた。

くねくねと身をくねらせる彼女の際どい鎧からいまにもこぼれ出そうな乳房が、彼の胸板の上で艶めかしく拉げる。

「やめ……ろっ! 私の上から、どけっ!!」

いままで味わつたことのない極上の柔らかさが、

鎧の上からでも分かつた。

強敵を前にしたとき以上の勢いで心臓が鼓動し、息苦しさを覚える。押し退けようとした手が、彼女

のなにも纏わぬ細腰を直に触り、驚いて手放した。顔が焼けるように熱く充血している。

「どけだなんて……。もうこんなになつているのに、できるわけないわあ〜」

「……あうっ!?!」

魔女が上体を起こし、ホッと息を吐いたのもつかの間、膝立ちでアルベルトの上に跨がったまま腰鎧の股当て部分を指先で横に捲り上げた。

そこには淡い紅に色づいた肉の花弁が淫蕩に綻び開いて、内側から溢れ出た蜜にねっとり濡れそぼつていた。

（あ、あれが、女の……部分……!?!）

禁欲を常としていた騎士にとつて初めて目にする異性の神秘箇所を、まばたきも忘れて凝視する。

男の部分とはなにもかも違う潤んだ溝がぬめるそこは、否応なしに異常な興奮をもたらす。

股鎧の布地部分と糸を引いて粘り着く蜜液が、見詰めている間にも絶え間なく湧きだして引き締まつた内腿へと滴り落ちてくる。

漂い来る甘く爛れた発酵臭に鼻腔を擦られると、催淫の香木以上の痺れが脳裏を湧かせた。

いま彼女が彼から剣を奪い斬りかかつてきたら防ぐこともできないだろう。

そんな危機に焦りを抱くこともできずただ惚けた眼差しを一点に見据える。ナスタロヴィカは緩めた股鎧から女陰をさらけ出したままで、鎖につながらた両手を彼の股間に伸ばしてきた。

「あなたのこども、ほら、あたしと一緒に。もう欲しくて欲しくてたまらなくなっちゃってる」

自由を制限された手で器用に腰当てを外す。

「やめ……ろ、な、なに……を?」

微かに残った理性で抵抗を試みるが、少し前屈みになった魔女の胸で釣り鐘型に揺れる巨乳房と陰唇花弁をひくつかせる股間の間を、視線が行ったり来たりしてしまふ。

拒む行動も起こせぬままにズボンの前が開かれ、下穿きの中から尋常ではない疼きに苛まれる肉竿が引つ張り出された。

「ひうつ！」

ぶるんと打ち震えて弾け立つ感触に思わず喘ぎを返らせた。

「はわああ、素敵だわ！ おつきくて、遅しい!!」

その吐息に魔女の感嘆の声が重なった。

節くれ立つた幹を十分に太らせた黒光りする男根カリの張り出した鋭角的な亀頭を誘示している。

「こんな立派なものがあるのに、使わなかったなんてなんてもったいない。ああ、でもこれの初めてをあたしがいただけるのね？ ふああ、想像しただけで腰が抜けちゃいそう!!」

大量のカウパーを滲ませ、幹全体をてらてらさせる剛直に、肉感的な尻を振って魔女が興奮する。

「ぐうつ！ よせ、やめ……ろつ!!」

脈打ち続ける陰茎とは裏腹にアルベルトが呻くが、その屈辱の表情にナスタロヴィカはますます喜びに身を打ち震わせる。

「しゃぶったり、お乳で弄んだり……色々愉しみたいけどお、もう、あそこ、限界い……」

彼女の言葉は具体的にどうするのか、奥手な騎士には想像もつかない。けれどももの凄く淫らなことなのだが、いまは期待するかのようにながわくわくとときめく。

「挿入ないど、もう……頭おかしくなっちゃいそう。ふああああ……ッ!!」

騎士を跨いだまま膝立ちから、魔女が排便するようにはしたくない姿勢へと移った。彼女の足首にはめられた枷同士をつなぐ短い鎖が、アルベルトの腰を押さえつけますます身動きを封じる。

「なに……をっ!!」

性交の知識が乏しく、騎乗位という体位があることを知らない。戸惑う騎士の怒張へと、魔女ナスタロヴィカは興奮の焦りに太股を痙攣させながら、股間を真っ直ぐ下降させた。

「ほあああつ！」

「んおつ!!」

同時に迸る二人の上擦った声に重なって、ぬぶん、と亀頭の先端が灼熱の泥濘に埋まり込んだ。

（な……に……? ああつ!!）

性器の先端で溶け崩れた甘美の感触に、なにが起こったのかと顔を持ち上げる。

手錠をかけられた両手で自らの乳房を揉み上げ、破廉恥な魔女が淫らな表情を浮かべる。

躊躇の姿勢で降りてくるその股間の割れ目へと、そそり勃つた自分の男根がずぼりめり込んでゆく様を、アルベルトの生真面目な瞳が目撃した。

（入って……る？ 私の、が、魔女の、股に!!）

性の知識は乏しいが、なにをするかくらいは騎士団の同僚との雑談で知っている。けれども実際に自分で体験してみても、極太の怒張を咥え込んでしまう女穴の神秘に驚きを隠せない。

ヌルヌルの愛液に満たされた膣穴の中は、染みるほどに熱く、蠢く肉壁が熱烈に絡みついて狂おしい擦れ感を与えてくる。

（く……これほど、気持ちいい、とは……!!）

初めて女の肌をしつかりと触れ味わったときと同じに、なぜ仲間たちが安くない金を払ってまで女を買いに行くのかが分かった。

「く……あふ……」

キョんキョんと小刻みに締め付けてくる快感に溜め息が溢れた。窄まる襷壁を掻き分けて奥へ奥へと埋まってゆく感触は、一種独特の征服感を与えられるぬぶつ、ずぶぶ、にちゅ、ぬぶ、ぬぶずぶん！

溢れる愛液越しに粘膜が擦れる音色も興奮を掻き立てる。深々と根本近くまで埋まったときに、亀頭の先がなにか柔らかく窄まったものに突き当たった。それでも一気に腰を落とし、ナスタロヴィカが彼の下腹にべつたんと尻をつける。

「んあああつ!! 奥つ、突き上げられたあつ！」

亀頭の押し込みに子宮を迫り上げられ、魔女が切羽詰まった顔で悲鳴を上げて身を仰け反らせる。

一瞬苦しいのかと思つたが、その顔はしどけなく口元を緩めて甘美に浸りきっていた。

「すごい、太いの、膣内いっぱい満たしてらうつ。はうつ、勝手に腰動いちゃうつ!!」

ぬちゅつ、ずぶつ、ズボずぶつ、ヌプツ!

躊躇姿勢のまま、女が腰を上下に振り始めた。

襷壁が竿幹にヌルヌルの擦れ感を与えてくる。

「くふあああつ！ こ、こんな……つ!!」

初めて味わうヴァギナの感触にアルベルトは騎士とは思えない情けない声を上擦らせた。

顔を起こして見るその瞳には、爛れたように液濡れた淫裂の深穴へ極太く膨張した自分の陰茎が出たり入ったりする様子が映っている。

その卑猥さに胸が高鳴ると、連動したかのように男根が脈打つ。

「はう……ンツ!! ああつ、はあああつ！」

すると途端に肉穴がキュッと窄まって、女が切なき刺さっているのにつ！ くおつ、また締め付けが

つ!! それに、熱い汁が次々と!

痛くないのだからかと思うが、魔女の動きはどん





どんと激しさを増している。

「ああ、いっぱい入ってる。奥までズンズン来ちゃってるうっ！ ふあ、息、詰まりそお〜♪」

尻房が彼の下腹にムッチリ密着するほど深くまで腰を沈めると、奥の壺器官を亀頭の先がコツンとはね上げる。すると牝穴はその壺口から熱蜜をたつぷりと噴きかけ、鬚壁を波打たせてより強く充血竿を締め付けた。

「くおっ！ おあああつっ!!」

女が腰を上げベニスが抜け出てゆくと、膣内の感触を名残惜しむように騎士の股間が跳ね上がった。

「ひやうっ!! ふあつ、ああ、イイツ!!」

不意の突き上げに、魔女の背筋がビクンと反り返った。踏ん張る足が萎えて腰が墜落し、ジューブツ!!と膣汁を溢れさせて極太が根本までねじ込まれる。

「ひいっ!! おほおほおっ!!」

もつと深くにまで子宮を突き込まれ、ナスタロヴィカが唸り声のような嬌声を張り上げる。

(破廉恥なっ、なんて淫靡な、魔女っ!)

白目を剥いてだらしなくヨダレを垂らす魔女の痴態に、アルベルトの理性が灼熱した。

身悶えるナスタロヴィカの熱尻に指をめり込ませて支えると、下から無我夢中で腰を突き上げまくる。

「ふあああつ!! すご……ッ! ああ、膣内あ、ズンズン来るうっ!! 滅茶苦茶にされちゃううっ!!」

途端に淫蕩な魔女が喜悦の喘ぎをグラインドさせた。刺激を最大限に堪能しようと腰をグラインドさせた。

ぐつちゅ、ぬじゅぶつ! ねちゅ、じゅぶつ、ずちゅ、ずぼずぼずぼずぶんっ!!

狭穴を勢いよくピストンする硬竿に粘膜を掻き乱され、失禁のように愛液を垂れ流しながら鬚壁が痙攣を繰り返す。

(お、ああ、これが、女性との性交ッ! たまらなっ!! こんな甘美が……ふああああつ!!)

墮落の快楽と分かっていてももう止められない。指先を食い込ませ揉み込むと、張りのある弾力で押し返してくる尻肉の感触が気持ちいい。

黒髪を振り乱し、際どい鎖からはだけ出た美巨乳を、自分から弄び悩乱する異性を見ていると心臓が破裂しそうなほど興奮する。引き絞ったような細腰が、食欲に快楽を求めて淫猥にくねっていた。

ヌメリ汁まみれで絡みつき締め付けてくる膣穴に、怒張したベニスへと下腹から煮えたぎった熱塊が込み上げてきた。

「ひうあああつ、揉んでえ。乱暴に、しちゃつていいからあつ!!」

自分で弄るのでは物足りなくなつたとみえ、アルベルトの手を、波打つ豊満房に導く。

「く、ふあああつ、ち、乳房あつ!!」

「ンッ!! ンヒイイツ!! ふああ、イイツ!!」

蕩ける柔らかさに無我夢中で指をめり込ませると、魔女が仰け反って痙攣する。

強めに圧搾すると絶妙の弾力で押し返しながら、手の中に収まりきらぬ球肉がぐにぐにに拉げられる。絶え間なくねり続ける曲線美の女体から、濃厚さを増して官能汗が匂い立つ。

「あひっ! だめえつ、お、ちんちんっ!! またおつきくなつたあつ! 膣内でつ、騎士さんのちんちんおっ!! ひやうっ! イクッ、イツちゃううっ!!」

ガクンガクンと激しさを増して叩き付ける抽送に、ナスタロヴィカの身悶えも狂おしくなる。

過剰にさらけ出した白肌が上気し、甘い汗がむんむんと滲む。息苦しうに呼吸が速まる。

柔らかな乳房が粘度を増し、めり込んだ男の指先にねっとりへばり付く。まるで十本の指すべてを淫乱な牝穴に挿入しているような甘美が理性を奪う。

「ひあつ!! ふえつ、はつ、あ、はああああつ!!」

んひっ!! イ、クッあああああはあ——ッ!!」

がくんとひととき大きく仰け反ると、絶頂の悲鳴を張り上げる。キュウウンッと最大限に窄まった膣壁に、アルベルトの怒張が圧縮された。

(おあ、ああつ、締め付けて、るっ! 女の、中あ。こんなに、締め付ける、ものなのかつ!!)

熱いヌメリ液にまみれた柔らかな鬚肉が竿肌にもんべんなくへばり付いて力強く圧迫してくる。

(く、ああ、気持ちイイツ。女の、中が、こんなにっ!! くふうっ)

排尿に使う器官程度にしか認識していなかった。その男根から驚くほどの快感を絞り出すヴァギナの素嗜らしさに心が震えた。

理性を揺るがす疼きを覚えて熱く火照る。その肉棒の付け根の更に奥から、切迫的な衝動が急激に込み上げてくる。

(ふ、あ、なん、だ、これっ!! ながか、出るッ。出そうだつ、あああつ!!)

快楽が昂るほどに、灼熱の塊が大きさを増して、尿道に迫ってきている。排泄欲に似ているようになにかが全く異なる感触に戸惑いつつも、アルベルトはその誘惑的な衝動に従った。

締め付ける鬚穴との擦れ合いに導かれ、進む灼熱になにもかもを委ねる。

「うあ、はあつ、な、なにか、出るッ!! くふおおつ!! く、はあああつ!!」

充血した海綿体に疼きが走り抜け、根本まで迫り来ていた熱塊が堰を切つて尿道へと流れ込む。弾けるような熱い快感がその熱流に乗って溢れ出た。

どびゅっ!! びゅびゅびゅ! ぶつびゅううっ!! 亀頭がめり込んだ子宮へ激しい奔流が直撃する。

ぶじゃああつ!! びゅぶじゅばあああ——っ! 魔女の牝穴も絶頂の熱潮をお返しとばかりに、脈打つ肉怒張へぶちまけた。



淫惨さを増す  
虜囚への肛虐!!



耐えろ

耐えろッ



耐えろ

耐えろッ!



今は  
耐えるしかないッ

必ず好機は来る

奴の命を奪う  
その時まで

今は  
耐え忍ぶしか

かんぬきのみこ

# 門の巫女

中編

漫画 無望菜志



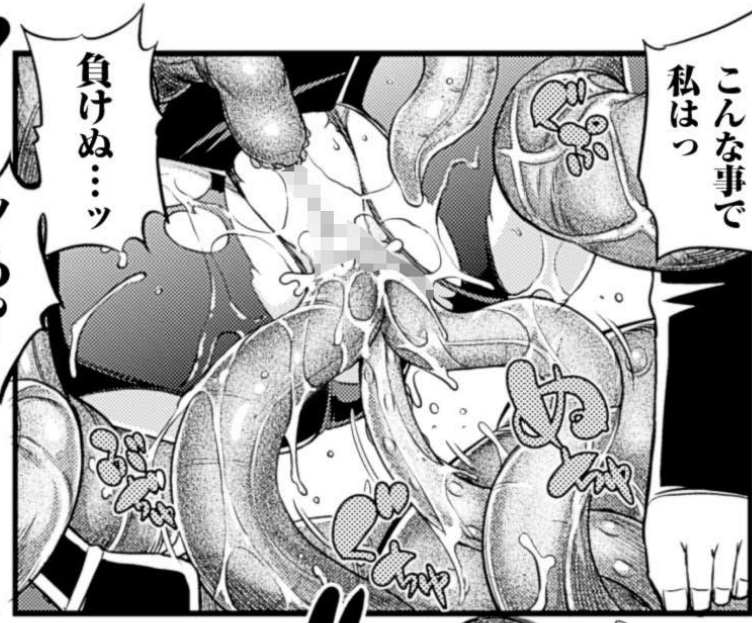




あるがままに  
感じるままに  
受け入れなさい

我らの愛を

ブル  
だ...まれッ



こんな事で  
私ほっ

負けぬ...ッ

ツッあ!?



ややめろ!

引ッ張る  
なアッ!

ま



あおい さらまさ  
小説 蒼井村正  
NOVEL

あると  
挿絵 或十せねか  
ILLUSTRATION

街に潜む怪奇を、  
ボンテージ姿のセクシー  
退魔師がエッチに解決!!

# 呪詛喰らいの師

カースイーター

封の一呪鼠





## プロローグ

そこは、白く輝く砂丘が見渡す限り続く、広大な砂漠であった。日差しはさほど強くなく、心地良い風が吹き抜けてゆく頭上には、白い雲塊が緩やかに流れてゆく青空が広がっている。

四方を見回しても茫漠たる砂の連なりしか目に入らぬ不毛の大地に、白い円卓がポツリと設置されており、卓の周囲に並べられたイスに腰掛けた、人影が三つ。

円卓の上には、人数分の茶器の他に、色鮮やかな京菓子が盛られた小皿が置かれており、ここが砂漠の真ん中であるということを別にすれば、午後のティータイムらしい和やかな雰囲気を出していた。「いつ見ても、ホントに何も無い所ねえ。こんな殺風景な所でお茶しなくてもいいんじゃないの?」

茶菓子をモグモグと噛みつつ、砂漠を見回して声を上げたのは、褐色の肌と豊かに波打つ銀髪が、エキゾチックな色香を放つ美女であった。

メリハリの利いた野性味溢れる肢体を、露出度の高い黒革のビザールファッションに包んだ彼女の名は、ゼムリヤ・イリュージア。謎の術者集団、九未知会の一員を名乗る淫蕩な性格の繰霊術師である。「ゼムリヤさんは風情がありまへんなあ。こんな場所やからこそ、緑茶やお菓子の色が、より映えるのですよ」

茶器に急須から緑茶を注ぎながら、穏やかな京訛りの口調で告げたのは、尼僧姿の女性。

見た目の年齢は、二十代後半から三十前後であろうか、伏し目がちになっている切れ長の目と、神秘的な笑みをたたえた深紅の唇が、白と黒の地味ないでたちに成熟した女性の落ち着いた艶やかさを与えている。

彼女は、僧名を阿絡尼あらくにという。

「この砂漠に似つかわしくないという、ゼムリヤの意見には同意するが、こういうミスマッチな場所での茶会こそ、我々のようなイレギュラーな存在には似つかわしいのではないかな?」

男物の白スーツに身を包んだ男装の麗人が、皮肉っぽい口調でつぶやいて湯飲みを傾けた。

ラフなショートカットにした銀灰色の髪と、常に苦笑を浮かべているような口元が特徴的な、スラブ系の美女であった。白いスーツの下に着用しているのは、鮮やかなエーゲブルーのワイシャツで、純白の無地ネクタイで首元を引き締めている。

「あら、ミユスカがアタシに賛同してくれるなんて珍しいわね。もしかして、アタシとフアックしてくれる気になった? 退魔戦士にその人有りと恐れられた妖銀貨のミユスカとフアック……あはあん、想像しただけで溢れてきちゃうわ。ねえ、阿絡尼が見ても構わないからこのテーブルの上で荒々しく犯してえ」

褐色美女、ゼムリヤに淫蕩きわまりない響きの声で問われた男装の麗人、ミユスカは、口元に浮かべた苦笑を深くしながら首を横に振る。

「いや、遠慮しておこう。さて、私はそろそろ出発する。我が盟主殿に仰せつかった大事な用があるの、な」

妖銀貨の異名を持つ白スーツ姿の美女は、流麗な動作で立ち上がり、円卓に置いていた白いソフト帽を目深に被った。立ち姿勢になると、手足が長くスレンダー体型のプロポーションが際立つ。スーツ越しに浮き出たバスタの膨らみはささやかなものであったが、太腿からヒップへと至るボディラインは、ミッチリと肉が詰まったアスリート体型だ。

「あら、どこへ行かれますの?」  
「カースイーターに届け物をする。先方にとっては、ありがた迷惑なプレゼントだろうが、是非とも受け

取ってもらわねばならん……」  
阿絡尼の問いにシニカルな口調で答えたミユスカは、ポケットから取り出した大ぶりな銀貨をテーブルにそっと置いた。

直径四センチ、厚さも五ミリ近くある、古代ローマ帝国銀貨の表面には、魔法陣を思わせる複雑な記号が墨描きされており、その中央に「鼠」という漢字が、米粒ほどのサイズの字で書き込まれている。「なつ、カースイーターですってえ! ちょっと待ちなさい、その任務、アタシも行くわ!」

呪詛喰らい師の名を聞き、意気込んで立ち上がるうとしたゼムリヤの身体が、ギクリ、と強張る。

「う……いつの間に縛ったのよお! 阿絡尼、解きなさいよお!」

褐色のビザールボディをくねらせて声を上げるゼムリヤの身体は、真珠のような光沢を放つ細く強靱な糸の束でイスに縛り付けられていた。

「あきません。ゼムリヤさんは、謹慎中でしよう?」  
褐色美女を縛めた糸束は、静かな口調で言って微笑む尼僧の、白くたおやかな指先から繰り出されて

いた。

「お仕置きなら、十分に受けて反省してるわよ! あはあんツ! 糸が食い込んできて、身体が疼いちやう、オッパイ、もつと強く縛ってえよ!」  
キリキリと鳴りながら、褐色の柔肌に食い込んでくる妖糸の感触に、淫蕩な女繰霊師の音が艶めかしく裏返り、金色の瞳が欲情の炎を灯して熱く潤む。

「ゼムリヤ・イリュージアよ。その多淫な性を抑えきれず、盟主殿の禁を破って呪詛喰らい師に陵辱行為を仕掛けた挙げ句、返り討ちにあつて手持ちの淫神を取られたお前に、今回の仕事は任せられない」  
緊縛されてよがり悶えるゼムリヤを冷たく見下ろしながら、男装の麗人は容赦のない口調で言い放つ。

「ううう、全部ホントのことだから反論できないけ

ど、あれは、九未知会のために良かれと思つてやつたことなのよ！」

「何をいけしやあしやあと言いつてはるんですか。ゼムリヤさん、もうちいつと、きついお仕置きが必要なようですなあ」

それまで穏やかであつた阿絡尼の声に、サディステイックな響きが混じり、指先から繰り出された妖糸が、キュンッ！と鋭い糸鳴りの音を立てて引き絞られる。

黒革のビスチエからこぼれ落ちそうなゼムリヤの褐色巨乳に、白く照り輝く糸がギチギチと食い込み、淫女の顔を苦悶に歪めさせた。

「あひいッ！ しっ、締まるううッ！ オッパイが締め潰されちゃうッ！ ふはああああッ！」  
ゼムリヤの上げた悲鳴は、恐怖と淫らな期待が半々に入り交じつたものであつた。

「阿絡尼、あまりやりすぎるなよ。性格と素行に問題はあるとは言え、その女も、我らと同じ九未知会の一員なのだ。欠けることは、盟主殿が許さないだろう」

「承知しております。心置きなく行つてらっしゃいませ、ミュスカさん」

ミュスカにたしなめられた尼僧は、瞳の奥で揺らめき始めていた狂気の炎を鎮め、静かに頭を下げる。

「ああ、行つてくる」  
妖銀貨の異名を持つ麗人は、卓上のコインを拾い上げてポケットに戻すと、二人に背を向けて砂漠を歩み去つてゆく。

一陣の風が砂埃を吹き上げ、白いスーツに包まれたスレンダーな肢体を覆い隠した。

### 封の「呪鼠」

天窓から陽光が差し込む、明るく清潔なシャワールームで、呪詛喰らい師の異名を持つ退魔少女、常

磐城咲妃はシャワーを浴びていた。広いシャワールーム内にはいるのは、彼女一人。

凛々しく引き締まった美貌に水滴が弾け、たわわなバスタの曲面を舐めるように水が流れ落ちてゆく。

芸術的にくびれたウエストラインを伝つた水は、まるでやかに張りだしたヒップの谷間と、無毛の股間を洗い、健康的な脚線美を名残惜しげに撫でながら床の排水口に吸い込まれた。

（来たか……!?!）

背筋に、ゾクリとするような視線を感じた咲妃は、ゆつくりと振り向く。

「拘束、成功！ やはり、思つていた通り、淫視型の亜神だつたな」

シャワールーム正面の壁面に、明らかに人間のものとおぼしき二個の目が浮き出し、呪詛喰らい師の極上裸身を凝視していた。

「視線固着の呪印をどこに描こうか迷つたが、やっぱりこの胸に描いて正解だつたみたいだな？」

全裸に水滴をきらめかせた極上ボディを惜しげもなくさらけ出した呪詛喰らい師は、ポリウムたつぷりな美巨乳に描き込んでおいた呪印から目が離せぬ亜神に向かつて歩んでゆく。

「盗撮マニアの生き霊に同調した低級霊が産み出した亜神か。……封印ッ！」

凛とした声を上げた咲妃は、壁に浮き出た目に、豊乳を惜しげもなく押し付けた。

弾力たつぷりの乳房が、壁面でムニユリ、とひしやげ、乳首を中心に描かれた円形の呪印が、亜神を瞬時に封印する。神伽の戯は、基本的には性行為によつて荒ぶる神気を癒やし、封じるのだが、相手が亜神レベルの存在ならば、今回のように、幾分強引な手段も可能なのだ。

「んはあ……封印、完了」

悩ましげな喘ぎを漏らした咲妃は、ゆつくりと身を離した。フィットネススクラブのシャワールームで頻発していた、女性客の連続オナニー事件は、こうして解決されたのであつた。

私立槐宝学園は、市の中心部から少し離れた、緩やかな丘陵地帯に位置する文武両道の名門校だ。全国各地から生徒を募つており、学生寮や各種施設が充実した恵まれた環境で、年少少女たちは勉強やスポーツ、趣味にいそしみ、青春を謳歌している。放課直後の騒がしさがおさまつた静かな校舎内を、三人の女子生徒が並んで歩いている。

「咲妃さん、最近、お仕事が忙しいですね」

愛くるしい小動物を連想させる顔立ちの少女、雪村有佳が、真ん中を颯爽と歩む級友に声を掛けた。

「ああ、この街の神気が活性化しているせいで、亜神の顕現が多くなっているからな」

耳当たりのいいアルトボイスで答えたのは、スラリと背が高く過剰なまでにメリハリの利いた肢体を学園の制服に包んだ黒髪ロングヘアの美少女、常磐城咲妃。

夏服のスカートから露出した美脚には、所々に金色の飾り金具をあしらつた赤い革帯が巻き付いて異彩を放っている。同様の革帯は、半袖のシャツからあらわになつた腕から手首、第一ボタンを外したシャツの間から覗く首元まで、ほぼ全身を緊縛しており、凛々しい顔立ちの美少女に、倒錯的な色香を与えていた。

本来なら、校則違反に問われる過激ないでたちであるにもかかわらず、すれ違う教職員や生徒たちは、咲妃にまったく注意を払わない。

（今日も、事もなし……。印象希薄化の呪印も、効果は持続している。多くの亜神を一気に取り込んだことによる霊気の乱れも、心配するほどではないよ）

「んはあ……封印、完了」



「周囲に落ちているジュースの空き缶やゴミのサイズと比較すると、このネズミの大きさが判るだろう？ 尻尾まで入れたら、軽く一メートル以上はあるぞ」

「ウツ！ ゴメン、私、ネズミは苦手なの。画像を見ただけで鳥肌が……」

画面から慌てて目を逸らす鮎子。

「ネズミさんは、よく見るとかわいい顔していますけれど、さすがにこんなに大きくなると恐いですね……」

動物好きな有佳も、さすがにここまで常識外れなサイズは守備範囲外らしく、画像を見る顔が引きつっている。

「合成画像でないとしたら、確かにとんでもない大きさだな。で、この写真が撮られたのは、どこなんだ？」

かすかに目を細めて、巨大ネズミの写真を見ながら、咲妃が問い掛ける。

「海沿いに建ち並んだ工場街の排水口周辺らしい。あの辺は、人が楽々立って歩けるぐらいの大きな排水トンネルが何本も海に向かって開いているんだ。その奥に、巨大ネズミの巣があるに違いない！ 今夜にでも、現地に向いて調査してみようと思う」

「却下よ！ 調査の許可はできないわ！」

やる気満々の少年に、幼馴染みの生徒会長がきつい口調でダメ出しする。

「何でだよ!!」

「だって、信司は排水トンネルの中にまで入るつもりなんですよ？ それって、工場施設への不法侵入に問われることもあるのよ。生徒会長として、そんな違法行為は許可できません」

「鮎ねえは相変わらず堅苦しいなあ。トンネルがダメなら、周辺調査だけでも付き合ってくれよ」

あきらめきれない様子の信司は、なおも食い下が

る。

「悪いけど、私は無理よ。生徒会役員の資料をまとめなきゃいけないもの」

「わたしも、書記係として会長のお手伝いしなきゃいけませんから、今夜はダメですわね」

生徒会役員である鮎子と有佳が、そろって言う。

「残念だが、今日は私も別件で用事があるから、調査に同行はできないぞ」

「アタシは、咲妃お姉ちゃんと一緒になきゃ、どこにも行かない」

咲妃と瑠那も、つれない返事をした。

「何だかみんな、今回は乗り気じゃないんだな」  
女性陣に拒絶された少年は、寂しげにうなだれる。

「当然でしょ!! 女の子を下水道の調査に誘うなんて、信司はデリカシーがなさすぎるのよ!!」

メガネのレンズ越しに幼馴染みを睨みつけ、鮎子は説教口調で言い放つ。

「それに、信司は明日、追試があるでしょう？ 第点取らないように、しっかりと勉強しておきなさい!! いいわね、絶対に、一人で検証に行っちゃダメよ。これは生徒会長命令です!!」

「判ったよ。今夜は寮で一人寂しく勉強するさ」  
鮎子に釘を刺された信司は、不満げな表情を浮かべながらも頷いた。

海岸線に沿って広がる工場地帯は、複雑に入り組んだパイプや煙突、巨大な工場施設が夜間照明に照らし出され、SF映画のワンシーンのような偉容を闇の中に浮かび上がらせている。そんな景色には目もくれず、防波堤の外側に並べられた、消波ブロックの上を軽やかに跳び渡ってゆく人影が一つ。

都市伝説研究部の部長、岩倉信司であった。

(女子連中には総スカンをくらったけど、やっぱりガマンできない。こういう都市伝説の検証に

は、匂ってものがあるから……)

背中には、大ぶりなリュックを背負っており、カーゴパンツと長袖シャツという動きやすい服装をしている。

手には、以前に咲妃からプレゼントされた、パッド付きのフィンガーレスグローブを装着し、足元は海釣り用のゴムブーツで固めて、準備は万全だ。

延々と続く消波ブロックに打ち寄せ碎ける波音とともに、磯の香りをたつぷりと含んだ潮風が吹いてきて、信司の前髪をそよがせた。いつもなら、夜釣りに訪れた釣り人たちの姿をちらほらと見ることができはずなのだが、今夜は不思議なことに、人影はまったく見られない。

「この辺、だな……」  
防波堤から突き出た、形ばかりの侵入防止柵を回り込んだ少年は、途絶えた消波ブロック伝いに波打ち際まで降り、排水トンネルの前に立つ。壁のようにそびえ立ったコンクリートの堤防基部に、差し渡し三メートル余りのトンネル出口が、ポッカーと口を開けていた。引き潮の頃合いを見計らってやってきたので、トンネル内に海水は流れ込んでおらず、簡単に侵入できそうだった。

「よし、調査開始だ」

表情を引き締めた信司は、リュックから取り出した樹脂製ヘルメットを被り、その上から高照度のヘッドランプを装着する。手に携えているのは、簡易防水カバーを被せた、夜間撮影機能付きのビデオカメラだ。

カーゴパンツのポケットには、ビデオが作動不良に陥った時のことを考慮して、フィルム式のカメラもしつかりと用意している。

ヘッドランプのスイッチを入れ、録画状態にしたビデオを構えた信司は、RPGに出てくる迷宮の入口を思わせるトンネルの内部へと足を踏み入れてい

った。

排水トンネル内は、むせ返りそうな磯の香りが立ちこめ、湿度と温度も高い不快な環境だ。

足元には、わずかな量の工場排水が流れてはいるが、トンネルの左右壁面沿いには一段高くなつた点検通路があるので、足を濡らさずに進むことができた。

トンネルの奥に進むにつれて、磯の香りに混じって、濃厚な獣臭が鼻腔に届いてくる。

「これは、初っぱなから当たりを引いたかな？ 大ネズミの巢……兎見か!？」

期待に胸を高鳴らせながら歩を進めた信司は、生暖かい空気の壁のようなものをスルリと潜り抜けた。「う……ッ!」

軽いめまいのようなものを感じた次の瞬間、いきなり視界が開ける。

「えっ？ 何だ、ここは？ 大ネズミの……巢!」  
そこは、数本の排水トンネルの合流点らしい、十メートル四方はありそうな空間であった。

コンクリート打ちっ放しの壁面に沿って、流木や粗大ゴミがうずたかく積み上げられ、その周囲で、通常サイズのネズミが何百匹も群れ騒いでいる。

キイキイ、チイチイという耳障りな泣き声が空間に反響し、侵入者を見つめるネズミの目が、ヘッドランプの光を反射してルビー色に輝いた。

「……ンッ、あ、あ、あああ……く……んふうう……ッ!」

ネズミの大群を目にして呆然と立ちすくむ信司の耳に、女性の艶めかしい喘ぎ声が、甘い反響を伴って飛び込んでくる。

「あ……あれは!？」

声のした方に顔を向けた信司の眼前、ランプの光に浮かび上がったのは、悪夢のような光景であった。ネズミの大群に囲まれた空間の中央で、人間と変

わらぬ大ききの巨大ネズミが三匹、革帯ボンデー姿の女性を仰向けに組み敷き、色白な半裸身を齧っている。

コンクリート床の上で身悶える女の上半身に左右からのしかかったネズミは、仰向けになつても形の崩れない豊乳を荒々しく責め立て、もう一匹の大ネズミは、M字開脚を強要した股間に鼻先を突っ込み、革帯ボンデーに守られた秘部の周辺を嗅ぎ回りながら、内腿や腿の付け根、ムッチリと肉感的な尻たぶにせわしなく舌を這わせていた。

「く、はあう、んっ、あ、あ、ひあう、んあ、あんッ!」

焦げ茶色の柔毛に覆われた身体から突き出した、くすんだピンク色をした無毛の手指が、たわわなバストを好き放題に採りこね、太腿や尻、革帯に守られた股間を獣の舌が這い回って、組み敷かれた女性に絶え間ない恥悦の喘ぎを漏らさせている。

見覚えのあるSMチックないでたちと、羞恥と快感の板挟みに歪む凛々しい美貌は、間違いなく常磐城咲妃であった。

「と、常磐城さんッ!」

「く……しっ、信司!! まさか、結界を抜けてきたのか!？」

少年が上げた声と、自分を照らし出すヘッドランプの光に気付いて顔を上げた咲妃が、驚きの声を上げる。

「結界だつて？ とつ、とにかく助けなきゃ!？」

我に戻って動こうとした信司であったが、一歩足を踏み出したところで身体が動かなくなり、声を発することもできなくなってしまう。

（金縛り!? また、オレは何もできないのか!？）

「く……う、こつ、これは神伽の戯……信司、何もするな! なつ、何が起きても……動じるな。ひあ! つああ、はああうんッ!」

眩しげに目を細め、頬を羞恥に紅潮させながらも凛とした声を上げた咲妃の半裸身が、グンッ! と仰け反る。

細く骨張つた大ネズミの指が、豊乳の先端を守っていた革帯ボンデーをずらし、弾み出した乳首にむしゃぶりついてきたのだ。

視線を逸らすこともできぬ信司の目の前で、少女の乳首が獣に吸い齧られた。細く平たいネズミの舌先が、ピチャピチャという舌なめずりの音を響かせながら乳先でせわしなく閃き、艶めかしいピンク色の勃起乳頭を獣の唾液で濡れ光らせてゆく。

細い指で握り締められ、揉まれる豊乳が突出を際立たせ、乳首を頂点とした円錐状に張り詰める。

「ふあ! あはああうんっ! かっ、噛む……なあ!」

あらわになつた両乳首を、齧菌類特有の大きく発達した前歯でコリコリと甘噛みされた神伽の巫女は、引きつった声を上げてボンデージボディをわななかせた。

過剰な刺激に襲われた乳首は、ヘッドランプの光をスラリと照り返して小指の先ほどにまでしこり勃ち、今にも囁り取られそうな勢いで、大ネズミに吸いしやぶられる。

ぴちやぴちやぴちや、ちゅばちゅばちゅば……。硬い前歯と、小刻みに閃く生温かい舌の波状攻撃を受けた乳首と乳輪は、今にも爆ぜてしまいうちに充血し、細長い指を食い込まされて採み立てられた色白な乳球は、食べ頃の白桃のように紅潮していた。

「ふあ、あ……あああ、でっ、出るッ! んきゅうううううんッ! はああああん」

ぷしいっ! びゅっ、ぷしゅっ、ぷちゅるるっ!

切羽詰まった声を上げた咲妃の乳先から、純白の乳汁が迸り、大ネズミの鼻先を濡らした。

キイイツ、キキキキキッ!

迸る甘露の味に興奮した声を上げた大ネズミは、さらに激しく乳先にむしゃぶりつき、細く骨張った指で乳肉を揉みしだいて、異種の牛乳に容赦のない搾乳を仕掛ける。くすんだピンク色をした骨張った指が、量感たっぷりの乳肉に深々と沈み込み、母乳の源泉である乳腺葉を圧迫して、甘い体液のさらなる分泌を促す。

「ふわあ！ あっ、アッあッ、ひああう……いつ、ヒッ……きゅふううううんッ」

ジュルジュル、ジュバジュバという遠慮のない吸い音と、艶めかしく切なげな響きを増した咲妃の喘ぎ声が、コンクリート壁に反響した。

かつて、母乳を好む淫神「淫水蝶」によって開発された咲妃の乳腺は、性的快感に連動して、大量の母乳を分泌してしまうのだ。

（常磐城さんが……母乳を出した!）

想像を絶する事態の連続で、金縛り状態で動けぬ少年の頭はパニック寸前だ。

乳首を咥え込んで吸う大ネズミの口から、飲みきれぬ母乳がこぼれ落ち、たわわなバストの曲面を白くきらめかせながら流れ伝ってゆく。

「う……く……」

大ネズミに陵辱される少女を目の前にして、無力感に苛まれ呻く信司であったが、その股間では、淫靡な悪夢のごとき光景に反応してしまつたペニスが、意に反して勃起を始めていた。

「ギュギギツ、良キ匂イノスル乳汁ジャ。我が同胞ニ、存分ニ飲マセテヤレ」

耳障りな響きの男の音が、ネズミの巢に響き渡る。（だつ、誰か!? 誰か、他に人が居るのか?）

金縛り状態の少年は、わずかに動く視線を慌ただしく動かして、声の主を捜す。

巢穴の突き当たり、一段高くなった場所に、流木や粗大ゴミを積み上げて作られた玉座のようなもの

があった。

そこに、ひときわ大きく、でっぷりと太つたネズミがどっかりと腰を下ろし、囃られる咲妃の痴態をじつと見つめている。

（デカイ! 身体の大きさだけで二メートル以上あるんじゃないのか? あれが、大ネズミたちのボス……まさか、あいつがしゃべつたのか?）

もはやネズミとは思えぬその巨体の貫禄に圧倒されながら、都市伝説マニアの少年は思う。

「……ソコナ牡、コノ牝ノ同胞カ?」

モゾリ、と身じろぎしたボスネズミが、金属的で耳障りな声で問い掛けてきた。

（ネズミが……しゃべつた!? あいつが淫神……!）

声に出せぬ信司の思いを読み取つたかのように、巨大ネズミの王が人間のような仕草で頷いた。

「左様。我方名ハ呪鼠……人ニ虐ゲラレシ数十万のネズミの霊方集いて神格ヲ宿セシ者ナリ。ソコナ女神ノ巫女ト名乗リテ、我ニ伽ヲ申し出テキタ。ヨツテ、露払イトシテ、我ノ同胞ドモノ無聊ヲ慰メさせテおル」

呪鼠と名乗つたネズミ型の淫神は、でっぷりと太つた身体を揺らしながら、威風堂々の口調で宣言する。

「呪鼠様あ、やつ、約束通り、ご奴らの相手をすれば、御前様に伽を……はうんっ! んはああんッ」

左右の乳首を容赦なく吸いしゃぶられ、荒々しく搾乳される快感に悶えながらも、咲妃は艶めかしく震える声で神伽を申し出る。

「神名ニ掛ケテ約定は違エヌ。ソレ、モット乳ヲ出して、我が同胞ヲ悦バセヨ! 我ニ伽スルノハソノ後ジャ!」

巨大鼠型の淫神は、ジュジュジュジュツ! とくぐもつた鳴き声を上げた。

その声を合図として、周囲で見物していた何百という小ネズミたちが、咲妃の肉体に一斉に群がる。

「ふあ! ンンンンッ!!」

白い裸身が、押し寄せる小動物の群れに呑み込まれて見えなくなるのを、身動き一つできぬ信司は呆然と見つめることしかできなかった。

大ネズミの搾乳責めに翻弄されながら、常磐城咲妃は、かすかな焦りをおぼえていた。

（ご奴らは、呪鼠の神氣を受けて巨大化しただけの、ただの獣。一刻も早く、こんな戯れ事を切り上げ、淫神に神伽を仕掛けなければ……）

そう思つてはみるものの、吸引された乳首の芯を、乳汁が駆け抜け進むむず痒い快感が、豊乳のみならず、全身を熱く火照り疼かせてしまう。

（ああ、身体中が……舐められて……まさぐられて……舌のざらつきが……肌を……くううっ!）

全身を包み込んでせわしく動き回る小ネズミたちの獣毛が、搾乳快感によって鋭敏化した柔肌をサワサワとくすぐり、身体中に這わされる小さな舌の感触が性感をさらに上昇させてゆく。

食欲混じりの獣欲に突き動かされた小動物どもの愛撫は、全身くまなく施されていた。

特に発汗量の多い部分には、より多数のネズミたちが群がり、甘い発情臭を放つ汗粒を舐め取って、チイチイと甲高い歓喜の声を上げている。

「きゅふんっ! 脇ッ……ひあ、あんッ! ふあ……く……んはああうう!」

脇の下を何枚もの舌が這うくすぐつたさに堪りかねて脇を締めようとしても、左右から母乳を吸いしゃぶっている大ネズミたちが手首をガッチリと掴んで、動きを封じられてしまう。搾乳を受け続けている乳房の谷間には、母乳の甘い匂いに引き寄せられる小ネズミどもが先を争って潜り込んできて、乳球

の曲面を伝い流れてくる甘露をピチャピチャと舐め取っている。

腹筋の凹凸をうつつらと浮かべた腹部にも、何匹ものネズミが乗って、引き締まった素肌を甘噛みし、へその窪みに鼻先を突っ込んで、小さな舌を閃かせる。

「ひう！ んっ、あひっ、ふううっ、くふあ、はぁんっ！」

敏感に反応して波打つ腹の上から振り落とされまわいとす小ネズミたちが、柔肌に爪を突き立てる鋭い痛みでさえ、今の咲妃にとってはマゾ的な快感の電流と化して、肉体の火照りと疼きを強めていた。

小ネズミの群れは、ありとあらゆる種類の刺激を女体に与える生きた責め具と化して、神伽の巫女をよがり悶えさせる。

（ああ……ッ！ こんな所まで……かつ、感じるなんて……奥まで……舐められて……はあああ）

へそ穴の奥にまで差し込まれ、せわしなく這い回る小さな舌がもたらすすぐつたい感触は、内臓や腹膜までわななかせ、挿入阻止の結界に守られた無垢の腔壁を妖しく収縮させる。

熱した蜂蜜をたつぷりと含ませたスポンジのように充血した腔粘膜が、狂おしいほどに蠢き振られて女悦の証である甘酸っぱい蜜液をジュワツ、と分泌させた。

（くっ、んんっ！ 漏れ……るッ！）

いまだに何者の侵入も許したことの無い膈道を灼熱させて、熱い愛液が下り落ちてくる感触に、呪詛喰らい師の美貌が歪む。無意識のうちに腰が浮き上がり、淫熱を帯びて潤んだ秘部がせり上げられて、革帯を食い込ませた秘部を強調してしまう。

キュキキキッ！

股間や内腿部分を執拗に舐め齧っていた大ネズミが匂いの変化を嗅ぎつけた。

チツチツチツチツ！

興奮した大ネズミは小刻みに舌打ちするような鳴き声を上げながら、秘裂を隠した革帯に指を掛けてグイグイと引つ張り上げる。

「くあ、ひう……あつ、ふああんッ！」

疼き始めている性器をエロチックな退魔装束に圧迫され、咲妃の声が甘く裏返る。

革帯越しに散々舐め回され、揉み弄られて充血を強要された大陰唇が、細く引き絞られた革帯をパツクリと唾え込み、膈前庭にまで食い込んで、秘裂の疼きをさらに加速した。

「はあああ、引つ張るなあ……あ、あ、ああ……ッ！」

せり上げられた咲妃の下半身が、ビクッ、ビクビクンッ、と敏感な痙攣を起こす。

桜色に上気した、ツルリと滑らかな大陰唇を割り開いて食い込んだ革帯の脇から、愛液がきらめき溢れてくるのが、信司の目にもはっきりと見て取れた。「う……やめ……ろ……こんなの、酷すぎ……るッ！」

咲妃の痴態をこれ以上見まいとする信司であったが、目を閉じたり視線を逸らすことができない。

「ギユフフツ、お主、モット近ウ寄レ、ソノ牝ガ唇メラレ、淫ラニ墮チル姿ヲ、間近デ見テヤルガイイ」信司の困惑に嗜虐心を煽られた淫神が、邪悪な響きを帯びた声で命じる。

「う、こ、こと……断るッ！ ……く……うう……ッ！」

抗おうとする意思を裏切つて身体が勝手に動き、ネズミの群れに陵辱されている咲妃の傍らまで歩み寄つてしまう。なすすべもない少年は、M字開脚を強要された咲妃の股間を覗き込むような位置に膝を突いた。

ヘッドランプの明りが、革帯緊縛された極上の肢

体を白く照り輝かせ、強まった光に驚いた小ネズミたちが一斉に鳴き騒ぐ。

「呪鼠様、こつ、このようなお戯れなぞせず、何とぞ、御身に私の伽をお受け下さいませ！」

左右の乳首を大ネズミに吸いしやぶられ、全身を小ネズミどもに齧られながらも、咲妃は甘くかすれた声で、神伽の戯を願ひ出る。

「マダジャ！ マダ、我ノ同胞ハ満タサレテオラヌ！ モット恥ジラエ！ 乱レヨ！ 我ラト同ジ、畜生道ニマデ墮チヨ！ ジュジュジュギッ！」

チチチイッ！

王の命を受けた大ネズミは、意外なほどの腕力を見せて股間の革帯をさらに引き上げ、咲妃の下半身を高く吊り上げてゆく。

「くあ、ああああ……ッ！」

ネズミの唾液に濡れて密着した薄皮越しに、プツクリとしり勃つたクリトリスのポツチまでも浮き出させて、肉感的な下半身がブリッジでもするかのうな体勢で宙吊りになる。M字開脚状態で、かろうじて接地している両脚のつま先と、強張った太腿がわななき震えた。

チチチッ、チユイイッ！

争奪戦にあぶれて順番待ちをしていた小ネズミたちが、小さな身体を伸び上がらせて、浮き上がった尻たぶや汗ばんだ背中を舐め回し、緊張した美脚を這い上って太腿にしがみつく。熱く火照った咲妃の裸身に群がった小ネズミたちは、小刻みに腰を振り始めた。股間から突き出た、プリッ、と生硬いネズミのペニスガ、汗と獣の唾液にぬめつた柔肌のそこかしこに擦り付けられる。

「ひああう、んっ、身体中……あつ、ヒツ、んはああんッ」

艶めかしくかすれた声を上げる咲妃の全身で、小動物たちの自慰行為はさらにヒートアップしてゆく。





# まじかる 魔法メイド さくら

第2話 「秘密クラブにご用心」

変身!  
NI ADVN

大変!  
早く助け  
なくちゃ

見よよ  
さくらちゃん  
いつも通り  
街の人達が  
襲われてる

悪魔メイド  
ゆいちゃん

そちらこそ  
今日という  
今日こそは

魔法メイド  
まじかる  
さくら!

今日こそ  
決着を  
つける!!

魔法メイドぶたたり!

綺麗さっぱり  
お掃除ですの

漫画 ぱふえ  
COMIC

いくぞ!!

いきます  
わよ!!

デビルル☆

イナズマ  
キーンッ  
クッ

まじかる☆

オオッ

対空砲!!



くそー!

いつもいつも  
お前の魔法は  
何て言うか  
アレだ!!

にゃはは

勝てば官軍  
でしょ?

こうなれば  
出でよ!

怪人  
キング男

出番です  
かな

暗黒街のボスを  
改造した力  
を見せてやれ!

了解!

兎時空  
発生!!



え……

なんですかの  
ココは——!?

この服は  
一体……?

私の店に  
ようこそ  
ここは私の  
意のままに  
できる空間

君達は当店の  
従業員さ

なっ…  
何コレ!?  
どうして  
私まで!?

貴女だけ例外と  
細かく設定  
できなくてね  
大人しく私に  
従って下さい

わざとだろ!!  
目エそらすな

あああ  
あああ

さくら  
ちや…  
魔…力が  
弱まって

…ボウ  
も…う  
またあ?

そして  
一般の皆様は  
お客様という  
設定です

ようこそ  
我が店へ

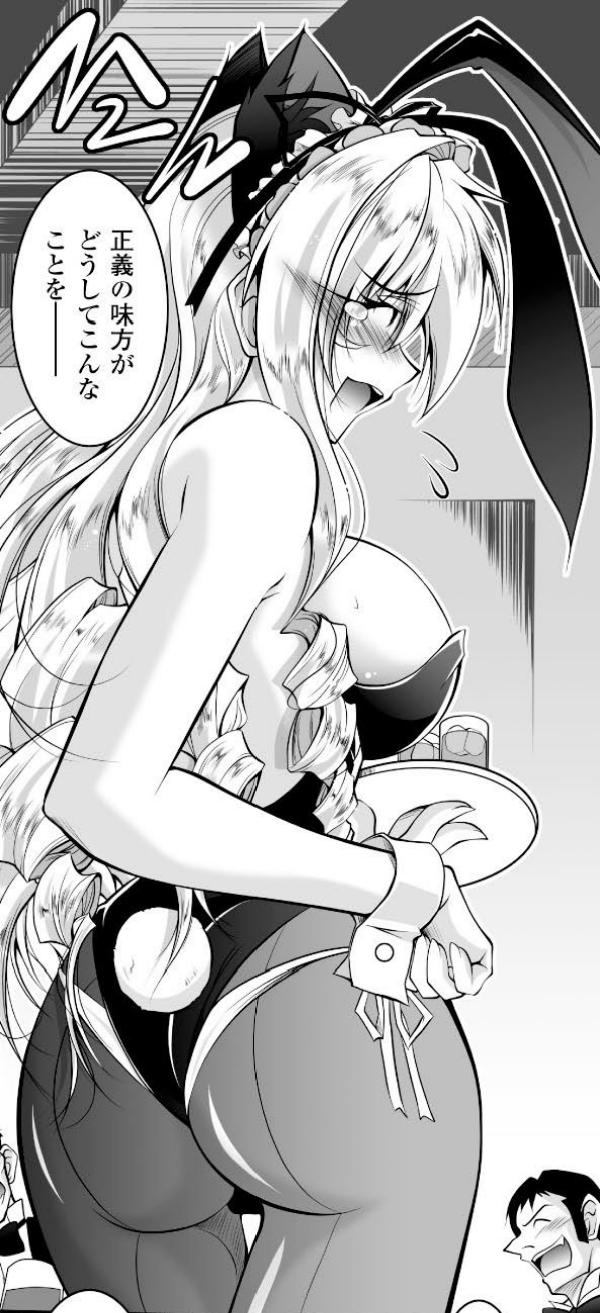
極上パニーの  
おもてなし  
心ゆくまで  
お楽しみを

やばい  
後述



飯は美味しい  
酒も美味しい

ウヒヤヒヤ  
良い店じゃ  
ねーか



正義の味方が  
どうしてこんな  
ことを——



毎回簡単に  
暴走しないで

もう！



ねーちゃんは  
キレイで♡

さ



あつ!!  
どうして  
目隠しを...

無礼を働いた  
罰だ  
誠意をもって  
お詫びなさい



客に手を  
あげるとは

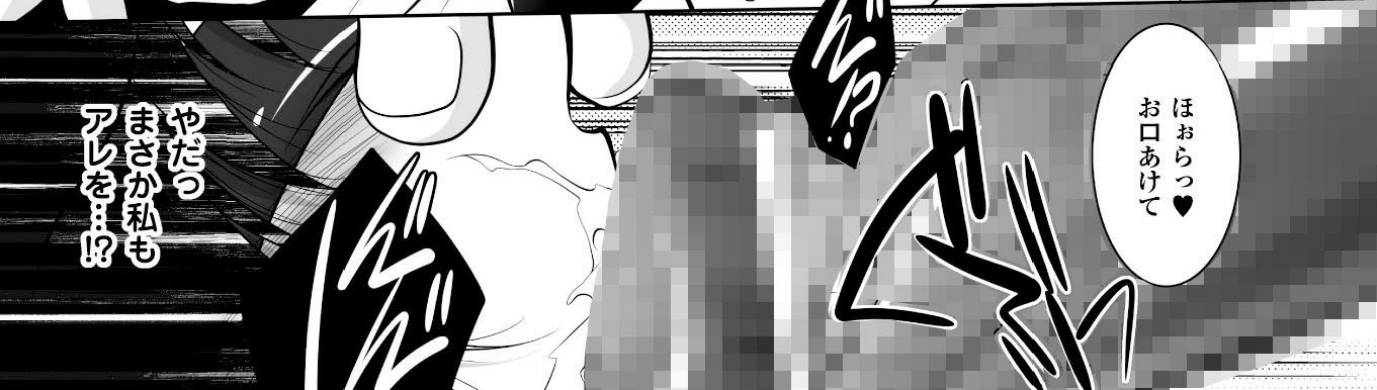
パニーガールの  
分際で

いけませんねえ

んー？

ちよつと!!  
何をなさい  
ますの!?





ここでは  
私に逆らえ  
ませんよ

そう睨ま  
ないで  
お客様が  
困るでしょ

ああっ  
やめろ!

く...そお  
魔力さえ  
あれば...

見えない  
から...?  
体が...過敏に  
なって...

う...とお  
感じすぎる

ひやうッ  
ん...くう

んくん

胸揉んだら  
大人しくなり  
やがって  
感じてん  
のかよ

あはあ  
やあ...ん  
揉むなあ  
ああ...あ

だめ...力が  
抜けてしまう

ほおらっ♡  
お口あけて

やたっ  
まさか私も  
アレを!?



し司令...

う...く

桔梗太夫に襲われて



肩「葛藤々」

MISS BLACK

原作 / アリスソフト ©ALICESOFT

笑止



が...あ



錆付いた「閃忍」が何を踊る



たあつ!

たあつ!



そんな  
し司令...



大丈夫...だ



く...う

くく  
正義の徒が  
不意打ちとは  
感心せんな





…っ

この上  
下手を打たぬうちに  
無粋なもの  
捨てる事じゃ



小僧



そのなりも  
無粋だとは思わんか？

……！！



…足りんなア

ホッ

妾も女じゃ

となれば男子の種ほど  
危ういものはあるまい？

さあ早く  
搾り捨てるのじゃ

はっ

はっ

くっ

が

出したものは  
こぼさず受けろ

口でな

う...  
は...い...ぐすっ

くく  
何を泣く

いつもしているように  
楽しめば良いだけの  
事じゃ

ぐ...う

ずる...

想うのはあの  
小さいほうか？

気の強いふうに  
しておるが  
押せば倒れる娘よ  
床では初々しいやも  
知れんな

それともハルカか？  
大人しい顔をして  
怪忍どもに一步も退かぬ

求めれば所も  
相手も構わず尻を振る  
見上げた淫乱ぶりよ

はっ  
ごめんなさ…いっ

~~~~くっ！  
いく！ 出ちやう  
ううっ

あう…っ



うん...ん...ん...

はちん

ん...ん...ん...

はちん



ほ僕...  
なんてこと...

どうした  
遠慮はいらん  
続けて良いぞ

っはっ

はは



ここまでですわ学園長!!  
まさかあなたが妖魔を使って  
生徒を襲っていたとは...

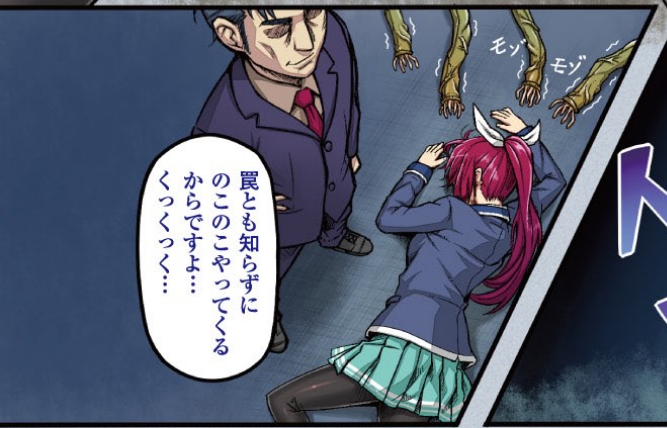
**闇を断つ正義の刃!**

フツフツまさか  
ここまで辿り着くとは思  
いませんでしたよ  
学園退魔師 享華君



しよくしゆさんか  
**触手惨禍**  
乱れ散る女退魔師

漫画 COMIC **ピラノ**



異とも知らずに  
のこのこやってくる  
からですわ...  
くっくっく...

**ド  
ガ**



うっ!!  
なっなんだ  
この臭いは...



動けない!

はっ放せ!!

はっ!?

うっ…

なっ!!

ビシッ

ズズ

きやっ!

きやあああ  
あア!

うっ!  
なんだ  
これは!!

ふっ服が  
溶けて!?

ベチャ

ベチャ

ジュ〜

ジュ〜



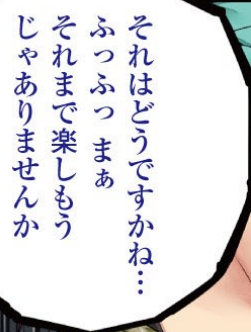
くっこんな…  
必ず仲間が貴様の  
悪事を暴くぞ…



フッフッ  
いい姿じゃないですか  
どうです今の気分は？



なっ!?



それはどうですかね…  
ふっふっ まあ  
それまで楽しもう  
じゃありませんか



ググ

ズズ〜



やめろ〜!!

グキョ

グキョ  
グキョ  
ズゾ〜

モソ モソ

モソ モソ



くっ 痛い…

こっこんな触手  
ごときに私が…

うぐっ

ひぐっ

ズンズン



どうですか私の育てた妖魔達の責めは…  
あなたが今まで感じた事のない  
快楽の園へ導いてさしあげますよ…

負けるんでも…  
くっ!!

アッアッ

うぶっ

ジュゴ

ちゅぽ

ひぐっ

グツグツ

ニョロ

ズムム

クツ

クリ

クリ

クリ

あぐっ

ネチ

スゲョ

ズム

ズム

うっ



逃げたぞ  
捕まえる！

くそっ…  
蹴りやがった…！

女中尉に迫る  
男達の影！

A棟の方  
行ったぞ！

そっちだ！

ぐぼっ！！

てめえっ！！

# エレクト ローゼス

electroses

にしき  
漫画 式すまから

COMIC

うあああああつ!!

ぐ……う……う……

さうさう  
繫いどけ

手間かけさせ  
やがって…

貴様ら…っ  
どういう  
つもりだ…っ!?

アルスウィア王国軍  
シャイロット・  
エディントン中尉殿

先日の国境戦での  
活躍…何って  
おります



随分我が国の人間を  
殺めたようで…

御託はいいわ  
捕虜くらいさつさと  
処刑しなさいよ

それともお勉強ばかり  
してきた学者さんたちには  
敵国の軍人一人  
殺せないかしら？

ハッハッハ  
いやあ貴女の命など  
なんとも思ってい  
ないのですが

たくさん国民を  
殺した罪は償って  
頂こうと

く…!?

な…何を  
打った…!

動かないで下さい  
肉が抉れますよ

これは最近  
我が研究所で  
開発された強い  
排卵剤です

!?

排…卵…!?

しかも排卵周期を  
早めるだけでなく

受精・着床成功率を  
99%まで高めることが  
出来るんですよ

うちの研究所は  
精子のサンプルは  
たくさんあるんですが  
卵子が足りなくて  
ねえ…

協力して頂こうと  
思っています

誰が…っ!

誰が貴様らの  
子など産むか!

……っ!?

フフフ…まあ  
そんな強情を  
張れるのも今だけで

排卵が始まれば  
懇願するほど  
精子が欲しく  
なりますよ

何をする!!  
放せっ!

薬が早く回るよう  
心拍数を上げる  
お手伝いを…  
…っと危ない!

敵国ハーバイト人の  
子を宿すなんて…!  
絶対に…っ!

っ…汚らしい!  
私に触るな!

く……っ!  
離れると…っ…

ひゃき……びびり!!

あぐっ!  
……つつか……ああ!

電圧は下げてあります  
ちよつと痺れる  
くらいでしょうか?

くっ……は……

これを当て続けて  
息を上げさせても  
いいんですが

はっ……はあっ……  
あ……あ……!

やめ……っ!  
やめろ……っお……!

やはり双方に  
有意義なやり方で  
いきましよう?





ふう…ふう！

シャーロット中尉も  
ぜひお楽しみ  
頂ければ

ふっ…さけるな  
下衆ども…っ！

それとも  
また踊りたい  
ですか？

—っ！



くそっ…  
こんな奴らに  
好きなようにされる  
なんて…

軍人様が  
こんなレースの  
ブラジャーなんて…

仲間には必死で戦って  
いるというのに…  
何を期待して  
いたんですか♡

おっー  
柔らかい  
ですね♡

このまま黙って  
いるのでは…  
薬が回ってしまっ…っ

今は何としても  
効果が出るのを  
遅らせて…！

中尉殿もここは  
鍛えられませんか  
でしたかあ

そつ…こんな奴らに  
昂るか…っ！

おや？呼吸を深くして  
気を落ち着けようと  
しているんですか？  
無駄な抵抗を…♥

じゃあこれでも  
平静でいられ  
ますかねえ？

ん…っ！！

怖い顔をして…  
乳首は可愛いローズ色  
じゃないですか♥

話を聞くな…  
落ち着け…っ  
落ち着…

触る…など  
言っている  
だろっ…！

んう…っ！  
っ…っ！

我慢するんじゃ  
なかったんですか？  
排卵始まっちゃい  
ますよ？

んやつ♡  
やめ…ろおつ！

汚い顔を  
近づけるな…っ！

ほら乳首もこんな  
硬くさせて…

興奮してるんじゃ  
ないですか  
シャーロット

♡…おっ♡

必ず殺して  
やる…!!

黙れ…っ  
貴様ら…!!

ふうっ…んうっ！







厭恨に染まる女神を  
禁断のふたなり快楽が襲う!!

ダイヤン  
ハート

# ダイヤン

～反逆の女神～

最終話 Heart

PCゲームは5月27日発売予定!  
詳しくは10ページへ!

くろいひろき  
小説 NOVEL 黒井弘騎

挿絵 ILLUSTRATION

KAGEMUSYA

登場人物紹介



来須麻希奈  
ディバインハート マキナ

悪の手で肉体を改造され創世の宝玉を埋め込まれた少女。改造の途中で脱出した。父の仇と正義のために戦っている。



来須亜里亜  
デモニックギア アリア

肉体改造され破滅の宝玉を埋め込まれた麻希奈の妹。脳までも改造され、麻希奈の前に敵として立ち上がる。

なるみ  
鳴海

悪の秘密結社「ミレニアム」の日本支部長で、自らが新世界の支配者になろうと企んでいる。

前号までの  
あらすじ

行方不明だった妹・亜里亜の猛攻に力及ばず敗北を喫した麻希奈は、自らが通う学園——わずかな日常さえも陵辱の場とされ、恥辱を味わわされるのだった。

それから数時間。クラスメイトたちに代わる代わる犯され、さらには亜里亜によって焚きつけられた他学年の生徒や教師たちにまで理不尽な欲望をぶつけられ、穴という穴を数多の肉棒で抉り抜かれ——麻希奈は終わることない奴隷の幸福に陥り続けた。

「はあ、はあ、はあ……あ、ああ……」

とうに日は落ち、男たちはみな姿を消していた。暗い教室内に響くのは、少女の悩ましい喘鳴だけだ。全身を白濁で汚し尽くされ、麻希奈はポロ雑巾のように捨てられていた。乱れた衣服から覗く美肌は紅潮し、Dカップの乳房には男たちの指跡が生々しく残っている。粘膜を剥き出したままの陰唇からは、今も精液と愛蜜の混合液が逆流し続けていた。

「ふふふ、好い様ねえ。どーお、今の気分は？」

壊れた人形のように痙攣を続ける少女のもとに、陵辱の首謀者が近づいていく。無様な敗者を傲慢に見下ろしながら、亜里亜はねつとりと問いかける。

「愛するものを失い、信じていたものに裏切られ、人の尊厳さえ否定された今の気分……」

憐憫も同情もない。そこにあるのはただ、絶対の敗者に対する残酷な侮蔑のみだ。

「いやらしい肉人形としてしか存在意義を認められず、道具として扱われ……しかも、そのことに悦びまで覚えてしまう。そんな、サイテーの奴隷にまで堕ちちゃった気持ちはどうかしらあ?」

「うあ……あ、亜里亜……」

「辛かったでしょ、苦しかったでしょ。哀れよね、惨めよね、もう死んじやいたい気分だよねえ!!」

言葉を挟む間もなく叩きつけられる、狂おしいまでの憤怒と憎悪。だが次の瞬間、亜里亜は泣き出しそうな顔で、泣き出しそうな声で感情を搾り出した。「……わたしもそうだったんだよ。ずっとそうだったの。わかってくれた? ほんの少しでもお姉ちゃんにも伝わったかな……わたしの気持ち……」

自らの手で胸を抱き、不安気に呟く亜里亜。徹底的に貶めてやった姉に対する悪罵、それはすべて同じ境遇である自分に対する自嘲でもあったのだ。

その気持ちは、麻希奈にも痛いほど伝わっていた。(亜里亜……こんな苦しかったのね……こんなに辛かったのね。それなのに、わたしは……)

同じ場所まで堕ちて、いや堕とされてこそ、初めて共感できる絶望の境地。壊れた心に去来するのは、自分を貶めた悪魔に対する怒りよりも、もっと——。

「あ、亜里亜……わ、わたし。貴方のこと……」

「ハハハッ! もういいよお姉ちゃん、同情の言葉なんていらない、お姉ちゃんもわかるでしょ!」

必死で搾り出した言葉を、しかし亜里亜は遮った。嗜虐的な、あるいは自虐的とも思える冷笑を浮かべ、自分と同じように堕ちた姉へと近づいていく。

「すべてを失ったわたしたちを癒やしてくれるのは、この、狂おしいほどの快樂だけ。だから、もっと楽しもうよお姉ちゃん……ふふ、一緒にさあ!」

破滅の宝玉が、禍々しい輝きを放つ。主の心傷を抉り煽り、さらなる悪意として暴走させているのだ。

「あ、亜里亜……待って! わたし……ああっ!」

ゾクリ! 話しかけようとした瞬間、不可視の力が麻希奈の身体に流れ込んだ。悪しきアークのエネルギーを受け、身体がゾクゾクと淫疼を増す。

「うあ……な、何? あ、熱い……あ、ああ!」

完全屈服回路の効果が増幅され、再び官能が疼きだす。その影響は身体の内側だけでなく、外側にまで信じられない変化をもたらしていた。

(あ、熱い。身体が……ああ、く、クリトリスが……はああ、と、溶けちゃいそう……!)

淫らな熱が、陰核へと一気に集まっていく。包皮を剥かれたままだったクリトリスが大きく脈を打ち、見る間に肥大化した。カリ首を広げてビクビクと脈打つ淫猥な姿形は、男性器そのものだった。

「あ、ああっ! な、なに……何よ、これ……!」

「立派なのが生えてきたね。淫乱なお姉ちゃんにぴったりのふたなりちゃんぽじやない、あはは!」

驚愕する姉を、破廉恥な言葉で追い打ちする妹。麻希奈は、ただ絶句するのみだった。

(こ、こんな……おちんちんなんて。わたしの身体……こ、ここまで改造されていたなんて……!)

組織に囚われての再手術時、完全屈服回路注入や増感改造と並行して行われたのだろう。少女の陰核は、醜悪な男性器へと改造されてしまっていたのだ。隆々と勃起したその威容たるや、先程まで自分を犯していた男子たちのものよりも逞しいほどだった。

「や……こ、こんな。い、いや……あ、あっ!」

悪の組織によって弄り回された肉体は、ただでさえ忌避すべきものだ。それに加えて、こんなに淫猥な男性のシンボルまで生やされてしまうなんて——凄まじい嫌悪感に、麻希奈は声を引き擧らせた。

だがそんな感情とは正反対に、改造された肉体は淫らな期待感に打ち震えていた。太い砲身をピンピンに勃起させ、青筋を立てて痙攣を続ける擬似男根。触れられてもいけないのに、怒張した先端からはいや

らしく先走りが溢れ出していた。

「嘘ばかり。本当にイヤならこんなにならないでしょ。本当は期待してるんじゃないの？」

「なっ……そ、そんなはず……ふあ、あ、あっ!!」  
羞恥に悶える姉を見下ろし、淫虐の予感に瞳を輝かせる亜里亜。靴を脱ぎ捨てると、ソックスを履いたままの右足でそそり立つ擬似男根を踏みつけた。

「ひっ?! や、あ、亜里亜……何を……」

「言わなくてもわかっているでしょ? セっかくこんな立派なおちんちん生やしてあげたんだもん。たっぷりと虐めてあげる……ほら、こうしてさア!」

ぎゅ、むぎゅっ! 靴下越しの足先を亀頭にあてがわれ、体重をかけられて押し潰された。剥き出しの性器を踏みつけられ、凄まじい痛みが駆け巡る。

「ひっ、ぐ、ううああっ! や、い、痛あ……く、ふうう! こんな……あ、あ、あっああ!」

ピクン! と腰を痙攣させ、壮絶な激感に打ち震える改造少女。陰核をもとに改造された擬似男根は、恐ろしいほどに敏感だった。逞しい竿も先太の亀頭も、野卑な外見とは裏腹にひどく鋭敏で、汗に蒸れたソックスの質感にまで感じ入ってしまうほど。それなのに肉幹が曲がるほどの強さで踏みつけられ、気が狂いそうなほどの激痛に打ちのめされる。

「やあ、や、やめて亜里亜……ひう、ぐうっ! おちんちん、か、感じやすすぎて……あ、ぐうう!」

初めて味わう男性器の感覚に、黒髪を振り乱して悶絶する麻希奈。ガクンガクンと腰が揺れ、力なく投げ出されていた両足が痙攣する。だが、改造男根は嬉しそうに脈動していつそう勃起を強めていた。

「あはは、こんなにふっといのに敏感なのねえ。すぐにクセになるわよ……ほおら、これはどう?」

姉の狂態に嗜虐心を煽られ、さらに責めを加速させる亜里亜。器用に足指先でなぞるようにして幹を愛撫し、あるいはカリ首の親指の先で擦ってみせる。

「くあ……ふ、ひいっ! やあ、そ、それだめ……ひう、くううう! んはあ、あ、あああ!」

踏みつけて虐められた後に、感じやすい部分ばかりを狙っての、劣るような快楽愛撫。今まで感じたこともない雄としての悦びが、ゾクゾクと駆け巡る。

「ひっ……な、何? 何よこれ……くうう。い、痛いの、中がじゅんじゅん疼いて……ああっ。お腹の奥から、な、何か湧き出してきた……!」

それは、少女が知るはずもない、いや想像したことすらない感覚だった。痛みを伴う鋭い愉悦と、むず痒さを伴う切ない疼き。肉棒全体が熱く蕩け、ひどくイヤらしい何かがドロドロと流動している。裏筋を指先でシコシコと摩られるたび射精衝動を煽られ、亀頭部分を親指で弄り回されれば、その何かが噴き出しそうになってしまおうのを抑えられない。

「あふうう……うあ、あ、ああっ! で、出ちゃう……はああ、な、何よこれえ。お、おちんちん熱く……はあああ、く、ふうううう……!」

溢れ出す濃厚な先走りが、股間にまでいやらしく糸を引く。発情しきったペニスは痛みを覚えるほどに硬く勃起し、小刻みに痙攣して悶えていた。

「ふふ、おっきなおちんちんこんなにパンパンに膨らませて、ちんぼ汁ダラダラ流して。そんなに亜里亜の足コキが気持ちいいの、変態お姉ちゃん?」

「やあ、そ、そんなことない……い、いっ! ああ、それだめ……さ、先つちよクリクリされると……んふああ、あ、溢れちゃいそうになっちゃう!」

痛いような、むず痒いような、切ないような。女のオルガスムスとはまるで違う、溜め込んでいたものを噴き出したくてたまらない雄の焦燥感。射精寸前のペニスをグリグリと踏み躪られて虐められ、麻希奈は黒髪を振り乱して悶絶した。

「ふふ、本当は気持ちいいクセに、セっかくわたしの足でしてあげてるのよ、光栄に思いなさい!」

「やつ……い、いやあ! や、やめて亜里亜……こんな、お、おちんちん……ひう、ぐうう!」

拒絶の言葉を無視され、発情ペニスを押し倒されて踏み潰された。壮絶な痛みにも叫ぶ麻希奈だったが、肉芯ではそれ以上に被虐的な悦びが渦を巻く。

「くふうう……あ、あん、あふうっ! やあ、おちんちん感じるう……ひい、い、痛いの、どうして……うああ、き、気持ちいい……のおお!!」

雄々しい外見とは裏腹、改造性器はマゾヒズムの塊だった。ひどくされればされる程切なさが増し、肥大化した肉峰は僅かの愛撫にさえ打ち震える。今もきつく踏みつけられながらも、蒸れたソックスの触感と生地越しに感じる足指の蠢きが気持ちよすぎて、自分から腰を振って押し付けるのが止められない。

「うう……こ、こんな。こんなにされて気持ちいいなんて……あ、亜里亜の足に虐められて、おちんちん、こんなに大きくなって感じるなんて……!」

「あははは、本当に変態マゾよねお姉ちゃんっ。妹の足コキでおちんちん膨らませて感じまくってるなんてさ、どうしようもない変態だよ!」

「うあ……あ、ああ。いやあ……違う。そんな……わ、わたし変態なんかじゃ……ひう、ぐうう!」

口では否定しても、心では肯定してしまっている。亜里亜の言う通りだ。おぞましい肉棒を生やされ、それを実の妹に足で踏み躪られて弄ばれ、そんな異常な行為に興奮を覚えているなんて——ただの変態、いやそれ以下だ。あまりの羞恥と背徳感に、生真面目な姉は涙を零して懊悩した。

「ふん、口答えしないでよ。お姉ちゃんはもうわたしのもの、わたしがお姉ちゃんの新しいご主人様なのよ……それをたっぷりと教えてあげるわ!」

「ひ……く、あ、ああ……!」

『奴隷』『ご主人様』——甘い言葉に完全屈服回路を刺激され、異常な官能に心と身体を同時に蝕まれ

る。ゾクゾクと被虐の炎が燃え上がり、またしてもご主人様には抵抗できなくなってしまう——。

「あ、ああ……は、はい。ご主人さま……。わたしは、あ、亜里亜の奴隷……ひ、あ、ああ……」

隷属への悦び、危険な恍惚と期待感が、少女の官能をいっそう煽り立てる。きつく踏みつけられたままのペニスがピンピンに充血し、少女の足を押し上げるほどの硬さで勃起して脈を打つ。

「あ……や、やああ。おちんちん、ま、また疼いて……はああ。お、大きくなっちゃう……うう！」

「やっぱり身体は正直ね。期待してるんでしょ……こうして、奴隷として鬨られたいでしょ！」

靴下越しに足底に伝わってくる雄々しい手応えに、亜里亜も淫らに瞳を輝かせた。暴力的なストンピングで、身の程知らずの勃起ペニスを責めまくる。

「はあ……あ、や、ああっ！ そんな……くうっ、そんなに乱暴にしないで……あ、ああっ！ お、おちんちん敏感すぎるのに……いいッ！」

虐められれば虐められるほど、無尽蔵に増してしまふ被虐の悦び。もともと存在しない器官と、存在すら知らなかった魔悦だ。どうすれば耐えられるかいやどう耐えればいいのかさえわからない——！

「ひうっ……あ、く、うううう！ いやあ、な、何か来る……うう、ううっ！ お、おちんちん熱いのお……はああ、な、何か奥から……あ、あああ！」

小刻みに腰を動かし、湧き上がる未知の衝動に喘ぐ麻希奈。勃起しきつたペニスを指で挟まれてシゴかれ、さらに射精欲求を煽られた。さらには親指で亀頭をシコシコと刺激されながら鈴口をつま先で擦られ、無理矢理に射精へと導かれる——。

「はああ……で、出ちゃう……く、うううっ！ やあ、そ、そんなに先つちよシコシコされたらあ……あはああ、お、おちんちん、も、もう……！」

「あははは何よだらしないわね、妹の足コキなんかで射精させられちゃうわけ？ まあ仕方ないか、お姉ちゃんもただの淫乱奴隷なんだもんねえ！」

「ひいひい、そ、そんな……ああ、あはああっ！」

拒絶できない——『奴隷』と蔑まれるのが幸福で、ペニスを虐められるのが気持ちよすぎて。

心も身体も、両方同時に屈してしまふ——！

（ああ……だめ、だめええ！ も、もう耐えられない……わたし、もう……！）

「あはは、ほおらいっちゃえ……ドビュドビュ射精させてあげる！ 妹の足コキで射精させられていっちゃう、おちんちん奴隷にしてあげるわあ！」

「ひいっ……いや、いやあああ！ そんなあ、おちんちん奴隷なんて……ふあ、あ、あああ！」

グリ、グリグリッ！ 奴隷と蔑まれながら、抉るようにして亀頭を踏み躪られる。すでに限界だった発情ペニスにとつて、耐えられる責めではなかった。

「ひいっ……い、イクッ！ やああ、で、出ちゃう……い、妹の足コキなんかで……変態おちんちん射精させられちゃう、おちんちんイっちゃうく！」

ドビュッ、ドビュビュビュッ！ 勃起しきつたペニスが脈を打ち、たつぷりと溜め込んでいた白濁をプチまける。女性が知るはずもない、すべてを吐き出し搾り出す雄の快感——初めて味わう射精絶頂の激悦に、麻希奈は腰を突きあげてイキ狂った。

「くふううう！ で、出てるうう……お、おちんちんドビュドビュっ……んお、おっおおお！」

遅しいサイズ通り、改造男根の射精量は底なしだった。次から次へと生搾りの白濁が溢れ出し、その間ずっと絶頂感が止まらない。止めようもわからない雄の絶頂に、麻希奈は舌を突き出し乱れ狂った。

「あはは、イったイった！ 恥ずかしいわねっお姉ちゃん、そんなにいっぱい出しちゃって。オチンチンミルク射精するの、そんなに気持ちよかったの？」

「あはああ……やあ、あ、ああ……あっ！」

あまりの絶頂感に意識が消し飛び、応えることさえできない。どろどろに汚れた靴下でペニスを蹴飛ばされても、指一本動かすこともできなかった。

（うああ……す、すごいっ。こんなあ……お、おちんちん射精してイクの……あ、亜里亜の足コキでイカされるの。す、すごい……うう……！）

人生で初めて味わう、すべてを吐き出す雄としての絶頂——射精の悦びに、心も身体も蕩けきつてしまふ。身も心も淫乱に改造された肉奴隷は、射精絶頂の激悦にもうメロメロだった。

「ふふ、言わなくてもわかるよ。わたしにも伝わってくるもの……お姉ちゃんの快感。ああっ、アークを通じてわたしにも流れ込んでくるわあ！」

アクメの余韻に悶える姉を見下しながら、恍惚とした笑みを浮かべつとりと濡れ、溢れる愛液は太ももを伝って精液まみれの靴下にまで達していた。

「お姉ちゃんもわかるでしょ？ アークが共鳴してるの……わたしの興奮も伝わってるでしょ？」

「うあ……あ、あ……ああ」

それは、麻希奈も感じていた。麻希奈のディバインアークと、亜里亜のデモンニクアーク。二人の改造少女にとつて魂とも言える表裏一体の二つのアークは、二人の感覚までもを連結させているのだ。

「これもアークの力なんだね。お姉ちゃんの快感が伝わって……あああ、もつとシたくなっちゃうよ」

責め手であるはずの亜里亜もまた、麻希奈の絶頂を味わい、危険な快楽を愉しんでいる。同時に麻希奈にも亜里亜の欲情が流れ込み、果てたばかりだというのに官能の炎は燃え盛ったまま。未だに精液の残滓を吐き出しきれないのに、擬似男根は早くもその硬さと屹立を取り戻しつつあった。

「お姉ちゃんももつとしたいでしょ？ まだこんなに元気なんだもの。あと二十回は行けるわよね！」

「あははは……あ、あ、ああ……あっ！」

「そ、そんな、二十回もなんて無理……ひい！」  
性蜜を吸ってドロドロになった靴下で、再び勃起  
ペニスを弄ばれる。雄の悦びを覚えてしまった男根  
は呆気なく溺れ、惨めな射精へと導かれてしまう。

「イ、イクッ！ ま、またイクっ……あ、亜里亜の  
足でっ、足コキでおちんちんイっちゃう〜！」  
「あははっわたしまでイっちゃううう〜！」

責めながらにして責められる者の被虐を愉しみ、  
責められる者は責める者の狂気に蝕まれる。身も心  
も蕩けあい、苦痛も快楽も共有される――。

「あ、あ、ああ！ イク、イクううう〜！」  
木霊する二人の嬌声、共鳴する二つのアーク。墮  
ちた姉妹は、いつ果てるとも知れぬ魔悦の連鎖を  
延々と貪り続けるのだった――。

※

それから、どれだけの時が経過しただろうか。  
何度も何度も身体を交わせ、数えきれない絶頂  
を貪り、もはや、互いに精も魂も尽き果てた。

「はあ、はあ、はあ、はあ……あ、あ……あ」  
荒く息をつき、床に倒れ伏す麻希奈。すべての精  
を搾り取られ、擬似男根はもはや消滅している。  
だが、身体は元に戻っても、心に刻み込まれた隷  
属の証は、決して消えることはない。

「くふ、くふっふふふふ！ これでお姉ちゃんはお  
たしの奴隷……そうよ、わたしだけのものよ！」  
同様の肉悦を貪りながらも、亜里亜は未だ欲望を  
ギラつかせていた。姉への執着は、狂的な程だ。

「さあ誓いなさい、誓うのよ！ わたしとずっと一  
緒にいるって、わたしだけのものになるって！」  
完全屈服回路に支配された奴隷にとつては、決し  
て抗えないはずの隷属命令。が絶対的な勝者である  
はずの少女からは、まるで余裕が感じられない。

「ねえ、お姉ちゃん！ わたしと一緒にってよ……

……ずっとずっと一緒にいるんだよ、ねえ！」  
我が假な暴君は、しかし、今にも泣き出しそう  
で必死に温もりを求めて、必死に声を荒らげていた。  
（……………ありあ……………）  
妹の訴えに、姉は、最後に残された心を振り絞る。  
蒼い光が、淡く、しかし力強く輝いた。

――亜里亜……ごめんね。わたし、わたし！――

「!? な、何……？ 何よ、これ……？」  
それは、声ではなかった。

もっと深く、胸に直接伝わってくる――心の声。  
墮ちてなお汚れぬ想いが、直接心に響いてくる。

「な、何!? 何よこれ……いったい何が……!?」  
刹那、亜里亜は見た。

姉の持つデイベインアークと、自身の持つデモニ  
ックアーク。二人の魂とも言える宝玉がこれまでに  
ない力を放ち、眩い輝きを放っているのを。

「こ、これは……ああっ!? くうう……あ、熱い。  
熱いのが……ああ、な、流れ込んでくる……う！」

これまでにないほどに熱を増す二つの宝玉。共鳴  
するアークを通じて流れ込んでくるのは、もう一つ  
のアークの所有者――麻希奈の心そのものだった。  
（こ、これもアークの力なの……？ 伝わってくる  
……お姉ちゃんの想いが、流れ込んでくる!!）  
先程までは、肉体的な感覚を共有させるだけだっ  
た。しかし今、アークは二人の心を繋いでいるのだ。

『亜里亜……亜里亜、亜里亜……亜里亜っ!!』  
「うあ……あ、ああ。あ、ああ……っ!!」

流れ込んでくる、熱く優しい姉の想い。  
どれだけ墮ちても決して決して汚れない、それは  
麻希奈の心の根源――もともと尊い人の心、愛情だ。

――ごめんね。ごめんね亜里亜。貴方は一人でこん  
なにも苦しんでいたのに――  
――わたし、お姉ちゃんなのに。貴方を守らないと  
いけないのに、たった一人の家族なのに――  
――愛してる……亜里亜。わたしも父さんも、貴方  
のこと、ずっと、ずっと愛し続けている――

「ああ……な、何これ。あつた……かい……」  
感じる――姉の、熱いほどの想い。  
絶望で凍てついた心を溶かすほどの熱い想いが、  
直接、心の奥底にまで流れ込んでくる。

「お、お姉ちゃん……ううう。お姉ちゃんは……こ  
んなにも、わたしのことを、想って……？」

嘘偽りのない純真な心――家族を想う愛情。  
不器用な、けれど何よりも温かいその想いは、傷  
だらけの少女の心を優しく包み込んでいく。

「亜里亜……やっつと通じた。わたしの、心……」  
「あ……お、お姉ちゃん……」

これもアークの力が、いや、人の心が起こした奇  
跡か。力なく倒れていた麻希奈はうっすらと目を開  
き、亜里亜の手をしっかりと握り締めていた。  
「亜里亜……わたしにもやっつとわかった。貴方の想  
い……今も、アークを通じて流れ込んでくる……」  
人の心に応え、奇跡とも呼べる力を発揮する古の  
神器。それは、偽りなき人の心を映す鏡でもある。

麻希奈の心が亜里亜に流れ込んでるように、亜  
里亜の心もまた、麻希奈に流れ込んでいたのだ。

「辛かったんだよね……苦しかったんだよね……  
わたし、わかっていたつもりでいたけど……亜里亜  
は優しいコだもんね。わたしより、ずっとずっと辛  
くって……寂しかったんだよね……」

壊れかけた少女の心で渦巻く感情。狂気じみた嫉  
妬も、真つ黒な憎悪も、すべては寂しさの裏返し。

麻希奈もまた、亜里亜と同じところまで墮ちて、同じ絶望を味わって。

「今ならわかるわ……亜里亜の、哀しみ……」

共鳴するアークを通じて、亜里亜の心を、今本当に理解することができたのだ。

「助けて……助けてよお姉ちゃん、パパあ——」

「辛い。怖い。寂しいの。ずっと、ずっと一人ぼっちなんて……イヤだよお、寂しいよお——」

「助けてよ！ お願ひ、助けてお姉ちゃん……助けて、たすけてたすけてたすけてたすけて——」

「亜里亜……ああ。貴方はこんなにも、ずっと独りぼっちで苦しんで……！」

感じる——深く重く、すべてを凍てつかせるような絶対の絶望。亜里亜の哀しみが、流れ込んでくる。

「ごめんね……ごめんね亜里亜。亜里亜のこと、わかってあげられなくて。ずっとずっと、亜里亜の本当の声に気づいてあげられなくて……」

引き裂かれそうな心の痛みを必死で耐えながら、麻希奈は、優しく妹を抱きしめた。

「わたしが……お姉ちゃんが、亜里亜を守ってあげないといけないかったのに。わたしだけが、亜里亜の味方だったのに……ッ！」

「お、お姉ちゃん……うう、あ、あああ！」

だが、それを拒絶するかのようになり、デモニックアークが禍々しく輝きを増した。

破壊の宝玉が心の闇を刺激し、溜め込まれていた少女の絶望を嵐のような勢いで溢れ出させる。

「あ、亜里亜……ああ、ぐ、うううっ!!」

女の心を壊すに足る悪感情の渦が一気に溢れ出し、嵐のような勢いで麻希奈の心にも流れ込んでくる。

（く……これが亜里亜の心の闇！ でも……!!）

まともに受け止めれば、自分も同じように壊れてしまうであろう絶望の塊。

だが、麻希奈は決して、逃げることはしなかった。（そうよ……これは亜里亜の苦しみ。だったら、わたしが背負ってあげる、受け止めてあげる……!!）

「お、お姉ちゃん……!!」

それは麻希奈の、揺らぐことない本当の想い。愛する者ためならなんだってできる——小さく脆く弱い人の心の、本当の強さ。

愛という名の、もつとも強い心の力！

「大丈夫だよ……亜里亜。これからはわたしが……お姉ちゃんが、亜里亜の味方だから……」

そんな主の心に応え、創世の宝玉が輝きを増す。強く眩く美しく、そして何よりも優しく——主の心を映した蒼い光が、赤き闇を包み込んでいく。

「亜里亜のこと、守るから……。寂しくないから。哀しくないから。ずっと、一緒だからね……!!」

「お、お姉ちゃん……ああ。わ、わたし……!!」

温かな想いに、凍てついた心を溶かされる。絶望の楔から、愛の手で救われていく。

「お、お姉ちゃん……でも、わ、わたし……!!」

「……大丈夫。お姉ちゃんが、一緒だから……」

それでも一度傷ついた少女は、人の心と触れ合うのを恐れる。優しさを知らない哀れな子犬のように震える妹を、優しい姉はそっと抱きしめた。

「わたしたちはたった二人きりの姉妹だから。亜里亜の苦しみも、哀しみも……全部、わたしが受け止めてあげる。全部、二人で分かち合うの……」

激しく輝く蒼と赤の光が、一つに溶け合っていく。

一度は分かたれた二人の心が、以前よりも強い絆で一つになったことを示すように——。

「わたしの喜びも、幸せも……全部。全部、二人で分かち合うの……!!」

「お、お姉ちゃん……おねえ、ちゃん……!!」

やがてそれは一つの光となり——。

暖かく、二人を包んでいく——。

「お姉ちゃん……うわああ、ああああ……!!」

「お帰るなさい……亜里亜」

泣きじゃくる妹を、姉はただ優しく抱きしめた。

人の心に感応し、無限の力を発揮する創世の宝玉・

ディバインアーク。

人の身体を失いながらも、人としての心を——何よりも強く美しい愛する心を持ち続け、それを失うことのないアークの主・来須麻希奈。

そんな主の心の力に、ディバインアークは、その真の力を解放した。

そう。それは、まさに奇跡だった。

教室中に広がる蒼い輝き。無からの創造さえ可能とする創世の力を以てすれば、失われたモノを再び呼び戻すことなど容易い。絶望に壊された妹の心も、完全屈服回路に蝕まれた二人の肉体も、失われた尊い命までもが、聖なる御業によって癒やされていく。

「う……うう……」

「……磯村くん。良かった……」

組織との戦いに巻き込まれ人としての死さえ許されなかった少年は、今、人間の姿を取り戻していた。意識こそ戻ってはいないが、命に別状はない。

「お、お姉ちゃん……あ、あの……」

人の心が起こした奇跡。姉の愛によって救われた妹は、しかし、かける言葉を見つけれないでいた。当然だ。本意でなかったとしても、これまでの行為を考えれば、簡単に和解などできるはずがない。

「ごめんなさい。ごめんなさい！ 謝っても許してもらえないなんて思っていないけど……でも……！」

「……いいのよ、亜里亜」

謝ることしかできなくて、泣き出しそうな声で謝罪を続ける。そんな妹を、姉は優しく抱きしめた。

「亜里亜は何も悪くない。大丈夫……わたしだけは、亜里亜の味方だから。ずっと一緒だから……！」

「あ……お、お姉ちゃん……！」

労るようにそつと頭を撫でて、包み込むように話しかける。不器用な言葉の中で燃える、温かい愛情。それはしつかりと、亜里亜の心に届いていた。

「そうよ、亜里亜は悪くないわ。悪いのは全部あいつら……ミレニアムよ！」

泣きじゃくる妹をなだめ、少女は拳を握り締めた。愛する妹を、大切な人を、罪のない人々を。

こんなにも苦しめた組織への正義の怒りが、人の心をこれ以上なく燃え上がらせる。

「亜里亜。これで決着をつけるわ……ミレニアムは、わたしが叩き潰す！ だから……！」

「あ、お、お姉ちゃん！ 待ってよ！」

優しい姉の言わんとすることは、すぐにわかった。だから亜里亜は、すぐさま強く訴えた。

「一人で戦うなんて、そんなのナシなんだからね！ わたしも戦うよ……お姉ちゃんと、一緒に！」

「亜里亜……」

強い意志で、真つ直ぐに瞳を見つめ話しかける亜里亜。強い決意は、麻希奈をも圧倒するほどだった。

「で、でも、貴方をこれ以上危ない目には……」

「いつまでも子供扱いしないでよ！ わたしだってパパの仇を討ちたいの、悪い奴らは許せないの！」

自分のためを思っている言葉だとわかってはいる。だからこそ亜里亜は、声を荒らげて主張した。

「今度はわたしの番だよ……お姉ちゃんが言ったんじゃない。これからは一緒、辛いことも苦しいこと

も、二人で分かち合おうって……だから！」

そんな優しい姉の、力になりたい。

無垢な少女の想いはひたすらに真つ直ぐで、だからこそ何よりも強かった。

「お姉ちゃんも、一人で背負いこまないで！ わたしだって、お姉ちゃんの力になりたいんだから！」

小さな胸を張り、勝気に語ってみせる亜里亜。その強さが、何よりも頼もしい。

不器用だけど健気な優しさが、何よりも嬉しい。

「わかったわ亜里亜……ふふ。昔からそうよね、亜里亜ったら、一度言い出したら聞かないんだから」

「ああ、また子供扱いして！ 見てなさいよ、わたしすつごく強いんだから……お姉ちゃんよりもずつと、ずつと活躍してみせるんだからね！」

「ふふ。頼りにしてるわ亜里亜」

こんなやりとりをするのも、何年ぶりだろう。どれだけ口喧嘩しても、すぐに笑顔で仲直り。

姉妹の絆は、家族の愛は、何よりも強い――。

（見守っていてね父さん。決着をつけるわ……わたしたち、二人で！）

熱い想いが、人の心が。二人のアークに、無限大の力を与える。

「行くわよ亜里亜……今度こそ、決着をつける！」

「うん！ やろう、お姉ちゃん!!」

蒼き神光と鮮紅の魔光が、二人の少女を包み込む。変身を終えた姉妹は、最後の戦いに向け飛び立った。

※ 「まさか真正面から突っ込んでくるとは……。まあ、この戦力を考えれば無謀とも呼ばませんが」

ミレニアム日本支部、本社ビル。社長室で、鳴海は一人呟いた。巨大モニターには、破竹の勢いで進撃を続ける侵入者の姿が映しだされている。

「はあああああ――！」 「つてやあああああ！」

白銀の鎧に身を包んだ女神と、漆黒の翼を広げた

悪魔――マキナとアリアは護衛の怪人たちを次々と打ち倒し、一直線に最上階まで進んでいた。

「ぐ、こ、こいつら……なんて強さだ！」 「こ、これがアークの力……つ、強すぎる……がああ！」

真紅の鞭が乱舞するたび鮮血が舞い、蒼い光刃が怪人ごと防壁を粉砕し道を切り開く。抜群のコンビネーションで互いを高めあう女神と悪魔。圧倒的な力の前には、数百単位の怪人軍団も相手にならない。

「さすがは組織の最終兵器……素晴らしい力だ。ミレニアム最高傑作の二人が相手では、日本支部の総戦力を以てしても、勝ち目はなさそうですね」

組織が壊滅していく様を、鳴海は冷静に見つめていた。その表情からは、むしろ余裕すら感じられる。

「はっ！ 余裕ぶってるけどさア……それがどーゆーことかわかってんの？」

ズガアアアアア！ 威勢のよい吠<sup>ウラ</sup>呵と同時に、鋼鉄製のドアが両断された。立ち込める白煙の向こうから、二人のシルエツトが浮かび上がる。

「護衛のスレイブノイドはすべて倒したわ。つまり」

「次はあなたの番ってことだよ、鳴海のおっさん！」

ブンツ！ 白熱するブレードの切っ先を突きつけ、高らかに宣告するディバインハート。続いてアリアが、鋭いクローで鷲掴みにしていた怪人の残骸を、鳴海の前に投げ捨てる――『お前もすぐにこうなる』

と言わんばかりの悪魔的なパフォーマンスだ。

「大した威勢ですね亜里亜。ついこの間まではわたしに尻尾を振っていた負け犬が、勇ましいことです」

「は、安い挑発ありがとーね。おかげで余計ムカついてきたわ……デモニツクアークもギンギンよ！」

生意気な笑みを浮かべ、勝気と言葉を返す銀髪の悪魔。胸を飾るデモニツクアークは、猛る少女の感情を受け真つ赤な輝きを放っていた。

「今こそ決着をつける時……終わりよ、鳴海！」

ディバインアークもまた、共鳴するように輝



きを強めていた。冷静さを保ちつつも、マキナもまた、倒すべき敵を前に義心を高ぶらせているのだ。「いくわよ、アリア!」「うん、お姉ちゃんっ!」アークのエネルギーを全開し、同時に仕掛ける二人のヒロイン。女神の剣と悪魔の爪が、今こそ宿命の怨敵を断罪する――。

「……確かに、これで終わりですね……ただし」だが、断罪の刃が、鳴海に届くことはなかった。「!? な、何!?」「こ、これは……!?」

二人のヒロインを前に、悠然と構えたままの大幹部。その身体から伸びた不気味な軟体触手が、恐るべき力をもって二人の攻撃を押しさえ込んでいた。「終わるのは……貴方たちのほうですよ!」

ぐにゃあ……ぐちゃ、にちゃあ。肉が腐り落ちるようなおぞましい粘音を立てながら、鳴海の姿が変わっていく。細身だった肉体はブクブクと軟体質に肥大化し、スーツを破って何本もの触手が突出した。頭足類の触腕じみた吸盤つきの軟体触手に、大きく吸管を広げたヒルのような肉管。獐悪な海蛇の群れが牙を鳴らし、半透明のチューブが妖しく輝く。

「気をつけてお姉ちゃん! こいつの正体はッ!」危険な雰囲気を感じ、すぐさまその場から飛びすさる二人のヒロイン。直後、電気クラゲの触手から数万ボルトもの雷が発射され、床を焼き払った。「人であることをやめ、ミレニウムに魂を売った奴隷……スレイブノイド!」

「フフフ、その通り! ですが、貴方たちが相手をしてきたような試作品とは訳が違いますよ。これこそミレニアムのテクノロジーの粋を集めた究極の生体兵器、スレイブノイドの完成体の一つ……!」

鳴海、いや鳴海だったものは、吸盤状に変形した唇で饒舌に語る。頭足類に腔腸動物、巨大な海蛇や獐猛な肉食魚――機能性のみを追求し独自の進化を遂げた異形の深海生物を、人間をベースとして何

種類もかけ合わせたような猛悪なシルエット。魔物じみた姿からは、僅かの人間性も感じられない。「見なさい。これこそ新たな千年王国の支配者の姿……我が名は、クラークスレイブ!」

クラークスレイブ――伝説の悪魔の名を持つスレイブノイド。変身を終えた大幹部からは、これまでの怪人とは桁違いの凄まじい力が感じられた。

「ディバインハートマキナ、そしてデモニックギアアリア。残念ですが、貴方たちはここで廃棄させてもらいます。再び貴方たちほどの適合者を見つけないにどれだけの時を要するのか……本当に残念ですよ!」

ビュン、ビュオオオッ! 無数に生えたイカの触手が猛烈な勢いで伸長し、二人に襲いかかる。「!? 早いっ!」

鈍重そうな外見と反し、スレイブノイドの攻撃速度は驚異的だった。強化された動体視力でも捉えきれないほどの速度で、無数の触手がマキナに迫る。「危ない、お姉ちゃんっ!」

だが近接高速戦闘であれば、デモニックギアも負けてはいない。影さえ残さない高速起動で素早く姉を庇い、神速の鞭捌きで触手を撃ち落とす。「あ、ありがとうアリア……助かったわ」

「ふっふっふん♪ 言ったでしょ、わたし強いんだよ。それに……お姉ちゃんの力にもなるって!」したり顔で軽口を叩くアリア。彼女とて相手が一筋縄で行かない強敵だとわかっている。それでもなお驚かない勝気さに、マキナは勇気づけられた。

「姉妹仲がいいのは結構ですが……気を抜かれると、二人まとめて地獄に行くことになりまますよ!」

巨大な海蛇が顎を開き、姉妹を噛み裂かんと食らいかかる。咄嗟に回避した二人のヒロインを、数えきれないほどの触手が四方八方から追撃する。「ちっ! 避けても避けてもキリないじゃん!」

黒い翼をはためかせ、踊るように攻撃を回避していくアリア。迫る海蛇をブレードで斬り伏せるマキナだったが、どれだけ捌いても攻撃の波はやまない。(確かにこのままじゃキリがない。だったら!)

覚悟を決めた瞳で、素早く目配せするマキナ。(へへ、気が合うねお姉ちゃん。やつぱ、守ってばつかはわたしたちの性に合わないもんね!)

アリアもまた、無言で頷き肯定を示す。その決断は、僅か一秒にも満たず――

「行くわよアリア!」「任せてお姉ちゃん!」以心伝心、言葉を交わす必要もない。僅かのタイムラグもなく、二人は同時に飛び出していった。

「お願いディバインアーク、わたしに力を貸して!」

ジェネレイト・アークセイバー!!

エナジの翼を広げ、全力で直進するディバインハート。防御を完全に捨て、すべてのエネルギーをただ攻撃だけに集中させた、乾坤一擲の突撃だ。

「一か八かの特攻ですか。ふ、愚かな選択だ!」うねり狂う無数の触手が牙を開き、迎撃に入る。専守防御でようやく凌げていた連撃だ。防御を捨てた攻撃態勢で、防げるはずもない――。

「そうね。でもそれは」「一人だったらでしょ?」

ヒュンッ! 影さえ残さぬ俊速で、女神の側面から悪魔の少女が回りこむ。マキナだけを狙っていた触手群めがけて、鮮紅の多発鞭が振り下ろされた。

「デモニックナインティル、ソウルバインド!」

ヒュッ……ピシィッ!! 赤い残像を描く悪魔の鞭が、怪人の触手を絡めとる。雁字搦めに縛り上げられた触手は、自慢の速度とパワーを殺されていた。

「む!! アリア、貴様……ぬああああつ!」

「お姉ちゃんっ! 今よ!」

力任せに拘束を振りほどこうとするクラークスレイブと、それを押しさえ込むデモニックギア。長時間は持たない――だが、これだけあれば十分すぎ



ぐにや、にゆるる。アークに巻きついた放電触手が、不気味な蠕動を開始した。同時に、流し込まれる電磁パルスが、微妙に波長を変化させる。焼き尽くすような強さではなく、神経を麻痺させるような微弱な電波を流し込みながら、にゆるるにゆるると舐め回されるようにアークを愛撫される。すると……

「ひつ……あ、あ、ああつ?! は……ふ、うう!」

突如流れ込む、甘い愉悦。これまでの激痛とはまるで正反対の、官能神経を直接舐め回されるようなどうしようもない快感——身体が勝手に発情して熱を持ち、じんじんと下腹が疼いてたまらない。

「な、何これ……はあんつ! ま、まさか……!」

「ククク、ご明察。痛覚の代わりに、快楽中枢だけを刺激しているわけです。細胞の一つ一つまでを快楽に埋められていく感覚……いかがですか?」

「はあ……そ、そんな……く、ふ、あああうつ!」

くちゅくちゅとアークを舐め回されると、身体中の神経を愛撫されているような甘味がひた走る。

媚薬を打ち込まれて発情させられるのとも、屈服回路に操られるのともまるで違う。全細胞を全神経を、いや魂までもを蕩かされるような壮絶極まる快感。全身からじつりと汗が噴き出し、縛り上げられた左足が辛そうに痙攣する。溢れ出す愛蜜は、べつとりとショーツを濡らしてしまっていた。

「ひ、卑怯な! こんな……ふあ、あああつ!」

悔しげに叫ぶマキナだったが、すべての感覚を支配されてはどうしようもない。電撃触手にアークを愛撫されながら快楽パルスを流されれば、全神経をしゃぶられるような魔悦に翻弄されてしまう。

「く……だ、だめ! 耐えるのよ……い、今は耐えて、チャンスを待つ……諦めちゃ、ダメよ!」

それでも必死に唇を噛み、必死で喘ぎ声を殺す気丈なヒロイン。しかしそんな健気な決意にも、舐まれてしまったアークは応えてくれない。一瞬は着い

輝きが灯るものの、すぐに弱々しく明滅してしまう。

「ふふ、まだ抵抗しますか。いいでしょう、ならば残されたエナジーを根こそぎ奪いとってあげます」  
必死に抵抗を続ける女神を追撃すべく、新たな魔手が伸ばされた。半透明のセラチン質な粘触手が興奮して激しく揺れる巨乳へと絡みついていく。

「うあ……む、胸……く、ふ、うううつ!」

ぶよぶよと柔らかい粘感が、剥き出しの乳肌に直接染みこんでくる。嫌悪感に身震いする少女だったが、淫化した肉体の反応はそれ以上に顕著だった。ぎゅうう、と触手を食いこまされながら乳房を搾り上げられ、蕩けそうなほどの乳悦がひた走る。

「はう……く、ふううつ! うあ……あ、ああ!」  
「くううつ……す、すごい! こんな……わたしの身体、か、感じやすすぎる……うううつ!」

アークを弄ばれ内側から改造された肉体は、泣きたくなるほどに脆くなつてしまっていた。インナーどころか表皮や組織までを剥ぎ取られ、剥き出しにされた快楽神経を直接弄られているような、狂気にも似た凄まじすぎる快感。乳肌をヌルヌルと愛撫されるだけでも肉芯までもが沸騰しそうに熱を持ち、火照った乳房をむぎゅうつと揉み潰されれば、それだけで意識が消し飛びそうに感じてしまう。

「はあ……く、ふうう! な、何これ……はあ、あああつ! おかしい……く、ふああつ。お、おっぱい感じすぎる……ふあ、あつあああう!」

僅か数回の搾乳だけで、秘唇が決壊し大量の愛蜜が溢れ出す。Dカップの巨乳をぶるんぶるんと揺らしまくり、ピンクの長髪を振り乱して悶え喘ぐ乳辱の女神。信じられないほどの乳悦は鉄の意志でさえ抑えきれず、悩ましい敗北の声を上げてしまう。

「言っただけでしょう。アークさえ抑えてしまえば貴方たちの肉体は弄り放題だと。快楽に対する耐性はもはや皆無、そして肉体感度は通常の十万倍にまでア

ップしておきました。ふふ、たまらないでしょう?」

「な!? そ、そんな……はあ、ひいひいっ!」  
馬鹿馬鹿しいほどの数値、そしてそれが真実だと実感してしまうほどの信じがたい激悦。むにゅ、むにゅと乳房を揉み込まれるたび、何万倍にも増幅された狂いそうなほどの快感が駆け巡る。同時にアークを甘噛みされて全神経を愛撫されれば、さしもの女神も悩ましい喘ぎを抑えきれない。

「ふああ、ダメ、ダメ……ダメええ! こ、こんな感じすぎて……あああ、も、もうイツ……!」

ゾクゾクと駆け巡る敗北の予感。耐えようとしても耐えられない、魂そのものを陵辱される絶望的な快感。蕩けそうに熱くなった乳房をぎゅうう、と形が変わるほど強く揉まれれば、もう——!

「イ、イク……いやあ、も、もうイクううつ! こんなあ……お、おっぱいだけでイカされちゃう!」

ぶしや、ぶつしやああ! あさましいイキ声とともに、屈服した秘唇が潮を噴く。触手拘束された右足をガクンガクンと痙攣させながら、乳房を揺すりたくつてイキ狂う敗北の女神。強気だった美貌は、もはやマジヒステリックな愉悦に蕩けきっていた。

「ふふ、もう達してしまいましたか。ですが本当の責め苦はこれからですよ……さあ、アークのエナジーを一滴残らず搾り取らせてもらいます」

「はあ、はあ、はあ……うあ、あ、ああ……!」  
十万倍にも増感されたアークの余韻から未だ帰つてこれない絶頂少女に、さらなる責めが追加された。達した直後で焼けそうなほどに熱くなっている淫乳を、今までの力できつく搾り上げられる。

「うあ……だ、だめ! お、おっぱいはダメ……今いったばつかなのに……ひゅ、揉むの強い!」  
ぎゅ、ぎゅう、むぎゅうう! 形よく整ったカップが歪むほどに強く触手をめり込まされ、いったばかりのおっぱいを搾られまくる。根元からぎゅうぎ

ゆうと圧搾されながら、乳房そのものを搾り潰すかのような勢いで何度も何度も搾られまくる。それだけでも再び意識が飛んでしまいそうなほどの乳悦だったが、真に恐ろしいのはそれだけではなかった。

「ひうあ、な、何これ……ああ！ お、おっぱい熱いの……な、中でドロドロ……はあ、んふう！」

休む間もなく搾られまくる乳房の内部で、何かひどくいやらしいモノがドロドロと渦巻いている。勃起乳首をシコシコとシゴきあげられると、それを吐き出したいという危険な欲求が抑えられない――。

（うああ……こ、これっ！ お、おちんちん生やされた時みたい……あ、溢れちゃいそう……っ！）

知らない感覚ではなかった。中に溜め込まれたものをドビュドビュと発射したい、きつく搾り取られて一滴残らず吐き出したい――先刻教え込まれた射精の悦びにも似た危険な衝動が、搾られ続ける乳房の内側で湧き上がっている。シゴかれまくる乳首の先端からは、粘っこい乳液が零れ始めていた。

「ふあ、な、何これ……くうん！ な、何か出てる……ひあ、おっぱい……で、出ちゃう……う！」

ぎゅ、むぎゅうううう！ 限界まで張り詰めた淫乳を、凄まじい力で搾り上げられた。痛み混じりのマゾヒスティックな乳悦に、再び意識が掻き消え――もはや抑えるものをなくした乳内の何かが、搾られるがままに勢いよく溢れ出してしまふ。

「ひっ……で、出る……出ちゃううう！ やああ、お、おっぱい……んふああ、あつひいひい……！」

ぶしや、ぶつしやああ！ 意識が白く溶けるほどの絶頂感とともに、両の乳首から白濁ミルクが噴出する。母乳を噴き出すと同時に射精すら上回る絶頂感が駆け巡り、マキナは喉を仰げ反らせ悶絶した。

「ひい、い、イクッ……おっぱいイってる、おっぱい出ってるう！ ひうう、ま、まだ出てる……こ

んなあ……す、すごい……イイ……イッ！」

数万倍にも増感された女体で味わわれる、溜め込んでいた物を吐き出す解放感。クセになるほどに溺れさせられた射精の快感よりも、ずっと深く甘い射乳の悦び。気が狂いそうなほどのオルガスムと同時に、ミルクを吐き出すたび全身の力が抜けていく。

「はあ、はあ、はあ……う、ああ。な、何これ……くうう。え、エネルギーが抜けて……あ、ああ」

「どうですか、残されたエネルギーを母乳として搾られる感想は？ しかも噴乳時には射精の数十倍もの快感が味わえるのです、素晴らしいでしょう？」

「ひうう……そ、そんな……あ、ああつ！ ひうう、ま、まだ出て……んおお、お、おおっ！」

休む間もなく乳を搾られ、またしても射乳の快感を叩き込まれる。ミルクを噴き出すだけでも気持ちよすぎて狂ってしまいそうなのに、残り少ないエナジーまでも奪われ、加速度的に理性が削られていく。

（うああ……す、すごいっ！ アークのエネルギー吸われるの……あああ。気持ち、いい……っ！）

全身から力を奪われていく破滅的な虚脱感が、母乳を搾り取られる被辱の悦びを倍化させる。エネルギーを失ってさらに抵抗力を減じた女体を容赦なく責め抜かれ、またしても少女の意識が消えていく。

「ひい……い、イクッ！ だめ、力が抜けて……んおおつまたミルク出る、ミルク出たらまた吸われる、吸われたらまた……またいつちゃうう！」

イクばイクほど母乳を搾られ、ミルクと同時にエネルギーを奪われる。力を奪われさらに脆くなった乳房を責め抜かれれば、すぐにもまた射乳絶頂を極めさせられてしまふ――終わらない魔悦の連鎖に、母乳を噴き出しまくってイキ狂うディバインハート。

アークを支配されての改造魔姦に、反逆の女神はもうメモロだった。

「ああ、お、お姉ちゃん……ひう、ぐ、ううっ！」

抗えない肉悦に弄ばれているのは、アリアも同じ

だった。姉同様にアークに電磁バースを注ぎこまれ、触手に愛撫されるたび全身を舐め回されるような肉悦が駆け巡る。辛そうに痙攣を続ける四肢に吸盤触手が絡みつき、後ろ手に拘束されて空中へ引きずり上げられた。両手を腰の後ろで組まされ、お尻を突き出したような恥辱のポーズを取らされてしまふ。

「さてアリア。貴方からもアーク残存エネルギーを搾り取ってあげますが……その前に、わたしの寵愛を裏切った貴方にはキツイ折檻が必要ですねえ」

不気味に微笑むクラーケンスレイブ。少女の四肢を拘束しているものより何倍も太く逞しい肉蛇が、鎌首を擡げて何匹も起き上がった。無防備に突き出された剥き出しの尻尻を、極太の大蛇が包囲する。

「ひ……な、何よ。な、何する気……」

「お仕置きですよ……さあ、尻を出しなさい！」

絶体絶命のピンチに、勝気な少女も思わず怯えた声を上げてしまふ。ふるん、と揺れた桃尻めがけ大きくしなつた触手が猛烈な勢いで叩きつけられた。

「ひっ……ぐ、ああつ！ 痛あ……あああー！」

マキナ同様にアークを弄られ、何万倍にも敏感にされた身体に対し、情け容赦ない力任せの殴打。凄まじい痛みヒッパを揺すり、アリアは痛ましい悲鳴を上げた。一撃だけで真つ赤に腫れ上がったしまった尻たぶを、触手鞭が何度も何度も強打する。

「痛いですが？ ですが貴方の犯した罪はこの程度では償えませんが……そらっ、そらそらそら！」

「ひっ！ や、いや……ひいひい！ お、お尻痛い……ひぎい、ひい、ひぎいひいひいっ！」

乾いた殴打音に続き、痛ましい悲鳴が木霊すかし（いやあ……く、悔しいっ！ こ、こんな恥ずかしいおしおき……パパにもされたことない尻叩きを、こんな下衆に何十発と浴びせられ、悔しさと敗北感が湧き上が



る。屈辱と苦痛に涙を零すアリアだったが、改造された肉体を感じるの痛みだけではなかった。

「ひっ……あ、あふっ……ふああっ！ やあ、お尻熱い……ふあああ、あふ、あふああっ！」

（やああ、こんな！ 感じよくなっちゃうなんて！）

アークを弄り回され、アリアの尻峰はクリトリスにも匹敵するほどに鋭敏な快楽器官に改造されていた。触手鞭を叩きつけられるたび、肉が弾けそうな痛みとともに、神経そのものが蕩けそうなほどの虐悦が駆け巡る。真つ赤に腫れ上がった臀部はジンジンと焼けそうなほどに熱を孕み、いつまでも消えない苦痛はやがて切ない疼きへと変換されていく。

「はあん……く、ふ、ああっ！ お、お尻熱……いやあ、う、疼いちやう。あああ、ふあああくん！」

痛くて熱くてそれ以上に気持ちよくて、じつとなんてしてられない。犬のようにお尻を突き出した空中のポーズで、腫れ上がった豊臀を振りたくって悶える変身少女。お尻と一緒に揺れる悪魔の尻尾は、まるでおねだりするようにいやらしく揺れていた。

「何ですか、自から尻を振って。尻をぶたれて感じているとは、どこまで淫らなのですか貴方は！」

「ち、ちが……ひ、くうんっ！ そんな、か、感じてなんて……お尻振ってなんて……ああああ！」

「ビシイイイン！ 一際猛烈な勢いでヒップを打ち据えられ、下半身すべてが蕩けそうなほどの肛悦を叩き込まれる。苦痛混じりの激悦に意識が消し飛び、緩んだ秘唇から大量のおしっこが溢れ出した。

「ひゃあ……や、あつ！ お、おしっこ漏れて……ひ、くうう。うああ、と、止まらない……い！」

じよるじよる、じよぼぼぼ……勢いよく零れ出す黄金水。生ぬるい感触が、太ももを伝ってブーツの内側にまで染みこんでくる。恥辱と敗北感に涙するアリアだったが、しかし改造された肉体はそれ

すらも快感として倒錯してしまっていた。排泄と同時に尿道から陰にまで甘い痺れが走り、小便に混じって愛蜜までがたらたらと溢れ出してしまふ。

「や、あ、ああ。こんなあ……は、ふううっ！ わたし、お、おしっこしながらいつてる……お尻叩かれて、おしっこ漏らして……いつちやてるう！」

あまりに屈辱的な絶頂に、ツインテールを振り乱して懊悩するお漏らし少女。尿とともに残されていたエネルギーまでもが漏れ出してしまい、心からも身体からも力が失われていく。

「おやおや、お仕置きの最中に粗相して、その上絶頂まで食るとは……とんだマゾですね。貴方のような淫乱娘、父親も見捨てるはずですよ！」

「やつ……そ、そんな！ い、言わないで。あ、亜里亜マゾじゃないもん……淫乱なんかじゃないもん

パ、パパは亜里亜のこと愛して……あつあああ！」

心身ともに弱りきったところでトラウマを鋭く抉られ、悲痛な呻きを上げるアリア。追い打ちをかけるように、新たな触手が少女に迫る。

アクメの余韻とスパキンキングの虐悦でひつきりなしに痙攣し続けているお尻の割れ目に、少女の足ほどもある男性器型の触手があてがわれた。

「ひ、ひい……や、やめてえ！ そんなあ……それ太すぎ……だめ、い、今いつたばつかなのにそんなスゴいのなんて……ひい、ゆ、許してえ！」

性奴隷として蔑まれてきた経験が、これからの行為を想起させる。ふるふるとツインテールを揺らし、涙を流して許しを乞うアリア。普段の生意気さとのギャップは、陵辱者の嗜虐心をそそり立てる。

「ダメです、許しません。さあ、お仕置きです！」

メリ、メリメリメリメリ！ ズブズブズブツ！

「ひい……あ、あ！ あつがああ——！！」

一片の情けも与えられず、一気に腸奥までを貫かれた。排泄穴から脳天にまで突き上がる肛悦に、ア

リアは喉を仰げ反らせ悶絶する。

「んおお、は、入る……入ってるう！ お、お尻いい……んおお、ふ、太い……いいいい！」

度重なるスパキンキングと失禁絶頂によって蕩けきっていたところに、情け容赦ない力任せのアナルフ

アック。性器同様、いやそれ以上にまで淫乱になっていた排泄穴を穿り抜かれ、腸粘膜をゴリゴリと抉られれば、それだけで、もう――。

「ひああ……イ、イクッ……イクううう！ やあ、お尻入れられただけでいつちやう……んはあああつまた出ちゃう、お漏らししていつちやうう！」

じよるろ……ぶしや、ぶしやああああ！ アナル挿入の激悦に、またしても呆気なく飛ばされる淫乱少女。緩んだ秘唇からは止めどなく小水が溢れ出し、尻穴と尿道とにたまらない絶頂感が駆け巡る。

アクメの幸福感に思考をショートさせられ、エネルギー漏れによって身体からも力が奪われていく。

「うああ……だ、ダメ……ダメえ！ た、助けてお姉ちゃん……わたしい、も、もう……！」

朦朧とする意識の中、必死で助けを求める妹。だが自分を守ると誓ってくれた姉も、もう――。

「あ、アリアあ……ダメえ、わ、わたしもイクッ……はああんっおっぱいイクッ、おっぱい搾られながらズボズボされるの……す、すごすぎるのおく！」

マキナもまた絶望的な快楽から逃れられず、惨めなアへ顔を晒してイキまくっていた。搾乳吸引はそのままだ、肉太なペニス型の触手を突き刺され、猛烈なピストンで子宮を挟られイカされまくる。絶頂

のたびエネルギーを容赦なく吸引され、もはや意識を保つだけでも精一杯。胸を飾るディバインアークは、もはやその輝きを殆ど失ってしまった。

「あ、ああ……そんなあ。お、お姉ちゃんまで……ひ、あああ！ やあ、お、お尻動かさないで……ん

ふああああ、ふ、深い……深すぎるうう！」

もう一度  
言ってみる  
このガキ!!

—んだとお!?

そそっちが  
先に絡んできたん  
じゃないですか

あなたも「魔術」を  
使えない人種なのは  
見てわかりますし…

そりやお前らの  
パーティだって  
そーなんだろうが?

うちは  
この果刃が  
東方の術を…

……もう  
いいだろう

いつまでそうして  
口論を続ける気だ  
二人とも

せっかく開けた  
「聖鈴」への扉…

時間が惜しいと  
思わないのか  
まったく

いさかいを納める凜とした声か!

# 聖なる鈴の 啼くセカイ

第11話 競う者達

漫画 COMIC 琴慈

その女戦士の  
言う通りだ

だ…だけとよ  
果刃

オレは  
ごめんだぜっ

魔術も使えねー  
女とガキの  
パーティと  
一時とはいえ…

—そなたが

己の力を過信し  
調子に乗って  
奥に進み過ぎた  
一週間前は

どんな結果に  
なったかな

奥への扉が  
開いている…  
これは

既に何者かが  
『聖鈴』の下へと  
進んでいるやも  
しれぬのだぞ

そうやって  
今は手え組んだ  
としても

『聖鈴』に  
辿り着いた時  
こいつらに  
奪われたら—

べ

別に『聖鈴』は  
誰の物でも  
ありませんっ

奪うなんて  
そんな…

クラリスさんは  
もう二度と  
そんな真似  
しないって—

もう…?

前には充分やった  
事あるような  
言い方だな

露出度高え  
変態戦士かと  
思ったが…

強盗の気も  
あるなんてな

カク



クラリスさんの事を  
悪く言うのは  
やめて下さいっ！

どう見ても  
オレの果刃の方が  
能力値高えし

…美人  
だしな

クラリスさん  
だって美人ですっ  
それに…

…あの者が  
あんなに  
馬鹿者だった  
とはな

置いて  
いくか

キキキ

絶対  
こっちのが

能力も顔も  
スタイルも

一流だろうが!!

わ

私はあの子を  
見捨てるのは…

…んだと  
見ろっ！

このガキ!!

?

!!

ザッ

な…

そんなこと  
ありませんっ!!

クワッ!

……っ

クラリスさんの方が  
ずっとずっと

凄いですから!!

ズッ! ズッ!

何をくだらない  
事で争って—

…やめ…っ

や…

許せませんっ

僕……  
我慢できない

クラリスさんの事  
あんな風に  
言われたままじゃ

かああ  
ああ

お前…

……っあ

くだらなく  
なんてないです!

だって…



あ…

あっ♡

クラリスさん…  
かわいい

やっぱり

セクセク

はっつ

あ…んっ♡

僕の  
クラリスさんが  
一番です…っ

果刃だっ  
ておっぱい  
いじられたら  
めろめろな声

ぶっ!!

こ…  
こんなどころ…で

…!!



んな抵抗したって  
お前をよがらせる  
方法なんて

…っ!?

オレは山ほど  
知ってるんだぜ?

オカ

はっ



衝撃の最終回！  
奴隷に仕立てられた母と娘の末路とは…？

筆狩師エリナ  
奴隷人形の学園

最終話 Beginning of the End

ちくまじゅうこう  
小説 筑摩十幸

挿絵 ころきくう



筑摩十幸の二次元ドリームクベルズ  
最新刊「聖戦姫ワタルキユウ・シス  
タリス」は5月下旬発売予定！

## 登場人物紹介



### 岬エリナ

カリスマ美少女モデルにして、退魔師の顔も持つ少女。魔を祓う筆を操り、刃々牙と戦う。



### 岬那海

失踪したエリナの母親。退魔師だったが、現在は黄義年の肉奴隷に墮ちる。

### 斑目

人外の力を使う刃々牙の一人。岬親子の調教を行う。

### 黄義年

聖天宗教主。聖天学園の創設者で、人外の力を持つ。

### 前号までのあらすじ

対妖魔組織AAAの少女エージェント・まどかとともに、聖天宗の支配する学園に潜入したエリナだが、そこで再会した母は、黄義年の忠実な奴隷となっていた。黄に囚われ学園内で辱められるエリナは魔力の源泉である己の黒髪までも断ち切れ、母親とともに黄の奴隷人形「バンヴォーラ」として作り替えられていくのだった。

乳房の造形には、整形バストのような人為的

もともと大きめだった双乳は二回りは豊かさを増しており、スレンダーなボディラインから明らかに逸脱している。それだけのポリウムにもかかわらず真円を保っている

「エリナの身体に母親の脂肪細胞を培養加工した特殊シリコンを注入し、豊胸、豊尻改造を行いました。スリーサイズは上から一一〇、五〇、一一〇〇となつて

ただ立っているだけでも目線、つま先や指先まで行き届いた佇まいが、他の凡百の人形化少女と一線を画している。

「という建前はさておき……まずは、その象徴たる美しき母娘を紹介いたしましょう。筆狩師岬那海と岬エリナです！」

「ああ……エリナ……」

地下室中央には円形のステージが設けられ、それを取り囲むようにテーブルが並べられている。テーブルに着いた男たちは目元を仮面で隠し、グラス片手に人形化された女子校生たちを隣にはべらせている。色にも金にも飽いている彼らだが、今日は淫らな期待に胸と股間を熱くしていた。

「おお……なんと美しい。バンヴォーラがこれほどのモノとは……」

「皆様、本日は我が聖天宗の誇るバンヴォーラのお披露目パーティーにご参加いただきありがとうございます。人を意のままに操るバンヴォーラの技術をもつてすれば、我々は人間社会への影響をより拡大することが可能となるでしょう」

「ああ……エリナ……」

「斑目のアナウンスが地下フロアに流れる。地下室中央には円形のステージが設けられ、それを取り囲むようにテーブルが並べられている。テーブルに着いた男たちは目元を仮面で隠し、グラス片手に人形化された女子校生たちを隣にはべらせている。色にも金にも飽いている彼らだが、今日は淫らな期待に胸と股間を熱くしていた。」

「ああ……エリナ……」

翌日。淡島に豪華クルーザーが次々に寄港し、聖天学園には黒塗りの車が整然と並んだ。

「ああ……エリナ……」

来賓には国内外の政界財界の著名人の顔も多く見られた。彼らは人間社会に紛れ込んだ刃々牙たちである。学園の視察という名目とは別に、彼らの真の目的はその地下にあつた。

「ああ……エリナ……」

「ああ……エリナ……」

「ああ……エリナ……」

おります。また臓器はすべて淫獣のモノと交換済みで、食事は基本的に精液しか受けつけません。そして――」

斑目は一呼吸あけ、マッドドクターの邪悪な笑みを浮かべる。

「絶対服従の精神コントロール、メンテさえすれば死ぬこともない永久の肉体。この技術を欲しいと思われ方は大勢おられるでしょう。ぜひこの機会にその素晴らしい技術の一端に触れていただきたいと思えます。なおエリナの場合、意識も記憶も敢えて残しておりますが、霊力の源である頭髮はありませぬので、抗う力は一切ございません」

身の毛もよだつ解説の間もエリナは直立したまま眉一つ動かさず、穏やかな微笑みすら浮かべている。ピタリと踵をくつつけて起立し、両手は腰に添えて、揃えた指先だけが外に開いている。言われなければマネキンと見間違えるほどの完璧な立ち姿だが、それこそ人形化が行われた証拠といえるだろう。

「うむ。あの岬エリナがここまで淫らな牝の身体に変わるとは――」

「まるで仏蘭西人形のようなだが、いささかやりすぎではありませんか」

「いかにも。素材の美しさが失われては元も子もありませんからな」

悦ぶ刃々牙の男たちがいる一方で、人間に近い者たちは若干不満があるようだ。もちろん斑目にとってそれは想定内の範囲内である。

「相手はあの岬エリナです。その力を奪い心まで完全屈服させるにはこれでも足りないくらいだとご理解ください。もつとも、臓器も凍結保存されており、お客様はいかなる要望にも応えることができます」

「ああ……エリナ……」

斑目の言葉を聞いた那海がガクリとうなだれる。母の目から見ても、エリナの状態はもはや絶対修復

不可能な完璧なまでの生きた人形であった。自分と同じく永久の淫獄に囚われ続けるしかないのだ。「ではお待たせしました。宴の始まりです」

斑目の声が狂宴の開始を静かに告げた。

(あ……)

瞬きを繰り返す青い瞳に、次第に意識の光が蘇る。エリナの精神活動が再開されたのだ。

(な……なんなの……ここは……?)

気がつけばステージの上に立たされ、多くの男たちの視線を全身に浴びている。スポットライトの強烈な光が動揺を誘い肌をジワジワと火照らせた。

「あ、あああつ！」

自分の姿を見て、エリナは悲鳴に近い声を上げてしまう。

「か、髪が……」

眼球が飛び出るほど目を見開き、陸に上がった魚のように口をバクバクさせるエリナ。あまりのことに理性が麻痺し、事態を把握できない。いや受け入れられなかったといったほうが正しいだろう。

あの美しい足首まで届いた黒髪が、筆狩師としての命とも言える霊力を秘めた黒髪が、ブロンドの金髪に変えられ、肉体もあり得ないほど淫らに変わり果てているのだ。

「こんな……身体まで……」

髪だけでなく乳房もお尻もすべて不自然なほど肥大化されている。淫らな人形に改造された我が身を見せつけられ、恐怖と怒りで身体の芯が震え出す。これではもう闘うことはおろか、日常生活すらまともにできないだろう。

「ククク、気に入っていただけましたか？」

「ううっ……殺すっ。絶対に殺してやるわっ！」

激しい怒りと憎悪のみが今のエリナを支えていた。そうしなければ絶望の深淵に沈み、二度と這い上が

れなくなってしまうだろう。

「あの状態でも戦意を失っていないとは、たいした精神力だ」

「しかし、それもいつまで保つことやら……」

狼狽えるエリナの様子を男たちは面白そうに見つめニヤニヤ嗤っている。

「その身体で何ができますか。さあ、あなたがどれだけ淫らな肉人形になったか見てもらうのです」

再び斑目が指を鳴らすと、エリナたちの身体が勝手に動き出す。

「ああ……エリナ……」

「お母様、諦めちゃだめよ！ 絶対……お父様が助けてくれるわ」

励ますもののエリナ自身も動揺を隠せない。まるで自分の身体ではないように、本人の意志を無視してステージ中央まで進み、両手を頭の後ろに組んで起立した。さらに用意されたスツールに片脚を上げる。

「うう、いや……こんな格好させないでっ」

ストリップバーのように扇情的なショーツは底がくり抜かれており、陰部は丸見え、照りつけるスポットライトがすべてを暴き出す。激烈な羞恥にエリナ的美貌は見る見るまっ赤に染まっていく。

「おおっ……中まで丸見えだぞ」

美貌の母娘が揃って女のすべてを晒し、観客は感動にも似た興奮にどよめいた。

エリナの花園はヘアを完全に失い、ツルツルの剥き卵のような肉土手に深い縦筋が走って一見童女のような。しかし捻じられた内膜は十分すぎるほど発育し、女の息吹を感じさせる。

母の花弁は漆黒の繊毛に飾られ、赤く充血したピラピラも大きく肥大して割れ目からはみ出すほど、牡丹の華を彷彿とさせる。

「やはり母親のほうが熟れているようですよ」

「エリナの新鮮な感じも私は好きですよ」

観客は好き勝手を言いながら母娘のストリップショーに興じている。甲乙つけがたい媚肉だが、やはり親子らしく、形はよく似ていた。

「あうう……見ないで……」

大勢の前で痴態を晒し、激しい羞恥にブライドは切り刻まれる。だがどうしたことか、恥ずかしく惨めな気持ちになるほどエリナの媚肉は火照り出し、愛液を湧かせては、ライトを反射してキラキラ輝く。(私の身体……どうなってしまったの?)

動悸が激しくなり息も苦しいほど。陶人形のように白くされた肌もたちまち桃色に上気していく。

それは母も同じようであううと喘ぎながら、太腿を溢れ出る愛液で濡らしている。改造の影響が外見に留まらないことを実感させられ、エリナは血が凍りつく思いだ。

「見られるだけで濡らすとははしたない母娘だ」

斑目の右手に一本の黒い鞭が握られている。よくある革製ではなく、黒い繊維を織り込んだ荒縄のような形をしている。

「お仕置きしてあげますよっ」

黒鞭がしなり、エリナの双臀に叩きつけられた。

パシィィィィッ!

「ぎやあああつ!」

容赦のない一撃で白桃のような尻タブに赤い筋がクッキリと刻まれる。

「まだまだいきませよ!」

パシッ! ビシィィッ! パシィィンッ!

「ンああつ! あうつ! くうあんつ!」

筋肉を通過し骨盤にまで響く強烈な打撃に、エリナは悶絶させられる。だが鞭から伝わるのは単なる痛みだけではなかった。

肌に燃えるような痛みが撃ち込まれ、それが消える前に次の灼熱が上書きされる。その熱さは皮下脂肪を震わせ筋肉を痺れさせ骨を揺さぶり、ついには

子宮まで届いた。

(な、なんなの……これ……?)

痛く苦しいはずなのに、なぜか身体の芯が甘く痺れてくる。一撃浴びるごとに、脳裏にはこれまで味わわれた快楽絶頂の記憶が呼び起こされた。

「クハハハッ! 鞭にも感じているのですか?」

斑目は嘲笑し、狙いをJカップの豊胸バストに変える。

パシッ! パシィィッ! ピシャアアンッ!

たわわな乳果が水風船のように跳ね躍り、観客の目を楽しませた。

「ンああ……ちがう……ああつ……そんなわけ……ない……あきやんつ!」

ドリーメイクの美貌を左右に振りながら、懸命に頭に浮かぶ淫らかな残像を振り払おうとする。しかし無数のミミズ腫れを刻まれた乳肌は、熱い汗を滲ませてオイルを塗ったように妖しく輝き出す。痛みだけではない何かが、水に広がる波紋のように乳房の奥に浸透してくる。乳房が燃えるように熱くなり、埋もれたままの陥没乳首もジンジンと疼き出した。

「はああ……はあう! どうして……胸があ……ああつ……熱い……あつ、ンきやあん!」

次第に悲鳴も艶めいた女の声に変わり、身を振る動きもセクシーなダンスのように見えてくる。

「フフフ。この鞭はあなたの髪から作ったモノなのですよっ!」

冷酷な鞭が唸るたび、エリナの艶やかな肌は赤みを増していく。

「ンあ……わ、私の髪ですって……あうううつ」

狼狽する間にも髪鞭から送り込まれる淫呪が効果を発揮し始める。肌という肌が敏感になり、わずかな空気の流れ、自らの息遣い、さらには突き刺さる無数の視線にすら反応し始める。子宮を締めつけられるような疼きに、眉がたわみ、綺麗なおでこに脂

汗が滲み出る。スツールに置いた片脚の脹ら脛がブルブル震え出す。

「バンヴォーラの肉体はどんな刺激も快感に変換してしまふ。そしてこの呪文は性感を数十倍にする効果があります。さあ、絶望の快楽を味わいなさい」

狂医師の冷たい手がギョウツと乳房を揉み込んだ。

「ンああつ! そ、そんな……うああ……ううっ」

斑目の言う通り、肥大化乳房は恐ろしいほど敏感になつていった。爆発的な乳悦が湧き起こり、意識が飛ばされそうになる。必死に耐えようと嘔み縛る真珠色の歯がギリギリと軋んだ。

「VIP席のお客様、どうぞお手元の筆で責めてやってください。それもエリナ嬢の髪から造ったモノにパイプを内蔵したものです」

「これは面白そうだ」

「エロ人形がヨガリまくるところを見てみたい」

筆パイプを受け取った五人の男女が、舌なめずりしながら奴隷母娘に近づいていく。

「ううつ! やめなさいっ! 身体を弄られたくらいで……あ、あんたたちなんか……はあはあ、絶対屈しないんだからっ!」

エリナは最後の矜持を見せて、碧眼で凌辱者たちを睨みつけた。

「フフフ。まだ人間のつもりでいるのか」

だがエリナが抵抗できないことを知っているゲストたちはゲラゲラと嘲笑し、うなじや脇腹や腋の下など、感じやすそうところを狙って筆をサワサワと這わせてくる。

「くう、うあ……やめ……あ、ああうんつ!」

淫呪の効果は凄まじく、エリナはたちまち息もつけないほどの昂奮状態に追い込まれていく。黒い穂先がスベスベの肌を擦り上げるたび、膣肉やクリトリスを責められたときと変わらない快楽が襲いかかってくるのだ。

「ひっ……ひやめえ……っ！ そんなにされたらあ……あ、あむ……あふうん」

悲鳴を上げながらクネクネと腰を振るが、複数の筆に取り囲まれて逃れる術はない。淫靡なベリーダンスに会場のボルテージはグングン上がっていく。

「ほれほれ、さっきの勢いはどうした？ 生意気を言ってみろ、セックスドールめ」

陥没乳首に筆が差し込まれ、グリグリ穿られる。

「あう……やめて……私は……に、人形なんかじゃないっ！ に、人間よ……ああんっ」

人として最後の一線だけは守ろうと、エリナは僅い抵抗を続けた。しかし心と裏腹に肉体は筆責めに反応し、色っぽい声が漏れてしまう。

（あ……ああ……胸があ……）

乳肉に埋まっていた乳首が見る大きく膨らみ、木の芽が伸びるように頭をもたげてきた。

「フフフ、乳首が出てきたぞ」

薄い乳輪が引き伸ばされ、内から爆ぜるのではないかと思うほどの圧迫感が乳房に満ちる。筆を押し返すようにして乳頭が盛り上がり、チュボンと軽薄な音とともに完全に全容が露出した。

「おおっ、あんなデカイ乳首が埋もれていたのか」

驚きの声が場内で湧き起こる。淫呪で改造された乳首はJカップの爆乳に相応しい大きさと、赤く勃起した様子は完熟のプラムのようだ。

「ああ……わ、私の胸が……」

変わり果てた我が身に絶望の声が漏れる。水着写真集でも絶賛された美乳は、今や牡の性欲を掻き立てるためだけのエロアイテムに成り下がっていた。

「フフン、まだ人間気取りとは生意気なヤツだ。人間以下の存在だとわからせてやるぞ」

「あきやああああんっ！」

ズブリとニップルに黒い筆先をねじ込まれ、ピーンと背筋を突っ張らせる。驚いたことに乳首の先端

が拡がって筆パイプを呑み込んでいくではないか。

「ああ……う、うそ……こんなあ……」

信じられない事態にまなじりが裂けんばかりに碧眼が開かれる。もともと敏感な陥没乳首が、さらに改造されたのだからたまらない。挿入されているだけで心臓がせり上がり、虐悦に燃える乳頭が筆をキユウツと締めつけてしまう。

「おらおら、お前は男に犯されるだけの存在、ダツチワイフと一緒になんだよ」

「んあつ、あああ……んっ！」

さらにスイッチが入られると、乳房の中で穂先がグイグイインと高速振動を開始する。電動歯ブラシのような細かな振動に乳腺をマッサージされ、エリナはきゅんと眉根を寄せて腰を振った。細かな絨毛が乳腺の一本一本に潜り込み、くすぐったさと混ざりあつた法悦を流し込んでくる。

「あああ……っ！ だめえ、抜いて……あああ……抜きなさい……うああんっ！」

予期しない責めに女の官能をグズグズに溶かされていく。さらに高速振動で乳腺の中の母乳が波打つて、淫らなバイブレーションが全身に広がり、脳まで痺れさせられる。

「僕はこつちじゃ。ムチムチの尻がたまらん」

「あうんっ！ だ、だめえっ」

老人は肥大化された尻タブをいやらしく撫で回した後、肛門に筆先をねじ込んだ。直腸奥深くを抉る筆パイプの快感は凄まじく、エリナは淫呪に染められた裸身をビクビクと痙攣させ、金髪を波打たせる。

「私はここに入れてあげるわ」

一番細い筆を持った女が狙ったのは尿道だった。クリトリスをつまんで持ち上げ、小さな秘孔にスウツと突き通す。

「ひっ！ ひい……っ！」

灼け串を通されるような激感に、エリナは絹を裂

くような悲鳴を迸らせ、裸身を弓なりに反らせる。思いも寄らぬ責めの連続に網膜に火花が散り、一瞬意識が飛びそうになる。だが改造済みの肉体はそんな刺激さえも快感に換えてしまうのだ。

「オシッコの穴でも感じてるわ、この変態人形」

「あ、ああうう！ ちが……ああ……私は……にんげ……ああんっ！」

三本の筆を同時にピストンされ、身体を粉々に砕くような快感が押し寄せる。被虐の炎がメラメラと燃え上がり、息も絶え絶えに喘ぐことしかできない。「見なさい。那海はもうマゾ人形になりきつたようですよ」

「ああ……っ！」

母のほうを見れば、同じように筆責めされながら派手に母乳を噴き上げていた。酸欠の魚のように口をパクパクさせ、アンアンと啼くばかり。だらしなく尻尾を下げ、長く突き出た舌からも涎がだらしなく糸を引く。清楚で上品だった母とは思えない牝のヨガリ顔だ。

「お、お母様……」

「あなたももうすぐ、ああなる。身も心も人間ではなくなるんですっ！」

斑目の鞭が唸り、再びエリナを襲う。狙いは筆を挿入されていないほうの乳房だ。

「パシッ！ ビシイッ！ パシインッ！」

「んあああつ！ お乳はぶたないで……あひいっ」  
乳責めに悶絶しながら、射乳絶頂に身を震わせる母の姿に、エリナは自分を重ねてしまう。それは期待にも似た戦慄きとなつて、双乳を震撼させた。乳腺がカアッと熱くなり、母乳を滾々と湧かせてしまう。

「ああ……っ！ だめ……む……胸があ……きちやう……出ちゃう……い、いやあ！」

エリナの呼吸が激しく乱れ、夥しい汗が胸の谷間を滑り落ちる。それに合わせ、他の筆の責めも加速





した。乳首も尿道も肛門も、火がついたように熱くなり、射乳欲求と混ざりあつた淫らな炎に全身の神経が灼き焦がされていく。まだ触れられてない蜜壺からははしたない牝蜜がドロドロと溢れ出て、床に大きな染みを作っていた。

「おっと。ここまでです」

だがエリナが達する直前、鞭がやみ、筆もピタリと動きを止めてしまふ。

「ハアハア……ああ……そんな……」

猛烈な焦れつたさにキユツと唇を噛む。感度を上げられた分、焦らし責めの威力も数倍辛く、皮膚を剥がれるような苦しさだつた。特にまだ指一本触れられてない臆洞が、刺激を求めてヒリヒリと疼く。

「自分がセックススドールだと認めるまで何時間でも焦らしてあげますよ」

官能の潮が引くのを見計らつて、筆責めが再開される。

「あ、ああ、やめてえ……あひい、ひいんっ」

身体の内側からも外側からも、淫らな振動が容赦なく送り込まれる。性感神経が短絡して火花を散らし、肉という肉が溶かされていく。

「もつと腰を振りなさい。淫らに舞うのです！」

「パシッ！ ビシッ！ パシインッ！」

命令に逆らえないエリナは、まつ赤に腫れたお尻をクネクネと振り始める。もつと鞭を欲しがっているかのようなセクシーな動きだ。

「ああうっ……こんな……身体が言うこと聞かないなんてえっ……ンああんっ！」

どんなに悔しくても、改造された肉体は敏感に反応し、胎内で淫らな熱気が加熱して沸騰する。だが決してそれが噴き出すことはない。まるで子宮が圧力鍋になったように気も狂わんばかりの淫欲だけが上昇を続けるのだ。

「ああお……だめ……もう、やめてえ……！」

乳腺と尿道とアヌスを抉られる快感と、鞭打たれる痛みが交互に襲いかかり、エリナはハアハアと舌まで突き出して発情期の牝さながらヨガリまくる汗の雫を撒き散らしながら牝尻をいやらしく振り立て、赤く腫れた乳房をタブタブと波打たせる。だがエリナが気をやる直前、またしても責めは止まつてしまつた。

「はあああ……こんなあ……ひどい……っ」

恨みがましく呪んでも、観客たちはニヤニヤ嗤うばかり。エリナたちの官能の昂りがおさまるのをじっくり待っている。そして十分冷却が終わつてから責めを開始するのだ。

「いやあ……もう……あああ……お願い……あ、うああんっ！」

全身から汗を噴き出し、湯上がりのように肌という肌を赤く上気させる。ただ一カ所放置されているヴァギナが物欲しげにヒクヒク蠢き、溢れた愛液で太腿の内側がグッショリ濡れていく。

「なにがお願いなのですか？」

「はあ、はああ……こ、これ以上焦らされたら……あ、頭がおかしくなるうっ！」

臆も肛門も尿道も、肥大乳頭も、すべてが寸止めの焦れつたさに燃えていた。狂おしいほどのもどかしさに堪えきれず、ついにエリナは我を忘れて叫んでいた。

「そんなにイキたいですか」

乳肌にくっくると鞭を這わせながら斑目がほくそ笑む。これまで何百人も改造し実験を繰り返してきたが、エリナには常人なら数分で発狂するほどの最高レベルの官能増幅を施してある。これに堪えられる人間はこの世に存在しないだろう。

「ひいうう……ああ……」

脳神経が焼き切れてしまふような焦熱地獄の中、エリナは眉をたわめた苦悶の表情でコクンと頷いて

しまふ。

「口に出して言いなさい」

「ううああ……イ……イキ……たい……」

もうワケがわからなくなつて蚊の鳴くような声を絞り出す。それからハツとしたように斑目から顔を背けたが、すべては後の祭りだ。

「ククク。あの岬エリナがおねだりとは」

「さすがの筆狩師も色人形に改造されては、手も足も出ないようすな」

観客はゲラゲラ嗤い、さらなる凌辱に股間を滾らせる。

（私……なんてことを……）

追いつめられていたとはいへ、あんなことを口走つてしまふとは。自らの弱さに打ちのめされると同時に、人形化改造の恐ろしさを実感させられる。

（私はもう……勝てないの……？ 本当に人形にされてしまったの……？）

まったく抵抗もできず、わずかな刺激にも牝さながらに発情しきつてしまふ。こんな身体で戦えるワケがない。たとえ救出されても、人間として普通に生きることも許されないだろう。重い絶望感がジワジワと忍びより、ダムに小さな穴が開くようにエリナの高貴な心を腐食させていく。

「では望み通りイかせてあげましょう。とびきりの相手を用意してあげましたよ」

アナウンスの後、ステージの奥から大きな黒い影が鎖に引かれてくる。

「ひっ！」

それは体長二メートル体重二百キログラムはあろうかというゴリラによく似た獣だつた。ぶ厚い獣毛に包まれた筋肉は鎧のようで、股間に生えたイチモツは棍棒のような逞しさ。普通の猿と違って二本の角と長い牙が伸びており、こちら側の生物でないことは明らかだ。

# 魔天使 リアリエル

漫画  
COMIC

おおただけし



リアリエル反撃開始!

な...

なんで...

槍だけは

コイツ  
だけは

ボクの  
トモダチ  
だったのに...

槍はかわらず  
あなたの  
友人ですよ

なんで  
槍がボクを  
...



槍よ！

ハ……ハハハ……

そうなのか

トモダチに  
殺されるなんて  
最高じゃないか……

あなたの  
孤独と苦痛は  
今おわります

その為なら  
槍は全魔力を使う  
つもりですよ

な……

何を……!?

く……っ  
槍でも  
魔力が足りないの  
ですか……っ



それなら…っ!



ジュン  
ジュン

ふっ  
太い  
いっ!!



くらっ!!

うっ

魔力が  
足りないならっ…

私とヨロイの分まで  
使いなさいっ!!

キキ

キキ

キキ

キキ  
キキ

キキ



はっ!!

はっ



はっ



はっ!!



はっ!!

熱血女刑事を責める数々の  
陵辱アトラクション!?

女刑事  
赤井千夏  
~痴辱の遊園地~

小説 さくらそら 桜空 挿絵 あるほ  
NOVEL ILLUSTRATION



闇夜を灯台の光が照らしては流れていく。船の明かりも少なく月は新月。暗い夜に岸壁に当たっては弾ける波の音が響く。

人々が寝静まった真夜中。海辺の倉庫とコンテナがあるだけの場所だ。そこに十数人の黒服を着た、屈強でガラが悪い男達が密談していた。

辺りには殺気と欲望が渦巻いており、いかにも犯罪をしていそうな雰囲気漂っている。厳重な警備から、大きな組織が絡んでいると予想された。

「これで交渉成立ですな」

「うむ。これからも頼む」

「勿論です。この街で黒岩さんに逆らったら、生きていけませんからな」

「がははまっただ。まあそんなバカは居ないだろうがな」

中央の二人は淀みなくスーツケースの中身を確認、笑顔で握手した。

その瞬間を待っていたように、二人にスポットライトが当てられた。

「うっ!!」

「一体何事だ」

手を翳して目を細め、二人は叫ぶ。警戒していたはずの部下も慌て狼狽していた。

「そこまでよ!」

二十代前半の美女が、淫刺とした声で待ったをかける。

「不夜城のボス黒岩、麻葉密売の容疑で逮捕します!」

「ふん、お前のような小娘に何ができる。笑わせるな」

鼻で笑う黒岩に対し、こめかみに青筋を立てる。

「貴方達の悪行はたとえ政府が見逃しても、この桜大門だけは見逃さない!」

ピシッと警察手帳を突き出して見せつける。

「つまり警察か。まわりくどい言い方しやがって」

「な、ぬあんですってー!」

くわつと目を剥き大声で叫ぶ女刑事の首根っこを、四十代の男性が掴む。

「落ち着け。冷静さを失ったら負けだ」

「でもカメさん」

血気盛んな赤井千夏は相棒に食い下がる。当然本名ではなく、素性を知られるのを防ぐ為のあだ名で呼ぶ。

「いいから」

「……はい」

しゅんとした短髪の刑事はしかし、すぐさま顔を上げて犯罪者達に鋭い目を向け、宣言する。

「麻葉密売の罪で逮捕します。抵抗するなら公務執行妨害も付け加えるんだからね!」

身長は一六十センチ程度で、外にはねたショートカットの似合う活発な女性だ。キリッとした眉と力強い双眸が小さな顔に映える。

紺のスーツに身を包み、胸が程よく押し上げる。健康的なお尻はスリットの入ったスカートを穿き、しなやかな足先は黒いピンヒールを履く。括れた腰に手を当てて投降を促す。

細身の女性に言われて大人しく捕ま

る者はいない。二メートルの巨漢が余裕の表情で行く手を阻む。周囲でも騒がしく交戦が始まる。

「邪魔しないで」

モデル体型でこそないが、特筆すべきはその瞳。意志の強さや眩い光を湛えた瞳により、彼女の美しさは際立っていた。それこそスーパーモデルにも負けない程。

「たつぷり可愛がってやるぜ」

巨漢が彼女がけて突進する。胸元へのタックルを後方に跳ぶことで回避

頭を下げていた大男の顎を膝蹴りで打ち砕いた。

白目剥いた大男のこめかみを、流れるようなハイキックで蹴り飛ばす。タイトなスカートから肉づきのいい太腿、白いショーツが露となる。だが構わず突き進む。

屈強な二人がボスの退路を確保するとともに、詰め寄ってくる。

「退きなさいッ」

殴りかかる男の鳩尾に肘鉄を決める。そのまま肘で顎を跳ね上げると、乳房が揺れて弾む。

逆方向からのフックを、半身を捻って躲す。同士打ちにし、勢いを利用して袖と胸倉を掴み投げ飛ばした。

「かはっ」

「ぐう」

「つぶ。さあてつと——っ!」

オートマチックの拳銃を構えた手下が視界の端に映る。捉えたと同時に拳銃を抜き、手元を正確に撃つ。

「ぎゃああつ」

押さえた手から血が流れ膝をつく。ベテランのカメさんは隙を逃さず男を取り押さえた。

「くそ、なんて女だ」

齢五十を過ぎた彼女のボスは、既に逃げの一手を打っていて車に乗り込む寸前だった。

「あつコラ待ちなさい!」

こいつだけは逃がしてはならない。拳銃を構え、地面に威嚇射撃する。

「ぎゃああああつ……覚えてろ!」

軽い火花のような音とともに、男は足を押さえて悲鳴を上げた。跳弾が運

悪く黒岩の足に当たってしまったのだ。手で這って車に乗り込み、黒塗りの高級車を発進させた。

「出せ、早く出せ!」

待機していた運転手は慌ててペダルを踏む。他の部下はボスを逃がそうと動く。パトカーのタイヤをこごとくパンクさせてから、捕まるなり逃げるなりしていた。

「逃げられたか」

だがもう一方の組織は全滅、あの男の顔も名前も分かっている。逮捕は時間の問題。

——そのはずだった。

黒岩と、取引に来ていなかった部下ともども消息不明。まるで居場所を掴めなかった。そうこうして一ヶ月が過ぎたある日、署に封筒が届いた。

「赤井、お前宛だぞ」

「あ、はいっ」

彼女は配属二年目の二十四歳で、署の皆に可愛がられている。長所は熱血で怯まず真つ直ぐ、逆にいうと直情的で頑固といえた。

「署に私宛に届くなんて誰だろ」

スーツを押し上げるDカップの胸元で、封筒の中身を確認をする。中にはDVDが入っていた。

パソコンで映像をチェックし、目が離せなくなる。にわかには信じられず、白い肌が青褪める。大きな瞳を驚愕に見開かせ、映像を凝視した。

「……何よ、これ。なんなのよ、どうして……くそっ」

映像の内容に憤りを覚える。

「あの、課長、カメさん」

課長とカメさんに指示を仰ぐ。

画面には鉄パイプで地面を叩き、園児を怖がらせる男の姿が映る。十人近い園児が泣き叫んでいた。

「元氣か赤井、俺はお前に撃たれた右足が痛くてな、疼くんだ。これを解消するには復讐しかないだろ？」

ひどい状況を背に、黒岩が彼女に一人である場所まで来いと言っている。

あだ名すら言っていないのに、どうやら裏組織の逆鱗に触れたようだ。

「私への恨みから、子供達をさらってこんなことをしたっていうの!? 無関係な子供を巻き込むなんて許せない」

激怒し画面を睨めつけ、血が滲む程きつく拳を握り締める。とめどなく怒りが込み上げてくる。

「畏だ、行く必要ない」

「課長!」

パン! 机を強く叩く。

「せめて態勢を整えてから——」

「それじゃ遅すぎます! たとえ畏だとしても私は……子供達を助けたいんです!!」

昨日までに十人近い園児が行方不明となり、捜索願が出されていた。

「お前が行って解放されるとは限らん死に行くようなもんだ」

「少しは冷静になれ。救いたい気持ち俺達も同じだ」

「……………」

俯いて押し黙る。

「俺達は仲間だ。一つになって動かなければ、人質を死なせてしまうこともある。分かるだろ」

「……………はい。ジュースでも買って頭を冷やしてきます」

「おう赤井。ジュース買いに行くなら俺は無糖のコーヒを頼む」

先輩が千円札をくれる。どうやら奢ってくれるみたいだ。

「すいません、少し一人になりたいんで遅くなりますよ?」

「いいっていいって。どうせこれから長期戦みたいだからな」

下を向いたまま廊下に出て、中から外が見えなくなると駆け出した。

(そんなの待ってられない! 私は一刻も早く助きたい)

もしも一人でなかったら発信機を持つていたら、子供を殺すと脅している

のだ。一人で行くしかあるまい。黙って飛び出し指定された場所へ急ぐ。

着いた場所はドリムランド。倒産の噂もある寂れた遊園地だった。急ぎたい時程慎重に、冷静になれ

カメさんの教えに従い、慎重に入っていく。

やけに陽気な兎の着包み(マスコットだろうか)が、近寄って紙を渡す。

『ようこそ赤井刑事』と書かれた看板を持つている。奴らの仲間だろう。急ぎたい彼女は苛立たしげに問う。

「ふざけるの?」

拳銃を人間の三倍はありそうな兎の頭に、ゴリッと突きつける。慌てて手を振り紙を指し示す兎。そこにはルールと称した条件が書かれていた。

係員に攻撃すると同じことを子供にする、とある。こいつや係員に手を出せない。

またいくつかのアトラクションと、スタンプの欄がプリントされていた。どうやらここを回れとのことらしい。

(制限時間内に最後まで辿り着くと子供を全員解放する、か。信じるしかないわね)

「でも、子供達の命をこんなゲームの賭けにするなんて絶対に許せない! 首を洗って待つてなさい、黒岩」

制限時間は九十分。人もまばらなのでそこまで並ばなくてもよさそうだと四つのアトラクションなら十分な時間といえた。だが時間をオーバーすると、

五分に一人ずつ殺すとある。

(最初はメリーゴーラウンドね。とはいえ急がなきゃ、どんな畏が仕掛けてあるか分からないしね)

今度は千夏が慌てる番だった。急ぎ地図を確認して二つ目の関門へ走る。メリーゴーラウンドは入り口からやや離れた位置にあった。居心地悪く子供達に紛れて並ぶ。

「あ、あの……」

いい大人がメリーゴーラウンドに乗るにはいささか恥ずかしく、言い澁んでしまう。係員も訝しむかと思いきや、ニヤリと笑って指示を出す。

「待ってたぜ。お前が乗るのはあれだ、せいぜい頑張るんだな」

そう言って指した先には白い木馬。(こいつも不夜城の、それともこ自己がグルなの? 解決したら徹底的に調べなさい)

「お姉ちゃんも乗るの?」

その時不意に下から声をかけられた。小さな男の子が明るく、無邪気に話しかけてきたのだ。

「うん、そうだよ」

屈んで目線を合わせ、にこつと微笑む。少年は彼女の二つ後ろの白馬に走っていく。

千夏はさつと格好よく飛び乗って跨ると、背筋のラインに沿って窪んでいるのに気付く。

「何これ?」

小首を傾げていると、ガシヤッ!

「ひあつ」

いきなり硬い感触が股間を突き上げてきた。

「な、なっ!？」

中央部がせり上がっていて、鋭角に尖る頂上がギチッと股間に食い込む。焦り狼狽するのだが、客が気になって平静を装う。

「くうっ」

（これ、足が届かないから股に食い込んで……キツイ。我慢できなくはないけど、じわじわとくる）

鋭い小山が陰裂に食い込む。これではまるで三角木馬だ。

卑猥な器具に跨がっている意識はあり、唇を噛んで羞恥心を抑え込む。

あの係員が合図して回り始める。秘裂に食い込む鋭角な馬の背中が、容赦なく痛みを与えてくる。意外と遅く回る木馬は、上下にも揺られて女刑事を翻弄する。

「ひやう。ん、あ」

陰部が擦れて恥ずかしさが込み上げる。いつもの明るい表情は鳴りをひそめ、苦痛や気恥ずかしさ、怒りが渦に交ぜになる。

「お姉ちゃ〜ん」

二つ後ろに乗っている少年が、無邪気に笑いかけ手を振る。何事もないうに振り向き、人の心を温かくする笑顔で応えた。

そうして周囲を見渡すと、子供達の親が写真を撮り、我が子に手を振っていた。（気付かないで）

こんな小さな子が、その親が見ているのだ。無様な姿は見せられないし、何をしているのか知られたくない。

白いショーツを淫裂の中に押し込み、皺が寄る。快感ではなく痛みを和らげるべく、愛液が滲む。

（痛い、やだショーツがアソコに食い込んでる。縦に動く摩擦で滑って、お尻がずれちゃう）

「んあう」

意外と強い上下動にお尻の位置がずれ、尻そうとした時に肉豆を擦りつけてしまった。

「い——っ」

早く戻らねば、ずっと擦られる。握っている棒に力を入れて、元の姿勢に戻す。それから肉豆に当たらない場所を探して腰を振る。

（見られて、る?）

数人の親が自分を見ている気がした。大人が子供の乗り物に乗っているのだから当然だが、もしかして気付かれたのではと深読みしてしまう。

卑猥な馬の上で苦痛に顔を顰める。激しい上下動に身体が揺さぶられ、ピストンしているみたいだ。

「ひっ……ひい……ひう」

なんとか肉豆からずらすようにするが、そうするとかえって恥丘を裂かれる。ニヤけている係員が目に入る。

（こんな奴に……っ）

屈辱に、心に炎を灯す。

股布と淡い草叢ではクッションにならず、摩擦して肉裂が熱を帯びる。

痛くない場所を探す腰の動きが、膣を擦りつける卑猥なものに見えなくもない。

（後ろに男の子が居るのに。こんな腰振ったらいけない）

少年に妙な気を起こさせているのはと、心配と不安から、所作を小さくした。

苦痛に美貌を歪め、耐える。

「くひい、は、ああ」

小さな子と親を対象にした、幼稚なメロディが恥ずかしさを倍増させる。クレヴァスを小山がギユムッと抉り、回転と上下に揺れる振動とが加わり、媚肉を摩擦する。

「つあ、ん。こんな痛いだけど、なのに……くそ」

（痛。痛いのにな、熱くなってきた。それに、変な声も勝手に出ちゃう）

苦痛を表情にも出せず疲労していく。腰がずり下がり、ぶりつぶりのお尻を突き出す。タイトなスカートの裾が捲かれて、太腿から上、白い股布が少年に見えてしまいうだ。無垢な少年に対して罪悪感と申し訳なさを感じる。

「見えそう、今の私を見ないで、お願いだから」

（早く終わって）

スカートのぎりぎり際どい部分に、親の視線が集まり、刺さる。慌ててスカート直そうとした。

「あんっ、あ、ひはっ。ふぎ」

急に機械が速度を増して、ぐいと深く押し込まれる。スカートはずり上が

り、スリットから白い布が見えてしまう。おおっと色めき立つ声に、カーッと耳まで赤く染めて俯く。

（んあ、鋭い部分が速く擦れて、それにショーツ見られた、あ）

一際激しい上下動に、ずりゆんと肉芽が摩擦された。

「んひ——っ」

ぶじゅんと愛液が滲み、羞恥に歪んだ顔を逸らした。

身体が火照る程の責め苦はやつと終わり、木馬はゆっくり止まる。疲れた表情で木馬から降りた。出口に行き、スタンプを押してもらった。

「ちよつと」

周囲から視かれぬよう配慮して胸倉を掴む。

「こんなのに乗せて、どうなるか分かってるんでしようね」

それには答えず男は不敵な笑みを浮かべる。

「俺に手を出したらどうなるか分かってるよな?」

「どうって——」

ルールにあった係員に攻撃したら、という一文を思い出した。殴れば子供に同じことをされる。

「くっ、ぐ」

怒気を孕んだ力強い目力で係員を威嚇する。

（私のせいで子供達に怪我をさせる訳にはいかない）

「おお怖い怖い。だが時間に遅れるだけだぜ? 確か五分遅れるたびに一人



殺す、だったか」

彼が指差した先には大きなデジタル時計がある。だが何か変だ。80と表示された横の、秒数がどんどん減っている。そして80から79に変わる。

「お前が入場した瞬間から始まっているんだ」

「くそっ」

悔しそうに呻き手を放して走り出す。寂れているといつても、遊園地はそれなりに大きい。次のアトラクションに着いた頃には、うっすらと汗が滲んでいた。

「ここね」

遊園地といえはこれ、ジェットコースターが待っていた。

急カーブあり一回転あり、ここで一体何をされるのか不安で堪らない。その不安を押し込め、なんでも来いと強気に恥辱へ向かう。

今出た所らしく、係員と黒いスーツの男以外誰も居なかった。ニタニタ気味の悪い笑みを浮かべている男達。一発ぶん殴ってやりたい衝動に駆られたが、ぐっと堪えて促す。

「で、何をすればいいの？」

面白くないと笑みを歪めるが、気にしてられない。

「ここでは流腸して乗ってもらおう」

はい？

「えっと……言ってる意味がよく、分からないんだけど」

「そのまんまの意味だ」

「ぼかんと大口開けて呆然とする。」

その際に背後を取られ、尻を突き出す格好にされる。股布を膝上までずり下げられ、千夏はようやく我に返る。

「ちよちよと待って」

「早くしないと客が来るぞ」

何せ一番人気の乗り物だ。人が少ないとはいえその内来るだろう。

「ケツの穴広げろ」

「嫌よっ。どうしてそんなこと」

「子供がどうなってもいいの？」

考えるまでもなかった。

恥辱にまみれ、畏怖に震える両手で尻の谷を割って、見知らぬ男に恥穴を公開する。すんすんと鼻を鳴らして匂いを嗅がれ、完熟トマトの如く顔を真っ赤にして、羞恥に身を焦がす。

「バカ！ そんなとこ、嗅ぐな！」

「美人でも臭いんだな」

「くくくく、この変態」

「あ、人が」

「え!？」

身体が強張り、跳ねて心臓が高鳴る。

「なんてな」

（こ、いつう。覚えてなさい、絶対、絶対に許さないんだから！）

ペロリと舐められ怖気が駆け上る。

戦慄し声が出ない。

ズブツとシリンドラーの先端を、窄まりに挿入される。窄まりがこじ開けられて異物が中に入ってくる。ガラス容器は冷たく、粘膜に触れると氷と間違えそうだった。

「ヒう。冷た、先っぽがお尻に」

「イヤ——っ！ 穴が、穴があ」

ゆっくり、じわじわと液体を腸内に送られる。覚悟はしていたが、実際入ってくるると手足をばたつかせてもがく。

「冷たいのが、入って、くるう。お尻が液体で——んうううっ」

（ああ、液体が腸内に流れてくる。うそお、こんなのおかしいわよ！）

異常な感覚に冷や汗がどどと噴き出す。腹部が張ってきてぐぎゆるるる、恥ずかしい音まで鳴る。

「——っは」

チューポン。音を立てて抜ける流腸器。やっど終わったと安堵したのだが、二本目を可愛らしい薄茶の穴に注入される。二回目といえど慣れない。ぐつと手に力を込めて耐える。

「うゝまたなの!？」

液体が身体の中に溜まっていき、重くなる。排泄専門の穴に入ってくる恐怖に、顔が血の気を失う。

「まだ出すんじゃないぞ」

（そんなの言われなくてもっ、でもこれキツイ）

身体の内側から張ってきて、排泄欲求が加速度的に高まってゆく。

こんなので、

（こんなのでジェットコースターなんて乗ったら……）

想像するだけで怖い。

次々と注がれる液体は計五本にも及び、細かった腹部は痛々しいまでに膨らんでいた。

今、このまま乗ったら女としての人生が終わる恥態、醜態が目に見えてい

る。

「栓をしてほしいか？」

不安に付け込む提案だ。願ってもないが訝しむ。

「うく、栓って、何よ」

「漏らしたくはないだろう？」

男を問ひ質すも、逆に問われた。質問の答えは漏らしたくない、だ。しかし不信感拭えない。

「それは……」

口ごもるが、お腹まで鳴っては意地を張っている場合ではない。

「漏らして困るのはお前だ。騒ぎが大きくなつて時間内に辿り着けるかな」

「分かった、わ」

（仕方ない、そう仕方ないのよ。だって漏らしたら子供達を救えないから）

与えられた逃げ道にするが。

「なら俺と乗ってもらう」

今まで静観していた黒スーツの男が歩み出る。なんでもカップル専用で予約制の座席があるらしい。

戻ってきたコースターの先頭に男が座る。恋人で楽しめるようにと少し低くなつていて、膝の上に座らされる。

（栓をするなら、早く、して。結構キツイのよ……お）

客の死角で股布を足首まで下ろされる。ジッパーの下りる音がして、慌てて振り返る。

「ば、何出してんのよ!？」

目を剥き驚く。亀頭を菊花に押し当てられ、最悪の想像が脳裏をよぎる。

「ちよ、まさかっ。いき!？」



「これで……ラストですわっ！」

——ズサッ！

ふたつに結わえた巻き髪が風に舞い、白銀のランスが吸血ヒルを貫いた。得物と同色の鎧を纏いし紫の瞳の女騎士——エルスは異形の最後の一匹が動かなくなつたのを認め、ふう……と肩で大きく息を吐く。

暗く冷たき迷宮——メイズVII。

まさかこの場所に再び、それもあのお方とともに訪れることになるうとは、奇異な縁に想い馳せながら振り向いたその先に「あのお方」——純白のドレスを纏いし同行者が、立っていた。「怪我などは、ありませんかエルス」「ええ。お心遣い感謝いたしますわアリオナ様」

後ろにいた女王の気遣いに、顔の前でランスを構え感謝の意を表す。

事実、無数の吸血ヒルに襲われたというのに、手傷らしい傷はひとつとして負っていないかった。

「アリオナ様のご加護のお陰ですわ」

戦闘中、幾度となく身を覆ってくれた温かな光。女王が施してくれた防御魔法は効果抜群で、以前は苦戦した異形どもの攻撃を苦にせず立ち向かうことができた。

フィオナ皇女の神聖魔法も強力だったが、女王の加護はぬくもりという実感を伴って、我が身に傷つくことを恐れぬ勇気を与えてくれる。

「……まだ軍務に復帰して間もないあなたに、このような危険な任を与えて

いるのです」

感謝し足りぬ、と女王は言う。

肩は露出し、胸元の大きく開いた純白のドレスが、成熟したボディラインを際立たせるようにびつちりと張りついているせいか。

申し訳なさそうに声を絞る彼女の様子は、年長らしい包容力とともに儂さも演出して、同性のエルスから見ても魅惑的だ。

加えて、魔法により体力を消耗したのか。女王は少々息を乱してもいた。

（そ、そのように赤らんだ顔で見られるのは勘違いしてしまします……）

膝裏まで伸びる艶やかな金髪に浅く指を入れ、かき上げる。そんななげない仕草までもが、吐息の乱れと高潮した表情のせいで、やたら艶めかしく映る。

「お疲れなのではありませんか？」

「……ずっと臥せていましたから」

もう大丈夫。一度大きく息を吐いて、アリオナはにこやかな笑みを差し向けてくれた。

「あっ、足元が湿っておりますわ。お氣をつけください」

——なぜ、ドギマギしてしまうのかしら。このまま見詰めてしまおうかな趣味に目覚めてしまおうですわ。

己の顔が火照るのを自覚して、エルスは先を急ごうと歩み出す。

暗く冷たい石段の上に、再び女ふたりの靴音だけが響き始めた。

誘拐されてしまった皇女フィオナの

消息を求めんがため。女王はただひとり

の供を連れ、「何でも望むもの姿を映す」という遠見の鏡を探しに、ここ——イセリア王城地下にあるメイズVIIへと足を踏み入れていた。

第二王子ゴルヴァーナを捕虜としたことで表向き帝国からの侵攻はやんでいるが、いつまた激しさを増すとも知らぬ戦線状況を思えば、今。このタイミングでしか魔窟へと潜ることは叶わない。

皇女の不在が広く知れ渡れば、同盟国との関係にも影響をきたしかねない。だからこそ表立った捜索団も組織せず戦線維持のために各騎士団を動かすこともせずに敵対国をけん制し、女王自ら魔窟へと踏み入ったのだ。

（娘が攫われたというのに……気丈なお方ですわ）

主君の覚悟の強さとともに、唯一の供に選ばれた光栄を受け止め、槍を握る拳にも力がこもる。

「あまり、気負ってはなりませんよ」

女王が柔らかな静かな、落ち着く響きの声をかけてくれた。

かつてこの場所でオークどもに純潔を奪われた。

そのことを主君は知っていて、だからより申し訳なく思ってくれているのだと理解できたから。

「……過分なお言葉、痛み入ります」

エルスは得物のランスを握り締め、気丈な笑顔で応じてみせる。

心優しき君、イセリアの麗しき大輪。

今度こそ守り抜いてみせますわ。かつてともに魔窟を訪れたフィオナ

皇女を守りきれなかったことを思い返し、決意も新たに、槍騎士が前を行く。

後方からは、女王が魔力を基にした灯火を手のひらに浮かべ、行く先を照らしてくれていた。

階段を下り、地下五階に到達してから、すでに結構な時間が経っている。

（四階までには、それらしきものも場所も見当たらなかった）

敵は階を下るごとに強さを増す。できるだけ早くに見つけたいものだが。

（だからこそ、深い場所に隠してあるとも考えられますわね）

息を吐き、まさに魔窟のごとく口を開いた地下迷宮入口に再び立った時のことを思い出し。エルスは悪寒を振り払うかのように空いた手で前髪を梳く。

以前フィオナとともに訪れたこの迷宮で。自身はオークに犯され、戦いの最中に部下である五名の女騎士ともはぐれ——彼女たちは、ノイル砦にてセリーヌらの手で救出されたとの報告を女王より直々に賜っている。

未だ面会を許可されない部下たちの病状を気遣う度、槍騎士の胸に後悔の念が渦巻く。

あの時。もつと自分が強ければ、彼女たちを見捨てる必要も、死の危険に晒すこともなかった。フィオナも、汚らわしい異形に翻られずに済んだのだ。

——だから今度こそは。自身のみならず部下の誇りも背負い、女王を守り

抜いてみせなければ。

「お出でになりましたわね……！」  
向かう先の暗がりから、また数多くの異形が迫っていた。

「女だ。人間の牝のニオイだア……」  
「チチチ乳！ でかい乳イイッ！」  
「揉み潰して、捻り潰して、は、はらわたまでぐぐって……ギヒヒヒ！」

ボルズ・ゴブリンを筆頭に、数多の異形の大群。総勢は目測の限りでは四、五十匹ほどか。ひよつとするとあの中どれかが部下たちを穢した相手であるのかもしれない。

「ギリ……ッ！」  
（わたしのことはかまいませんわ。でも、部下たちの……あの子たちの無念は暗らさせていただきますわよ！）

女王を守りながら、先陣を切ろうとする。その背に、ほんと軽く柔らかな手が触れた。

「私が敵の陣を乱します」

「で、ですがっ」

「大丈夫。私を……信じて」

振り向き見詰めた女王の姿は慈悲溢れる表情の中にも威厳を湛え、構えた手のひらは淡い光を放っている。おそらく皇女と同じ神聖魔法を使うのだ。

「光が敵の列を乱したら、エルスは陣のただ中へと斬り込んでください」

この状況下にあっても落ち着きと優しさを失わぬ女王の声を聞くうち、槍騎士の胸からも不安や恐怖といった負の感情は消え失せていた。

「イエス、ママ！」

会話する最中にも、敵陣は続々と数を増やし、距離を詰められつつあった。が、不安は感じない。

「いきますわよ、化け物ども！」  
石床を蹴って勢いをつけ、間合いを詰め。敵影の先端へと身を躍らせる。ニタつく異形の鼻先に接近し、白銀の槍を突き立てた。

「グギャアアアアアアアア！」  
始め、その叫び声は己が突き刺した豚鬼のものかと思っただけけれど——背から浴びた輝きのただ中にいる自分と、溢れた光に吞まれゆく魔物どもの姿を目にしてようやく、もつと大勢の敵が一齐にもらした断末魔の叫びであったことを知る。

「サンク・フィールド……！」  
女王の敵かな呪文とともに、白光が敵陣全体を包み、引き裂いていった。

——ぶひいひいひいひいひいひいッ！  
瞬時に三分の二ほどの異形が浄化の光に吞まれ、かき消える。

（……フィオナ様も同じ魔法を使われたと、聞かされましたけれど）  
きつと今日にしたものは、ルシィフに聞かされたその幾倍もの威力だ。

以前に皇女がメイズの扉の封印を強化した甲斐あつてか、女王はまだ笑みを湛える余裕があった。

——今だ！

元々陣形などに頭巡らせることもなく突っ込んできていた敵陣は総崩れ。光に裂かれたことで分散し、統率もまるで取れていない。

好機を、槍騎士は逃さなかった。

「セフンナ……セイバアア——ッ！」  
聖槍セルフェザーが輝きを放つ。女王が切り開いてくれた道——敵陣中央を駆け抜け、散り散りのボルズどもを神速の突きが追尾する。

「はああああああつ！ 消え去りなさい悪鬼ども——！」  
ズサ——ズサズサズサズサツ！  
胸、首、そして頭部。急所を刺し貫く傍から消し飛んでゆく異形どもの末路を目に、断末魔の叫びを耳朶に刻む。ケダモノがごとき咆哮、嗚咽混じりの阿鼻叫喚。戦場において人があがるそれと驚くほどに大差ない死にゆくものの最期を看取るのは、命奪う側の義務だ。

命をこの手で奪ったのだということ、忘れぬために——。  
「アリオナ様。お怪我はございませんでしょうか」  
対峙する者すべてを屠った後。槍騎士は再び女王の前で膝を折り、戦いの終息を報告した。

「ええ。ありがとう、エルス」  
異形どもの断末魔に悲哀を憶えたのか。少し悲しげに目を伏せながらも、女王は気丈に微笑みを捧げてくれた。

（……不思議なお方ですわ）  
無償の慈愛を、襲いくる魔物にまで注げるというのか。とすれば「敵に情けなど、甘いことを」——そう怒りを憶えてしまいそうなのに、なぜだか——相手が女王であるということ度を

外視しても、彼女に対してはそのような感情が湧き起らない。  
不思議といえは、最大神速での奥義を用いたのに、身体がほとんど悲鳴をあげていないこともだ。

（もしやこれも、アリオナ様の加護魔法のお陰ですか？）  
だとすれば、心強い話だ。幾度連発できるかは未知数だが、少なくともこれまでの限界「二回」を上回る回数分奥義を繰り出せる。

「参りましょう、アリオナ様」  
面を上げ、石畳を踏み鳴らし槍騎士が行く。ドレスの裾を手で持ち上げながら、アリオナも後ろに続く。  
屍は消えても魔窟の中に漂う死臭は残っていた。

エルスもアリオナも、吐き戻しそうになるのを懸命にこらえ歩み続け。

「エルス……！」  
女王が指さす先。小部屋のように奥まった岩壁に隠れるようにして、それはふたりの眼前に姿を現した。

「これが……遠見の鏡、ですの？」  
槍騎士の瞳に、逡巡の色が浮かぶ。鏡、という名称から、少女はそれこそ鏡と見間違えうばかりの清らかな泉を想像していた。

けれど、今まさに彼女の瞳に映し出されているのは——。  
「脈を打って……いますわね」  
巨大な——ちよつとした池ほどの大きさのカゴ状に編み込まれた物体。臓腑のような外見のそれが、ドクドク、

著者近況



まるで生きていくかのように鼓動を鳴らしている。

小部屋の最深部に鎮座するその「泉」の中には、底も見えぬほど真つ黒な液体がなみなみと溜まっていた。

「メイズの中にある代物なのです。城の古文書にも詳しくは載っていませんでした」

「アリオナ様はお下がりにください。まずは、わたしが確認をいたしますわ」

娘を想う母心、なのだろう。気をつけるよう言いながらも逸る気持ちを抑えられないでいる様子の女王を氣遣い、槍騎士は進んで斥候に志願する。

(グロテスクで正直あまり直視したくはありませんけれど)

これも騎士としての務めだ。込み上げる吐き気を飲み込んで、妙に饅<sup>マム</sup>えたニオイの液体を覗き込むと。

『隊長……助けてエエツッ!』

「……っ!?」

信じられない光景が、映っていた。

「どうしたのです、エルス?」

(い、いえ。何でも……っ!? こ、声が……)

心配げな女王の声に空元気で応じたつもりが、唇がパクつく。強張った顔を振り向けることさえできなかつた。

——何がしかの異常に、見舞われている。(で、でも、今しがたの映像はっ?)  
心が萎縮するのを自覚しつつ。女王に気持ち伝えられぬもどかしさに後ろ髪引かれながらも、吸い寄せられる

ように再度覗いてしまった泉の中に。

『産みたく、なあっ……いぎいあああああああああっ!』

やはり先ほどと同様。ノイル砦でセリーヌらにより救出されたはずの第三騎士団の女騎士たち。エルスにとつて

辛苦をともしした仲間でもある少女五人が、膨れた腹を抱え、大腿に開いた足をばたつかせている。

(……なぜ、ですの!)

なぜ、このような光景が映し出されているのだ。遠見の鏡は、望むものありかを示すのではなかつたのか——。

『それはぬしが望むもの。ぬしの部下の、最期の姿じゃ』

(だ、誰ですの!?)

背後のアリオナの声ではもちろんない。柔らかな口調なのにやけに刺々しい感じのする、おぞましき声。声は、

直接槍騎士の脳内に流れ込んでいた。

(最期の姿、ですつて? ……ふざけないで!)

部下たちはイセリア城下の医師に手当てされ、一命を取り留めたと女王から直々に通達があつたのだ。

『ほお。それを囁呑みにしたと』

(当たり前ですわ!)

騎士が主君を疑うことなどあつてはならない。女王の尊厳と自身の誇りを侮辱するがごとき発言に怒りを露わに目を剥いて。

『だが、君は彼女たちをその目で確かめたのか?』  
(それは……)

直後、謎の声の切り返しに詰まらされる。

傷の程度が深いからと面会は叶わなかつた。誇り高き騎士が不様な姿を見せたがりはすまいと解釈して、強く食

い下がることもせず、そのまま会わずじまいで女王の護衛についたのだ。

『会うのが怖かつたのじゃろう?』

(……違いますわ!)

そうではない。女王の命が急を要するものだから。だから——。

嘔み締めた歯の奥に、鉄の苦味が染み混じる。すぐ後ろにいるはずの女王の声は、とうに聞こえなくなっていた。

『ぬしら騎士は、国家の駒だ。戦が始まれば矢面に立たされ、誇りなどというお題目のもとに死を受け入れる』

誇りは騎士のもつとも尊ぶべきもの。そう口にしたはずが、乾いた舌ばかりがヒクヒクと動いて言葉にならない。

息苦しさの最中、それでも槍騎士は誇りの詰まった自身の豊乳を力いっばい抱きしめていた。

『見えるじゃろう? ぬしの部下らもボロ雑巾のようになるまで犯され、異形の子を孕んだのだ』

泉に映る部下たちの痴態。嬌声に、陣痛に耐えているらしき苦悶の聲が混じり込む。苦しうに喘いでいる——

なのに彼女たちは、いずれも涙と汗を漏らし、延々。壊れたみたいに啜っていた。

(……っ。ウソ、ですわ。こんな……こんなこと?)

もう、まやかしはたくさんだ。私は彼女らの誇りを信じている。声ならぬ声を張り上げ、居所の知れぬ声の主

ぶつける。

握りつ放しの拳の内にじつとりと、嫌な汗が滴るほど溜まり込んでいた。

『ほうれ。誇りを重んじる騎士様が、醜態を晒す者どもを始末するぞ』

幻聴のように轟く声は、明らかに悪意を持ってささやきかけてきている。

見ればその術中にみすみす嵌まるだけ。頭では理解できていながら。

ギ……リッ。嘔み締めた歯の奥で鉄の苦味が強まる度。逸る心を煽るように、胸奥の動悸が速まってゆく。興奮状態にありながらひどく全身が冷えていくような奇異な感覚。

恐る恐る覗き見た泉の中。そこに、五人の部下たちへ向け漆黒の刀身を振りかざす女の姿——セリーヌの背が、映っていた。

(や、め……)

ザンツ——。

(あ、あ……)

少しの躊躇も見せることなく。暗黒剣が手前の一番若い女騎士の首を刎ねた。次いで、生命力豊かな異形の詰まった妊婦胎。内で暴れる魔物の目

がけ、一突き——。

(やめなさいセリーヌ! その子たちはわたしの……)

大切な部下で、友人たちなのよ。それなのに——なぜ!

取り乱し、声が出ない咽をかき塗り

ながら叫ぶ。目の前の光景が真実なのかまやかしか。考える余裕すら、すてなくしてしまっていた。

「騎士にとつては誇りが何より大事なのであるう?」

鏡の中の彼女は、その誇りに従っただけじゃないか。そうささやいて、謎の声がほくそ笑む。

「誇りを尊ぶから……だから、彼女の命を……?」

「それ、そんな」

エルス自身、いつでも命を投げ出す覚悟はできていた。けれど、それはそれ故に仲間の命を犠牲にしようなどとは――。

「ぬしも以前。この迷宮で皇女の身を優先し、部下を見捨てたではないか」

「あ、あれは! 我ら騎士にとつて主君は、フィオナ様はこの身を投げ出しても守るべき……!」

言ってしまったって、ハツとする。たつた今考えていたことと同じだ。誇りを尊び彼女たちを始末したセリーヌと。自分たちのことは気にせず先に行つてと、そう言ってくれた部下の言葉に甘んじて、「自らが考える誇り」を優先した結果。

「私が……彼女たちを」

「殺したも同然だ――」。

「そう。ぬしも、あの暗黒剣の使い手も同じだ。王家のため。主のためなら仲間とて斬り捨てる」

泉は「望んだものを映し出す」のだ。繰り返しささやいて、男が啜う。

(……ッ! ……ッ! ……ッ! ……ッ!)

魂が、慟哭する。生まれながらに騎士となることを宿命づけられ、それが当然だと受け入れて育まれた魂が――。足元も行く先も、出口すら見えぬ迷路を進む。そんな感覚の中。

「おとなしく寝ておればよかつたものを。女王の供なぞに名乗りを上げた己を呪うがいい……!」

やけに遠く聞こえる男の声が耳朶を灼いたのを皮切りに、槍騎士の意識は闇色の檻へと吸い寄せられていった。

「エルス、どうしたのです。エルス!」

遠見の鏡を覗いた途端、痙攣を起こしたように震えて立ち尽くした槍騎士の肩を、駆け寄って揺さ振る。

棒のようになった肢体を強引に振り向かせて、驚愕した。少女の瞳からは輝きが失せ、視線も虚空をさまようように揺らぎ、定まっていなかった。

一目見て、異常な状態だと感じた。(いったい彼女の目に、泉に何が映つたというの……?)

懸命な呼びかけにも応じないエルスをひとまず背に庇う形で、泉とエルスの間に女王が身をこじ入れた瞬間。

「ドグンッ!」

「ひあつ……!」

突如下腹部から響いた胎動におののき、思わず半歩後ずさる。

「っ、どう……してっ?」

フィオナがメイズの封印を強化してくれて以降、回復した魔力の甲斐あつて「アレ」は落ち着いてははずだ。

それが、なぜ今になってまた――。「だ、だめっ。出てこないでっ」

喘ぎ喘ぎ発した声が小部屋に響き渡る。うあつ……おなが熱い、お、奥がうずく……ま、さか枷がっ?!

胎内で、異物が蠢く感触。心地悪くもむずむずともどかしい感覚を、確かに感じた。

イセリアの女王には、代々受け継がれてきた任務がある。メイズVII、特に強力な魔物が跋扈する地下六階以降への扉を封じ続けること。扉へ魔力を注ぎ続けることで、決して破れぬ強固な封印を堅持し続けてきたのだ。

メイズにこもり続けることなく、国務を行いながらでも魔力を扉へと供給するための呪物。それが代々女王の胎内に手術で植え込むことで、引き継がれてきた魔法生物。

子宮を覆い、密着する形で胎内に寄生するそれを、受け継いだイセリア王族は子宮枷と呼び習わしていた。

その枷の胴部分から無数に生え揃う触手が、無防備な腔壁を縦横無尽に駆け巡っている。いつになく活性化した様子で時折脈を打つては振動を伝え、抗いようのない甘美を与え続けていた。

「くうっ……ふ、あああつ……!」

熟れた腔洞がわななくのを、止められない。抑えがたい肉の衝動に、熱っぽい息を吐き零し。

たまらず前のめりに膝をついた。(どうして、今……なの。エルスの身

が危ないのにつ。フィオナを助けに行かないといけない、のにつ……)いつも通りなら、自慰をすれば納まるはず。なぜなら枷は女の分泌する蜜を糧として生きているのだから。腹が膨れればおとなしくなるはずだった。くちゅうっ……。

「ふあ、あはあうっ……」

濡れる――。そつとスカートの中に差し入れた指で己の股根を触つてみて、否応なく実感する。枷が嫌うためにもう十年以上も下着を身に付けていないソコは、すでに慣れ親しんだ異物の愛撫によつてたつぷりの蜜を溜め込んでしまつていた。

「こ、これだけ濡れるのにつ。ま、まだなの……っ、んっ、んふああ!」

最初は浅く、それでもエルスの身を案じていつもより早めに、気持ち強く濡れた陰唇をかき混ぜてみる。

が、肝心の子宮枷の反応は予想とは正反対のものだった。

「ッひ、ア!! な、なにつ……!」

ぐ、ぐぐううっ……。

濡れそぼつ腔口に数多の触手が這い寄ってくる。左右の腔壁に寄りかかる触手によつて内側から、腔がこじ開けられようとしている――。

「嫌……あつ!」

苦しい。怖い、怖い――。

胎内から膨れ上がる拡張感。苦痛と悪寒を伴うそれと、防ぎようのない粘膜への直接刺激。相反する感覚に交互に侵され、純白のドレスの胸元に汗が

浮かぶ。表情も苦悶と喜びを交互に湛え、こらえるように唇を噛む。

「あ、暴れないでっ、ツァ、ああ！」  
単なる淫具などでなく、原始的ながら意思を持ち行動しているそれに、懸命に語りかける。

これまでも、他国の王族や重臣と会談中、愛娘のフィオナとの対話の最中に枷がかんしゃくを起こし「食事」を要求することはあった。その度に甘い吐息を噛み殺し、懸命に平静を装ってきたが——今度のはまるで蠢動のレベルが違う。

寄生先の命尽きるまで自動的に糧の得られる胎内から、進んで枷が出ようとするなど、過去になかったことだ。  
（泉を覗いてフィオナを……いいえ、それよりエルスを安全な場所に……）

腔壁に吸盤状の触手がチュッチュと吸いついては、「力を抜け。そして腔の扉を開け放て」と催促をする。その都度胎の底から染み出るような疼きに侵されて、思考がまとまらない。

外からの刺激であれば抗えもするが、内側。防備しようのない女の胎の内部から湧き出る喜びの波は、瞬く間に女王の四肢隅々へと浸透していった。  
「くう……うあああつ！ おなか……が、つぁ！ つ……く……く……！」

蜜を吸い、女王の神聖なる魔力をも吸った触手群が、見る間に膨張し、手狭な腔内を圧迫し始める。  
張り裂けそうな痛みは、フィオナを産んだ時の陣痛に似て不規則にぶり返

し、陣痛の数倍もの痛苦を伴って女王の心身を苛み続ける。

なのに——腔内を這いずる異形の愛撫が。十数年の付きあいですっかり馴染んでしまった、隅々まで知られてしまったがために、容易く身を焦がし、痛みを緩和させてしまう。

（耐えなければ……ここで私が枷を暴走させてしまつては……く……く……）

枷の異変は、メイズ封印の効力に直結するのだ。重責が、女の肉体にすんでのところで歯止めをかけさせる。  
煩悶の最中。女王はようやくくひとつ

の答えに到達しつつかあった。  
——この、泉が。腹に納まる魔法生物「子宮枷」と同様に、生きているがごとく脈動する「遠見の鏡」こそが、枷活性化の原因ではないのか。

「……!? だ、誰です！」  
「……!? だ、誰です！」  
悶え、喘ぐ女王の耳に聞き慣れぬ声

が——先だってエルスにささやきかけたのと同じ声が轟いた。  
「遠見の鏡と呼ばれし、そこな泉も。そなたの胎内に生きているものと同じ魔法生物。なればこそ私はそなたを、この場にいざなつた」

「その……声は、あなた、はあうつ！」  
語る最中徐々に、徐々に変わりゆく。謎の声はアリオナに鏡の存在を仄めかした、老文官の声へと変質した。  
「新しい存在同士。ともに干渉しあい、活性化するのも道理。く……く……！」  
「最初から……つ、これを狙っていた

のですね……メイズVIIの封印をつ」  
「左様」

男はあっさり目的を認め。  
「貴公の胎の枷が暴走の果てに休止でもすれば。魔力の供給絶たれし封印の扉は……さてどうなりますかなア」  
「くつ……う、あつ!? ……それ、それは」

メイズVIIへの魔力供給が絶たれれば、早々に扉の封印は解けてしまうだろう。「つまり。貴公が懸命に自慰をして枷に蜜を与えようとしていた行為は」  
この場に——遠見の鏡の傍にとどま

っている限り。いや、一度暴走した枷を落ち着かせる手立てがない以上。餌をやりすぎた家畜が忘れて眠るがごとく。  
（枷の休眠、ふ、封印の解放を早めてし、まう、だけつ……ああ……!）

すべてが敵の手のひらの上で踊らされていたに過ぎなかったのだと、ようやく悟る。では、フィオナが誘拐されたというのも狂言であったのか?  
「いや。それは事実だ。聡明なる女王を偽の情報で騙せるとは思っておりませんでな」

多分に皮肉を含んだ口ぶりで、男は嗤いながら答えを述べる。  
口に出して言う前に答えが戻ってきた——つまりは、実際に話しているのではなく、お互いの思考がいずれかの方法により繋がった状態で、思念を讀み取りあっている、ということなのだろう。

（思念操作に長けた術者……つ）

そのような能力を持つ勢力を、少なくとも女王はひとつしか知らない。  
（グラマトンの、手の者……か!）

では、エルスを何らかの方法で異常な状況に陥らせたのも——。  
「供の女騎士には少しばかり夢を見てもらつておりますぞ。悪夢、じゃが」

男は淡々と、邪魔な女騎士を悪夢にいざなつただけ。告げて静かに嗤う。  
「くう……つう。なぜ……です。なぜメイズの封印を解こうなどつ！」  
祭政一致の聖教会においても、そのような施策が民に支持されようはずもない。——何かしら、自国にだけ及ぶ対策を講じてでもいるというのか?  
『では、せいぜい励まれますよう』

「ま、待ちなさい……つああああつ！」  
ドクン、ドクン——!

勢いづいた枷が、胎動する。同時に枷に包まれている子宮も激しく揺さ振られ、反射的に大量の蜜を腔内に吐く。喘いでいる間を幸いと、最大の疑問にのみ答えることなく男の気配はかき消えてしまった。

代々の女王の身に寄生し永らえてきた子宮枷は、イセリア王族の扱う神聖魔法に対して完全なる耐性を持つている。また、枷を不用意に傷つけ供給を怠らせたり、万が一死滅させてしまえば、結局封印は解けてしまう。

すべて、ここまで計算し尽くされた計画であったのだとすれば。まんまと罠に嵌まつてしまった——。母としての想いに駆り立てられ、王にあるまじ

き軽拳を取ってしまったのではないか。そう、後悔する余裕すら与えられず。

「あぐ！ う、うううう……っ！ い、やあああっ！」

吸盤に引つ張られた状態の膣肉が、にゅぶににゅぶとまた別の触手によって擦り立てられる。暴走した柵は際限なく蜜を欲し、膣内を暴れ狂っていた。

十数年来ともに生きてきた柵の責めに、完全に順応した膣ヒダが歓喜に濡れながらあつさり蜜を吐く。それによりいつそう、潤滑油と馳走を得た子宮柵が縦横無尽に暴れ回るのだ。

ぐぢゅっ、ぬぶぢゅぶぢゅっ！  
（ダメ……ダメです……っ。こんな、ああっ、鎮まつてええっ！）

神聖魔法も効かず、自慰で鎮める方法も取れはしない。八方塞がりの状況で、弱点を知り尽くされた柵の責めに耐え忍びながら、なおも思考を巡らせる。が、膣の奥まった部位を扱かれる度に背筋は反り、突き出した格好の胸が左右交互に、弾んで揺れる。

（フィオ……ナあああっ）

娘が助けを待っている。エルスも、今こうしている間に魔物に襲われかねない危険な状態なのだ。だから。だから、快楽に溺れている場合では――。

ぬぼっ！ ぢゅぢゅぶ！ ぐぼっ！  
「ひぐっ、ううう……！ かき、混ぜないでえっ……！」

胎内で攪拌された蜜液が、音を立てて触手に吸られる、その都度。強力な吸盤に引つ張られた膣壁が、慣れ親し

んだ喜びに否応なく打ち震えてしまう。忌避する感情を肉の快楽が凌駕し、徐々に侵食しつつあった。

ぬぼぢゅっ！ ぢゅぶぢゅぢゅう！

ズルズルにぬめる膣内を、かき分けかき分け数多の触手が出口を求め殺到する。もぞもぞと這われてはもどかしさに身が振れ、激しく肉粘膜に食いつく勢いで吸いつかれて、背筋を突き抜ける苛烈な衝撃に腰が震え、また止め処ない蜜を漏らす。

（閉じようとしてるっ、の……なのに、どうしてえっ）

後から後から染み出る蜜液が、かき分ける触手の手助けをしまつていて。意思に反して快楽に屈しようとしている身体の反応に、悔し涙が滲むのをどうにかこらえ、唇を結ぶ。

「ひっ！ あ、ああ……っああアア！」

我慢したところで、逃れる術はなく。結んだ端から声もれ出ていった。（許されないうっ。私が、私が我慢しなければ、この国は……イセリアの民が……っあ、ああアア……!!）

対策がない以上、少しでも我慢して最悪の結末を遅らせる他、ないではないか。膣圧を強めて柵の這い出るのを食い止めようとするれば、余計に暴れた触手群により強かに膣壁を弄ばれ、熟れた蜜壺は快楽に咽んだ分だけ、トロトロと濃密な蜜を漏らしてしまふ。

そんな様子を嘲笑うかのように、柵は胎動と蠕動をひっきりなしに繰り返して、膣口の閉閉をせわしなくさせた。

「……っ！ あ……っ！」

——つぶりゅ！

とうとう、一本の触手が、小さく開いた膣口から頭の部分だけを僅かに押し出した。それが合図だったかのよう。ズゴズゴと次々膣口を叩く、白く太い、何本もの肉触手たちが。

「いやっああアア……っ！ つひ！ んんうううおおうっ!!」

ぶりゅっ——ずりゅずりゅるるる！  
ぼんっ……びちびちびちびちびち！

目の前が真っ白に染まり、腰が抜けると同時に。一斉に、噴き出る大量の愛液に押し流されるようにスカートの内側に湧いて出た。

（あ、ああ……私は、何ということをつ……っひっ、あ、ああ……!!）

我慢を重ねた分痛切に、這い出る異物との摩擦が胎に染みる。それこそ腰が抜けてしまうほどの、苛烈で、触手の数の分だけ延々と続く快楽の大波が。代々女王が生涯をかけ納め続けてきた共生生物を暴走させ、部分的にとはいえだらしなく排出してしまつた。そんな深い絶望を肉の悦楽で押し流してゆく。

肉ピラを押し広げて這い出てゆく、触手の摩擦刺激にすら喘ぎをもらし、しどこの蜜をだだ漏らす。

それは出産にも等しい肉体の負担を軽減しようという、本能的な危機意識から分泌された——そういつた側面もあつたかもしれない。

「は、あ、はあ……っはっあ……うう。」

もっ……ダメ、なのに、いいいっ！

びぐん！ ぶしゅ……ポドポドッ！

だが、己への絶望とともに訪れた重たい快感の波に、女王の心身は押し潰れながら流され。まんまと罠に嵌まつた悔しさに足掻き、溺れゆきながら。

眼前。自身の股根——ロングスカートをまくり上げながら生え蠢き出て、床の上で跳ねる数重もの触手群。真新しい蜜溜まりの中を勇んで泳ぐ、そのおぞましき姿に戦慄した。

「子を産むがごとき状況下でも快楽に沈むとは。イセリアの血筋は生粋の淫乱ぞろいよな」

「っはあ、ああ……う、うう。違い、ます。これは、これはあああっ」

すでに謎の声が聞こえるはずもない。これは、自嘲をやめられないでいる己の弱き心が生み出した幻聴だ。ほつれ髪を梳き分け懸命に胸に言い聞かせ。

（早く、胎内に柵を全部納めないと。封印の扉への魔力供給が……!!）

暴走した柵に魔力を過剰に引き出されることで、消耗のペースが異常に速まつてしまつている。

（早くっ、早く、しないとっ）

活性化した触手が蜜溜まりの中で過剰摂取状態となり、一時的に休眠。魔力供給が絶たれるというパターンも考えられた。

焦りを生唾とともに飲み下し。膣口から出ている触手の根元部分を恐る恐る素手で掴んで引き上げ、膣内へと戻そうと試みる。



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**